

アルタイ諸言語の3グループ（チュルク、モンゴル、ツングース）、及び朝鮮語、日本語の文法は本当に似ているのか - 対照文法の試み

風間伸次郎

東京外国語大学

キーワード：言語系統、言語接触、類型論、対照言語学、アルタイ型言語

0. はじめに

アルタイ諸言語の3つのグループ、及び朝鮮語と日本語の間の系統関係は以前より問題にされてきた。しかし、アルメニア語の印欧語族への帰属を決定づけたような、(たとえ少数でも)精緻な音韻法則にもとづく核心的な語彙の対応はいまだ見出されぬままである。

したがってこの5者に系統関係を想定する基盤となっているものは、その文法的類似であろう。しかしこの5者の文法は本当に「似ている」と言えるのだろうか。類型論の研究がすすんだ現在、接尾型で膠着的な形態論や、SOV語順（及びこれと密接な関係にある修飾語-被修飾語の語順）の統語論を持つ言語は、世界の言語でももっともありふれたタイプであることがわかってきている。他方、インドの諸言語をみてもわかるとおり、語順等の特徴が影響によって変わりやすいということもわかっている。よって上記のような点をとりあげて「文法が類似している」と言っても、あまり意味がないだろう。

では文法の細部にも、偶然の一致とは考えにくいような類似点が見出されるだろうか。本稿はこのことをあきらかにするために、形式よりも機能に重点を置いて、問題の5者の文法的諸形式を対照してみることにした。

他方でこうした対照を綿密に行なうことは、次のような点でも有意義であると考えられる。近年、亀井・河野・千野（1996：28-9）によって、「アルタイ型」という統語類型が提案されている。しかし「アルタイ型」言語の本質的特徴、統語論的な可能性の広がり等はなお今後の研究課題であると思われる。したがってこのアルタイ型言語の典型としてあげられているアルタイ諸言語と朝鮮語、日本語の諸文法要素を綿密に対照し、その類似と相違の度合いを見極めることは今後の類型論研究にとっても重要な意味があると考えられる。

筆者はフィールドワークにもとづくツングース諸語の記述研究を専門としており、他の言語についての知識は十分でない。したがって誤りもあろうし考察も不十分な点があろう。他の言語の研究者の御指摘を乞う。またこれを議論の叩き台にこの方面での研究の発展することを期待する。なおトルコ語とモンゴル語と朝鮮語に関してはそれぞれ同僚の菅原睦氏と温品廉三氏と野間秀樹氏より多大な情報をいただいた。山越康裕氏と梅谷博之氏よりは、モンゴル諸語及

びモンゴル語に関して重要な情報をいただいた。ここに記して深く感謝の意を表したい。特に梅谷氏には本稿の不統一な点やわかりにくい箇所などについてもアドバイスをいただき、感謝の念に堪えない。ただし本稿の誤り等はあくまでも筆者の責任に帰すものである。

チュルク諸語には約 27、モンゴル諸語、ツングース諸語には約 10 の言語があり、朝鮮語と日本語にもそれぞれたくさんの方言がある。本稿ではなるべくこのことに注意を払うよう努めたが、チュルク諸語ではトルコ語、モンゴル諸語ではモンゴル語（ハルハ方言）、ツングース諸語ではナーナイ語からの情報が主になってしまい、チュヴァシ語や琉球諸方言など、要となる重要な言語の検討が不十分である。文献による古い時代の言語の状況の考察も全く不十分である。特に「このような現象は××語にはない」というような記述には注意していただきたい。「ない」ということを証明するためには全てを見なければならぬわけで、それはある意味で不可能である。

扱った文法事項も不十分で、特に語形成や補助動詞、動詞複合体の構成をはじめ、全く触れていない面も多くある。本稿を第一歩として、今後修正を含めて稿を重ねてゆきたいと考えている。

なお表記に関して、トルコ語とモンゴル語は引用したものを除き、一般的な正書法に従った。朝鮮語は河野（1955）の表記をもとに、便宜上若干これを変更したものをを用いた（*ə*を*e*で、*u*を*eu*で、*ŋ*を*ng*で表記している）。

1.0. 名詞とそのカテゴリー

1.1. 譲渡可能

明示的な譲渡可能の表示を持っているのはツングース諸語のみである。なお譲渡可能の接辞はツングース諸語の中でも所属人称をもつ言語に限られ、属格で所有を示す言語（ソロン語、満州語、シベ語）にはみられない（津曲 1992 : 266）。

[ナーナイ語]

mii jili-ji 「私の頭（私自身の頭）」	mii jili-ŋgo-ji 「私の頭（私の持っている獣などの頭）」
私 頭-1人称単数	私 頭-譲渡可能-1人称単数

なおオーストロネシア語族の言語では譲渡可能と名詞分類が結びついているが、ツングース諸語ではそのようなものはない。ツングース諸語の譲渡可能の接辞については次の論考も参照されたい（Boldylev 1976、風間 2001b）。

1.2. 性

元朝秘史蒙古語には、以下にみるように、主語（もしくはそれが修飾する語）の自然性（及び数、身分の上下）と一致するいくつかの形式があった（以下は栗林 [均] 1992a : 522-23 にもとづく、一部は日本・モンゴル友好協会編 1993 : 160 による）。

(1) 動詞の単純過去

-ba / -be (男性単数)、-bi (女性単数)、-bai / -bei (複数)、

-bai / -bei (指上形)、-ba / -be (指下形)

(2) 所有者の性に一致する形容詞的実詞形成接辞

-tu / -tü (男性単数)、-tai / -tei (女性単数)、-tan / -ten (複数)

(3) 形動詞予定形

-qu / -kü (男性単数)、-qui / -küi (女性単数)、-qun / -kün (複数)

(4) 数詞の「2」

qoyar (男性形) *jirin* (女性形)

なおこの他にも性の区別のあるいくつかの動詞語尾がある。

栗林 [均] (1992a : 523) によれば、「一般に、中世モンゴル語の一連の動詞終止形語尾には、2種類もしくは3種類の異形態を持つものが多く、それらの使い分けは、すでに区別を失っている部分も多いが、ある程度の傾向をもって、主語の性と数に呼応した使い分けを認めることができる。これらは、モンゴル語の、より早い段階に存在していた、性 (gender) と数の残存形態と考えられる」という。

チュルク祖語に性の痕跡は全くみられない (Róna-Tas 1998 : 73)。

ツングース諸語、朝鮮語、日本語には文法的な性のカテゴリーはみられない。

1.3. 数

1.3.1. 複数接辞

チュルク諸語ではもっぱらトルコ語の-ler²と同起源の形式が用いられる(チュヴァシ語の-semは後に置きかえられたものである (Róna-Tas 1998 : 73))。

ただしチュルク祖語では何種類かの集合性を示す接辞が想定されている (Róna-Tas 1998 : 73)。

モンゴル語では以下の4種類の複数接辞が用いられている。名詞の種類によって使い分けられている面がある一方、同じ名詞が2種類以上の複数形になり得る場合もあり、それらの間に文体的な差がある場合もある(温品 personal communication (以下では p. c.と略))。

(1) -(н)ууд² 最も一般的に用いられる

(2) -нар 主に「人」を示す名詞に、中でも代名詞、固有名詞、親族名詞、職業名詞につく

(3) -д 名詞派生接辞 -гч、-чによる派生名詞につく(ただしこの派生接辞がついても、「人」を示す名詞ではない場合にはつきにくい(山越 p.c.))

(4) -с 語彙的に限られて用いられている

ツングース諸語では言語によって少しずつ異なるが、*-sal, *-l を起源とする形式が用いら

れている。無生物につく例はあるが、少ない。朝鮮語では-*deur* が用いられ、これは無生物の名詞にも普通につく。日本語では「-たち」、「-ら」、「-ども」が用いられており、現代では、これらは「人」を示す名詞につくのが普通である（ただし「これ-ら」など例外もある）。

1.3.2. 「複数」の形式が示す意味

結論から言えば、朝鮮語以外の言語での複数形式は「近似複数」（多様性複数、とも）の意味を示しうる。

まずトルコ語の-*ler*²についてみる。

Ali'-ler と言った場合には「何人かのアリという名の人々」という意にも、「アリとその仲間（家族）たち」という意にもなる。

さらに、トルコ語では所有接尾辞との前後の位置関係で、多様性の意味が確定する場合もある。

teyze-m-ler 「私の母方のおばとその家族」、*teyze-ler-im* 「私の母方のおば（複数の）」

おば-1人称単数-複数

おば-複数-1人称単数

モンゴル語においては、こうした近似複数的意味がよりはっきりしており、複数形式は以下に見るようなニュアンスを持っている。すなわち以下でみる「複個数」的な意味を示す。

хот-ууд 「さまざまな都市」 *айл-ууд* 「各家庭」 *ах нар* 「兄を含む人々」

日本語で「お父さんたち」といった場合、これは父親が多数いることも意味しうるが、多くの場合、「父親及びその他の人々」という意味で用いられる。

他方、朝鮮語で *aboji-deur*、と言った場合には多数の父親を指すだけであり、「父親及びその他の人々」のような意にはならない（梅田 1991 : 63）。

以上にみたような「近似複数」の意味の実現、特にその名詞の特定性との関連について、山越（2001）がある。

1.3.3. 重複による複数

「複数形式」とみなしてよいかには問題があるが、トルコ語とモンゴル語には、以下にみるような語形成がある。まずトルコ語においては、名詞を重複し、二番目の名詞の語頭に *m* を添加するか、語頭の子音を *m* に変えるものである（以下の例は竹内 1989 : 451 による）。

ekmek mekmek 「パンやらなんやら」、*bardak mardak* 「コップなんか」、

gazete mazete 「新聞やら雑誌やら」

なお生産性は低いが、全く同じ形を繰り返して複数を示すことも、一部の語においてみられる（菅原 p. c.、例も）。

çesit çesit 「種々の」

kim kim 「人々の」(口語)

モンゴル語にも語頭子音の交替(mへの交替もしくは添加、他方mで始まる語は、一般にz,sと交替する、内蒙古語では方言によってt,s,ʃなどと交替する)を伴う重複法がある(以下の例は一ノ瀬 1992b: 289による、なおこの重複法に関してはKubo 1997に詳しい)。

дээл мээл 「モンゴル服やらなにやら」 үс мус 「水やらなにやら」

子音交替を伴わない単純な重複により複数を示す語もある。

уул уул 「山々」 (一ノ瀬 1992b: 289より)

ツングース諸語にはこうした複数的な意味を示す名詞の重複法はみられない。

満州語には一部の非情物名詞に重複による複数形があるが、生産的ではない。

se se 「歳々」、ba ba 「所々」、jugūn jugūn 「各路」、hacin hacin 「種々」(河内 1996: 71)

朝鮮語では重複はもっぱら擬音語・擬態語に用いられ、名詞の重複が複수에用いられることは少ない。以下のように副詞的に用いられるものは若干存在する。

jibjib 「家ごと」、nanar 「日々、日毎」、gosgos 「いたる所」、daidai 「代々」(以上の例はソウル大学校語学研究所 1988: 84-6、他にも gusegguseg 「隅々」、'enjei'enjei 「いついつ」、'yeisnar'yeisnar 「昔々」などがある)

日本語には重複による複数があり、複個数(分布複数)的な意味を示す。以下の例と説明は玉村(1985: 38-41)より要約したものである。

豊語複数が用いられる名詞の種類には、以下に見られるような意味的偏りがある。

山々 家々 所々 村々 町々 隅々 角々 (かどかど) くまぐま 津々 浦々 峯々 瀬々 国々 寺々 端々 (以上 場所性名詞)

神々 人々 我々 (以上 神格・人格名詞)

色々 くさぐさ 品々 様々 (以上 種類様態の名詞)

日々 月々 年々 前々 時々 のちのち あとあと 昔々 先々 (以上 時間性名詞)

いついつ これこれ それぞれ 我々 (以上 代名詞)

基本的な語で、地形を示すものが半ばを占め、その他の名詞も時間、人、種類など意味分

野に偏りがみられる。価値なきもの、卑小なものには畳語が用いられない。3拍以上の語では少ない（例外；所々、あさなあさな、心々）。

複数を表す場合は、かなりの多数を表す。「神々」、「山々」のように、「神の集団」とか[全ての山]とかのまとまりよりも、個々の神の集まり、個々の山の群れといった個性や個別性に基礎を持っている。 $1 + 1 + 1 + \dots = n$ のように、個性を残しつつその類の多数を指す<複個数>を示している。

日本語に子音交替を伴う生産的な重複はない（「なんやらかんやら」、「やっこさっこ」、「しどろもどろ」など副詞的な語彙が散見されるのみで、無論「複数」を示すものではない、なおここで連濁はこの種の子音交替とは別物と考える）。

1.3.4. 双数

やはり問題はあるかもしれないが、その意味から一応「双数」と呼ぶことのできる形式がツングース諸語に広くみられる。ただし用いられるのはもっぱら人間を示す名詞で、しかも意味は必ず近似双数である。その使用は一定の文脈に限られており、頻度もあまり高くない。

[ナーナイ語] asi-*molia* 「妻と二人で」

他のアルタイ諸言語、朝鮮語、日本語にはこのような要素はない。

1.3.5. 文中の他の要素による主語の複数性の表示

チュルク諸語、及びツングース諸語には人称接辞があるので、述語につく人称接辞によって主語の複数性が表示される。ただし3人称に関しては若干注意すべき問題がある（1.3.6.1.及び1.3.6.2.で後述）。

他の言語では、以下にみるように文中の他の要素、特に述語、中でも動詞述語による主語の複数性の表示が存在する。

1.3.5.1. 動詞（の語幹拡張）による複数表示

チュルク諸語において、いわゆる「相互」の形式とされているもの（トルコ語では-ş）は、かならずしも常に「相互」の意味ではなく、「多方向性」の意味でも用いられる。

her tarafta kuşlar uçu-ş-uyordu 「空いっぱい鳥が飛び交っていた」
あらゆる 側で 鳥が 飛び交っていた（竹内 1989 : 385）

モンゴル語においても、主語の複数性を動詞で表示することができる。主語があつて、その複数であることが明示されている場合には用いなくともよい（以下の2つの例は橋本・谷 1993 : 99 より）。

сайн бай-цгаа-на уу? 「こんにちは(二人以上の人に向かって)」
良い である-複数-現在 疑問

次の例のように、(これがつく動词语幹の意味によっては) 相互の意味になることもある。

долоо-д уулза-цгаа-я. 「7時に(私たち二人が)会いましょう」
七-に 会う-複数-勧誘

なおこの接辞を、栗林[均](1992b:511)は衆動態と呼び、ヴォイスに入れて扱っている。

Kullmann(1996)はヴォイスとアスペクトのカテゴリーに分けて扱っている。

栗林[均](1992b:511)によれば、さらにこの他に共同態:-лиц「(誰かと)いっしょに~する」、及び相互態:-лд「互いに~し合う」がある。

ツングース諸語の中でもウデヘ語では、動詞で主語の複数性を表示する。相互態もさらに別にある。

[ウデヘ語]

daugi-du-gə 「(彼らは)渡った」
再び渡る-複数-過去

他にやはり主語の多数性を示す接辞がある。これはツングース諸語の多くに見られる。

[ウデヘ語]

əmə-ktə-ə-ti 「彼らはたくさんでやって来た」
来る-多数-過去-3人称複数

日本語の古文では、「~つつ」に複数主体を示す用法がある。「~つつ」には文末に用いられる用法もあるが、基本的に副動詞的に用いられ、動作の反復を示すのが主な用法である。以下の記述と例は林・安藤(1997:886)による。

「つつ」が受ける句の動作の主体が複数である場合、「つつ」は「(皆)ソレゾレガ~(シ)テ」の意となり、複数の人々が同じ事柄を同時に行なうことを表わす。
女房十五、六人ばかり、みな濃き衣を上に着て引き返しつつありしに
「女房が十五、六人ぐらい、みな濃い着物を上に着て、それぞれが皆(裾を)折り返して
いたが」

1.3.5.2. 朝鮮語の複数表示要素(-deur)のfloating

朝鮮語で主語の複数を示す-deurは文中のさまざまな要素に自由につくことができ、いずれ

の場合も主語の複数性を示す（朝鮮語研究会 1989：240-41、以下の例も）。

'uri haggyo'ei=**deur** caig'eur manh'i bonaigo 'issseubnida.
私達の 学校に-複数 本を たくさん 送って います
(多くの人が：主語の複数性を示す)

'uri haggyo'ei caig'eur=**deur** manh'i bonaigo 'issseubnida.
私達の 学校に 本-複数 たくさん 送って います
(多くの人が本をたくさん：主語と本の複数性を示す もしくは、ある一人の人が本をたくさん：本の複数のみを示す)

'uri haggyo'ei caig'eur manh'i=**deur** bonaigo 'issseubnida.
私達の 学校に 本を たくさん-複数 送って います
(多くの人が：主語の複数性を示す)

'uri haggyo'ei caig'eur manh'i bonaigo=**deur** 'issseubnida.
私達の 学校に 本を たくさん 送って-複数 います
(多くの人が：主語の複数性を示す)

上記の例には無いが、文末の述語にもつくことができる。文中の2つ以上の要素に-**deur** がつくこともある（その場合、いずれの-**deur** も主語の複数性のみを示す）。2つぐらいまでなら文章語でも普通にみられるという。

他のアルタイ諸言語、日本語にはこのような統語的可能性はない。

1.3.6. 数の一致

1.3.6.1. チュルク諸語における動詞での主語との数の一致

複数の行為者をまとめた単位とみるかどうかによって、一致したり、しなかったりする。これは上述の複数数のニュアンスを思わせる（以下の例は池田 2000：102）。

[タタール語]

alar kilde-**ler** 「彼らはバラバラに来た」 alar kilde 「彼らはまとまって来た」

キルギス語では動詞に-**ler** を用いない代わりに、上述の「相互」の要素が、主語の複数表示のために多用されるという。

1.3.6.2. トルコ語の所有構造での被修飾名詞における所有者の複数性の表示

トルコ語で、evleri、と言った場合には次の3通りの意味解釈が可能である。

(1) 彼の複数の家、(2) 彼らの単数の家、(3) 彼らの複数の家

つまり、被修飾名詞（所有物）につけられた-ler²は所有者の複数性も表示し得る、ということになる（ev-ler-i と分析される）。もしくは、3人称の所属人称接辞に数の対立を認め、3人称単数を-(s) i、3人称複数を-leri²としなければならない（ev-leri と分析される）。なお、ウイグル語では上記の（2）及び（3）の解釈は不可能であるという。

1.3.6.3. 形容詞等の名詞修飾要素における名詞との数の一致

チュルク諸語ではウイグル文字文献に、形容詞や形動詞が複数接辞をとった例がわずかに見出されるという（なおこれは Dependent の方のみが接辞をとっているのであるから、一致というのには問題があろう）。

aq-lar bulit örlöp kökiröp
「白い-複数 雲が 立ち上って 雷が鳴り、」

中世モンゴル語においては、名詞と形容詞の間に数の一致がみられた（例は栗林 [均] 1992a : 522 にもとづく）。

Goa-s sayi-d öki-d
きれいな-複数 よい-複数 娘-複数

なお、ここでの修飾要素は、独立の名詞としては現代語でもなお用いられている（сайд「良い人たち、大臣 etc.（訳は小沢 1983 : 321 による）」）。

učuğan kö'ün üčüğe-d de'ü-ner
小さい（単数） 男の子 小さい（複数） 弟たち
（上の例は日本・モンゴル友好協会編 1993 : 160 にもとづく）

エウエン語、エウエンキー語など北方のツングース諸語において、こうした数の一致がみられる

[エウエンキー語]

gugda-l-duu urə-l-duu 「高い山に」
高い-複数-与格 山-複数-与格 (Vasilevich 1958 : 651)

1.3.6.4. 数詞等が修飾している場合の名詞における複数表示

トルコ語では数量を示す語が修飾している場合、-ler²は用いることができない。モンゴル語でもこうした場合、基本的に複数接辞は用いられない。

他方、ツングース諸語では任意ではあるが用いられた例がみられる（言語や方言によっても異なる、エウエンキ語内部での方言差については Vasilevich 1958 : 651 に詳しい対照表がある）。

[エウエンキー語]

juur bəje-*l* 「二人の人」

二 人-複数 (Vasilevich 1958 : 651)

朝鮮語、日本語では任意に用いることができる。

[朝鮮語]

'ai- <i>deur</i>	seimyeng	seimyeng'eui	'ai- <i>deur</i>
「子供たち	三名」	「三名の	子供たち」

1.3.7. 二重複数形

モンゴル語には次のような例がみられる（温品 p.c.）。

ОХИ-Д-УУД

娘-複数-複数

日本語でも、もはや複数の意味が感じられない場合に、見かけ上の二重複数形が生じるものがある。

「子供たち」「友達たち」

1.4. 指小・指大

チュルク諸語に指大辞はない。

ウズベク語では *bir-gina* 「一つだけ」にみられるような要素-*gina* があり、これは形容詞一般にもついて「やや～だ」の意味を示す。

トルコ語にもやはり *bir-icik* 「たった一つのかわいい、唯一の大事な」にみられる-*icik* という要素があるが、形容詞につくのは、「小さい」、「少ない」などの限られた形容詞の場合のみである。

モンゴル語にもやはり指大辞はない。

モンゴル語には指小辞 -*xan*⁴ があり、よく用いられる。数詞については「～だけ」の意味になる。

хоёр-*xon* 「二つだけ」

また、指小辞によって形容詞が「やや～だ」の意になることがまれにある(ойр-хон「やや近い」(ただし現在ではむしろこの派生した方をより頻繁に用いる))。

ツングース諸語では指小辞がよく用いられる。数詞については「～だけ」の意味になる。エウエン語、ネギダール語では指小辞が広く用いられるばかりでなく、指大辞もよく用いられる。エウエン語では指小辞が形容詞につき、「やや～だ」の意になる(ただしこれを単に形容詞の比較級として扱っている先行研究もあり、これに関しては今後の検討を要する)。

[ナーナイ語] *juur-kəən* 「二つだけ」(数詞についての例)

[エウエン語] *turaaki-nja* 「カラス(この名詞は普通指大辞とともに用いる)」

エウエン語にはいくつもの指大辞、指小辞があり、一つの名詞に指小辞もしくは指大辞が二重につく例も珍しくない。

[エウエン語](以下の例は Novikova i dr. 1991 : 90 より)

ətikə-kəjə-njə 「背の高い立派なおじいさん」

olra-ča-kan 「ちっちゃ～な魚」

日本語の中では、琉球諸方言、東北方言等において指小辞がよく用いられる。

以下には首里方言の「グワー」についての西岡・仲原(2000 : 42)の記述を要約した。

小さいもの、愛らしいもの、軽蔑すべきものに使う。「海」、「空」などもともと大きいもの、地名、疑問詞、人称代名詞などにはつかない。本来尊敬されるべき父母や先生、警察官などについた場合は、軽蔑、敬遠の意味合いが強くなる。)

トウジグワー「妻」、ツンムグワー「イモ」、イシグワー「石」、サキグワー「酒」、

ミーグワー「目」、タルグワー「太郎(ちゃん)」、

トウルバヤーグワー「ぼんやりした奴」、フラーグワー「馬鹿者」

他に東北方言の「棒っこ」、茨城方言の「蚊め」、「牛め」などがある。

1.5. 名詞類別

1.5.1. 助数詞による名詞類別

日本語、朝鮮語では名詞の形状に関して助数詞で名詞類別を行なうが、これはモンゴル諸語、ツングース諸語にはほとんど見られない(もっぱら満州語、バオアン語など漢語の影響を受けた言語にみられる)。ただしモンゴル語では *ширхэг* (原義は「かけら」) が助数詞的に用いられることがある。さらに以下のような表現もある(梅谷 p.c.、例も)。

нэг	аяга	цай 「お茶一杯」
1	お椀	茶
нэг	шил	архи 「酒一ビン」
1	ビン	酒

日本語とは異なり、朝鮮語では類別詞（助数詞）をつけないで固有数詞を裸で使うことができる（門脇 1992 : 227-8、下記の例も）。

han	bang 「一つの部屋」	du	caig 「二冊の本」
一	部屋	二	本
'adeur hana,	ddar	dur-'eur	du'essseubnida. 「息子一人、娘二人をもうけた」
息子	一	娘	二-対格 置いた

トルコ語には助数詞がある（松谷 1991 : 119 には 24 種類ほどの助数詞があがっている）。ただ、トルコ語で助数詞があっても省略できる場合が多く、また助数詞の中では **tane** あるいは **adet**（日本語の「1つ」「2つ」の「〜つ」に近い）が広く用いられ、他の助数詞を代用できる場合が多いという（松谷 1991 : 119）。なおトルコ語において助数詞としてよく用いられる **parça** にはやはり「かけら」の意がある。ウイグル語にはきわめて多くの助数詞があり、しかも多用される。

こうした数詞、類別詞（助数詞を含む）と名詞のなす統語構造及び語順に関する対照研究には、門脇（1992）がある。

1.5.2. 有生・無生

日本語には名詞の有生・無生に応じて「いる」と「ある」の使い分けがある（厳密には「不定方向に動くもの／動かないもの」による）。ただし日本語でも古代語及び和歌山方言では区別なく「ある」を使う。アルタイ諸言語にこうした区別はない。朝鮮語では非尊敬形においては区別なく 'issda を用いるが、尊敬形では 'iss'eusida 「おありになる」と gyeisida 「いらっしやる」の対立がある。

格をはじめとする他のカテゴリーと有生無生の関係に関しては後述する。

1.5.3. トコロ性

日本語の名詞は「トコロ性」（寺村 1968）によって分類される。「学校へ来る」とはいえるが、「*オレへ来る」は言えない。他には漢語にこうした対立があるが、アルタイ諸言語、朝鮮語にはこうした制限はない。

[朝鮮語]	
na=hantei	'oda
「私に	来る」（私の所に来る）

1.6. 格

1.6.1. 格の数と種類

以下の表はあくまでも便宜的なものである。すなわち同じ格の名称が与えられていても、実際の意味や用法の範囲については、言語間でさまざまなずれがある。それらについてはできる限り後述する。また諸言語の記述においては、ここで用いたものとは異なる格の名称が伝統的に用いられているものもあるが、これもあくまで対照の便宜のための変更である。さらに、ある言語で、ある形式が格であるか否か、という格の認定の問題は、それぞれの場合にさまざまな難しさを呈している。したがって以下にみる格の数に関しても、あくまで一つの解釈であることをことわっておく。

個々の言語の格の数に関して問題となる点について、若干の説明を補足しておく。

現代のトルコ語の道具・共同格は接尾辞ではなく、付属語(後置詞)であって、アクセントの移動を起こさない(林 1995a: 97)。他方古代チュルク語には道具格とみなすべき形式があった。現代のトルコ語では *kış-ın* 「冬に、冬の間」のような語に、化石的な残存要素として残っている。さらに古代チュルク語には方向格(-*γaru/-gerü*)もあり、これは現代トルコ語の *içeri* 「中、中の、中へ」(<**iç-gerü*)のような語にその痕跡を示している。様態格はこれを格の範疇のメンバーとするかについて議論があるが、いわゆる *pronominal n* が現れるという点で、処格や奪格と同様の振る舞いを見せる。

チュルク諸語の中でも、ヤクート語には属格、処格が無く、他方共同格、比較格、そして明示的な不定対格がある。これらの違いはツングース諸語やモンゴル語からの影響と考えられる。ただしその不定対格は、もっぱら命令形とともに使われるという点など、その機能にはツングース諸語の不定対格とは異なった面がみられる。

その他、チュヴァシ語では与格と定対格が同一形態である(庄垣内 1989: 872)。

モンゴル語に関しては、さらに欠格(*гүй*)や、方向格、様態格をみとめる立場がある。人称代名詞がこれらの要素をしたがえる時には、他の格語尾と同様に斜格語幹をとる。このことがこれらの要素を格とする根拠である。方向格の *pyy*は、副詞「下方へ、下流へ(*yyyy*)」が文法化しつつある要素である。

ツングース諸語の中では、おおまかに言って北の方の言語の方が格の数が多く、南の方が少ない(北はウラル、南はモンゴル及び漢語からの影響がそれぞれ考えられる)。

トルコ語	ヤクート語	モンゴル語	朝鮮語	日本語
主格 - φ	主格 - φ	主格 - φ	主格 =ga/=’i/=ggeise	主格 =ga
属格 - (n) in ⁴	—	属格 -ы ² /-ын ² /-н/-ий	属格 =’eui	属格 =no
定対格 - (y) i ⁴	定対格 - (n) i ⁴	定対格 -г/-ыг ²	对格 = r/=’eur/=reur	对格 =o
(不定対格 - φ)	不定対格 (分格) -ta ⁴ /-da ⁴ /-la ⁴ /-na ⁴	(不定対格 - φ)	—	—
与格 - (y) e ² (ただし存在の場所 は表わさない)	与位格 -ga ⁴ /-ka ⁴ /-ya ⁴ /-qa ⁴ /-xa ⁴	与位格 -д/-т	与格 hantai/=’eigei / =’ei/=ggei	与格 =ni
		(方向格 руу ² / луу ²)	向格 =’euro/=ro	方向格 =e
処格 -de ² /-te ²	—	—	処格 =’eise	処格 =de
奪格 -den ² /-ten ²	奪格 - (t) tan ⁴	奪格 -aac ⁴	奪格 =hantaise / =’eigeise 奪格 (時間) =bute	奪格 =kara
(道具・共同格 - (y) le ² /ile)	道具格 - (i ⁶) nan ⁴	道具格 -aar ⁴	道具・方向格 =’euro/=ro	道具格 =de
	共同格 -liin ⁴ /-diin ⁴ /-tiin ⁴ /-niin ⁴	共同格 -тай ³	共同格 =hago/= (’i) rang /=gwa/=’ wa	共同格 =to
—	—	—	到達格 =ggaji	到達格 =made
様態格 -ce ² /-ce ²	—	(様態格 шиг)	様態格 =cerem	—
—	比較格 -taay ⁴ /-daay ⁴ /-laay ⁴ /-naay ⁴	—	比較格 =boda	比較格 =yori
(格の数) 7 (9)	8	6 (10)	13	11

なお、以下のツングース諸語に付した I、II などのローマ数字は、Ikegami (1974) によって分類されたグループである。

I	I	II	III	IV
エウエン語	エウエンキー語	ウデヘ語	ナーナイ語	満州語
主格 -φ	主格 -φ	主格 -φ	主格 -φ	主格 -φ
—	—	—	—	属格 -i
対格 -w	対格 -wa	対格 -ba	対格 -ba	対格 -bə
—	不定対格 -ja	—	—	—
与格 -du	与格 -duu	与格 -du	与格 -do	与位格 -də
方向格 -tki	方向格 -tkii	方向格 -tigi	方向格 -či	—
処格 -la	処格 -laa	処格 -la	処格 -la	—
沿格 -li	沿格 -lii	沿格 -li	—	(沿格 dəri)
奪格 -duk	奪格 -duk	奪格 -digi	奪格 -jiaji	奪格 -či
離格 -gič	離格 -git	—	—	—
方向場所格 -kla	方向場所格 -klaa	—	—	—
方向沿格 -kli	—	—	—	—
道具格 -č	道具格 -t	道具格 -ji	道具格 -ji	道具格 -i
共同格 -ñun	—	—	—	—
指定格 -ga-	—	指定格 -na-	指定格 -go-	—
(格の数) 1 3	1 1	9	8	6 (7)

1.6.2. 格を示す形式の独立性

名詞の語幹末音等による異形態があれば、その格の形式と語幹との結合の度合いはより強いものとみることができるだろう。

この点から考えてみると、まずトルコ語では語末音及び母音調和による異形態がある。

モンゴル語では母音調和がある他に、属格・与位格・奪格（及び様態格）の場合には、「隠れた n」が現れる名詞がある。なおブリヤート語やカルムイク語では主格にも -n つきの形態が現れ、これがために -n 無しのゼロ語尾である不定対格との明示的な区別が生じるという（山越 p.c.、下記の例も）。

[ブリヤート語]

morin 「馬（主格）」 mor' 「馬（不定対格）」

朝鮮語では名詞の語末音による異形態がある。

日本語の場合は、間に別の要素が現れたり、それとの順序を入れ替えたりできる（「バスのみで行ける」に対する「バス-で-のみ 行ける」など）。異形態も持たない。つまり格の諸形

式の独立性はかなり高いといえるだろう。

1.6.3. 格のついた形の名詞的性格

以下の言語では、格のついた形が直接名詞述語として（つまり名詞同様に）用いられる。

トルコ語 o kitaplar kütüphane-*de*. 「それらの本は図書館に（ある）」（林 1995a : 88）

モンゴル語 найман давхар-*т?* тийм, найман давхар-*т*.

8 階で、ですか? はい、8 階です。

朝鮮語でも用いられる。

donggyeng-'eise (= 'yo) . hyeng-hantei (= 'yo) .

「東京から」

「兄さんに」

日本語でも用いられる。

「あげたのは彼にだ」「来たのは東京からです」

これに対して、ツングース諸語ではこのように格のついた形式は直接名詞述語としては用いられないものと思われる。少なくとも筆者はまだそのような例を知らない。

1.6.4. 二重格（ある格の形式の後ろに、さらに他の格がつきうるか）

チュルク諸語では一つの名詞に二つの格の形式がつくことは基本的にない。ただ人称代名詞及び指示代名詞においてのみ、属格の後ろに後置詞起源の道具・共同格 *ile* が現れうる（benimle 「私と」、ただし口語では *benle* もある）。

モンゴル語においては、属格、共同格（及び欠格、様態格）の後ろに他の格が続きうる（橋本・谷 1993 : 93-4）。中でも、次の例に見る属格-与位格の連続は、他の連続とは異なり、かなり高い頻度で用いられる。

Баатар-*ын-д* 「バトルのところで」

与位格と奪格の連続は、「家」という名詞においてのみ観察される。

гэр-*т-ээс* 「家から」

指示代名詞の次のような形も、歴史的には与位格と奪格の連続にさかのぼる可能性がある。

ЭН-Д-ЭЭС「ここから」、ТЭН-Д-ЭЭС「そこから」

ツングース諸語では基本的に格が二重につくことはない。

朝鮮語では向格、与格、処格、奪格、道具・方向格、共同格、到達格の後に属格、様態格、比較格、主格(否定の場合のみ)が続きうるし、さらに、向格-道具・方向格、向格-道具・方向格-属格、向格-対格、奪格(時間)-主格などの連続がある(菅野他編 1988:1020)。

日本語では属格が後項要素として他の格に続くことがある(～への、～での、など)。ただし*～がの、*～をの、*～にの、の結合はない。

他方、日本語では奪格と属格の連続によって示さねばならない場合に、トルコ語では奪格のみを用いて表現することができる。すなわち、これは言いかえれば、トルコ語の奪格名詞は動詞だけでなく、直接名詞をも修飾することができるということである。他の言語の格の諸形式には、こうした用法は見られない。

anne-*den* bir mektup 「母からの手紙」(林 1995a:93)

1.6.5. 格と有生・無生

チュルク諸語、モンゴル語においては、有生・無生に関する格の使い分けはない。ただしモンゴル語では一部の格の使い分けに関して、「人間名詞」対「非人間名詞」の対立がある(1.8.2.で後述する)。

朝鮮語の与格-'eigei/-hantai は有生の名詞及び代名詞に、向格-'ei は無生の名詞及び代名詞に用いる。

日本語では、(述語にもよるが)出発点を示す格に関して、無生物が主語の場合には「を」が使えず、「から」を用いなければならないという制約がある。

煙が煙突から出ている *煙が煙突を出ている

琉球語の中には主格及び属格において、有生・無生による使い分けがある(1.7.2.で後述)。

なおツングース諸語における離格と奪格の対立もこうした有生・無生の対立とみなすことができるかもしれない。

1.6.6. 明示的主格

日本語、朝鮮語には明示的な主格があるが、アルタイ諸言語にはない。ただしエウエン語には一部の要素(主に代名詞)に明示的な主格の表示(-k)がある。

1.6.7. 対格の定不定と部分格

1.6.7.1. 不定対格と部分格

不定対格は、モンゴル語やトルコ語では無語尾の形式である。ただし定対格と不定対格の使い分けは、名詞の定不定のみによるのではない。名詞が動詞直前の位置を離れた場合にも定対格が用いられる。他にも形態的・統語的・語用論的条件が関与している(栗林[裕] 1989)。それゆえにトルコ語に関しては、不定対格の名詞と動詞の連続を一種の抱合とみる立場がある

(栗林 [裕] 1989)。満州語ではやはり無語尾の形式が不定対格的な意味をもつ(田村 1990)。しかしその一方、一部のツングース諸語 (I 群のエウエンキー、ソロン、ネギダル語) には明示的な不定対格がある。この格は、不定の物、総称的な物、全体ではなく部分、などを示し、否定とともに使われるという点でウラル諸語のいくつかに見られる部分格とよく似た働きを示す(風間 1997)。

[エウエンキー語] (不定対格の例、Konstantinova 1964)

不定	mookaar-ə	gənəkəl,	taduk	mookaar-wə	ədu	nəkəl.
	薪を (不定対)	集めに行け、	それから	その薪を (定対)	ここに	置け
部分	ukummi- <i>ja</i>	uŋkukəl!				
	牛乳 (の一部) を	注げ。				
否定	omolgil	ñarbakir,	unta- <i>ja</i>	aačın	bičəətin.	
	若者たちは	裸足で、	靴	なし	であった	

実際にこれを部分格と呼ぶ研究者もいる (例えばソロン語の記述である Poppe 1931)。さらに、ナーナイ語では処格に「部分」を示す用法がある。

[ナーナイ語] (処格の部分格的用法)

uikə-wə duktəuri.

戸-対格 叩く 「戸全体を両手でバンバン叩く」(風間 1997 : 109)

uikə-lə duktəuri.

戸-処格 叩く 「ノックする、戸の一部を軽く叩く」(風間 1997 : 109)

ñoani mapə-wa miawam-*dola*-ni garpaxani.

「彼は クマを その心臓から 撃った」(風間 1994 : 47)

モンゴル語、トルコ語では奪格にやはり「部分」を示す用法があるが、朝鮮語や日本語にはこうした「部分」の用法をもつ格の形式はない。

[トルコ語] (奪格の部分格的用法、林 1995a : 93 による)

öğrenciler-*den* Hasan Japonca biliyor.

「学生たちのうちで ハサンは 日本語を 知っている」

o su-*dan* içtim.

「その 水 (のうちの一部分) を 飲んだ (私は)」

hırsızı kolun-*dan* tuttum.

「泥棒を 腕から つかんだ (私は)」(Lewis 1967 : 38)

[モンゴル語] (奪格の部分格的用法、清格尔泰 1991 : 169-70 による)

qančui-*ača* čingyayaqu 「袖を引っ張る」

budayan-*ača* ni ideku 「飯（の一部）を食べる」

tuyul-i segül-*eče* ni tataysan

「小牛を 尻尾から その つかんだ」（「小牛の尻尾をつかんだ」のような構文も可、この例は筆者調査による）

yar-*ača* ni bariqu 「彼の手をつかむ（niは3人称の所属人称接辞；筆者注）」

なお最後の例に関して、対格を用いることもできるが、その場合はただ単につかむ感じであり、他方奪格を用いた場合には引っ張るようにつかむニュアンスが出るという（温品 p.c.）。

1.6.8. 指定格

これまでの研究において、ツングース諸語の多くに見られる「指定格」とは、(1) 必ずその後に入格接辞をとり、(2) 「～のための物」という意を表わし、(3) 統語的には目的語を示す、ものとして記述されてきた。しかし自動詞でもこの格をとるものがあり、しかもこの格をとる動詞の意味範囲は限られている（もっぱら「発見、獲得、追及、作成、出現」など、その対象が行為の後から生ずるものばかりである）ことがわかった（風間 1999a）。指定格と、先に述べた不定対格はツングース諸語の間にみられる両者の分布が相補的である（下記の表を参照）ので、共通の起源に遡る可能性がある。機能の面でも、人称接辞を伴った不定対格は指定格的な用法を示す。

他のアルタイ諸言語、日本語、朝鮮語にはこのような格はない。

ツングース諸語における指定格と不定対格の相補的分布

	指定格	不定対格
エウエン語（Ⅰ）	-ga/-ŋa	なし
エウエンキー語（Ⅰ）	なし	-a/-ja
ソロン語（Ⅰ）	なし	-a/-ja
ネギダル語（Ⅰ）	なし	-a/-ja
オロチ語（Ⅱ）	-laa/-jaa/-naa	なし
ウデヘ語（Ⅱ）	-na	なし
ヘジェン語（Ⅱ?）	なし	なし
ナーナイ語クル・ウルミ方言（Ⅰ+Ⅲ）	-na	なし
ナーナイ語（Ⅲ）	-go	なし
ウルチャ語（Ⅲ）	-ju	なし
ウイルタ語（Ⅲ）	-ddoo	なし
満州語（Ⅳ）	なし	-∅
シベ語（Ⅳ）	なし	なし（?）

[ナーナイ語] (指定格の例)

mii aagbi dan^{sa}-go-iwa gačini.
 本-指定格-一人称単数
 私の 兄は 私のための本を 買った

[エウエンキー語] (人稱を伴った不定対格による指定格的用法の例、カルル・メンゲス 1953)

Kyldnakaan mata Məŋunkaan ahaatkaanma ahyy-*ja*-wy
 ｷﾙﾄﾞｶﾝ (という) 英雄は ㄇꜰｶﾝ (という) 娘を 妻として (自分の)
 (娶った)

1.6.9. 場所・時を示す格 (もしくは格に準ずる形式)

1.6.9.1. 「起点・出発点」を示す格

朝鮮語では起点と動作の場所を示す形式が同形だが (-'eise)、日本では鳥取方言の「カラ」にそうした用法がある (「学校から勉強した」)。

1.6.9.2. 「通り道」を示す格

通り道の意はモンゴル語では道具格、トルコ語では奪格もしくは対格 (「道に行く」のような場合) で示される。

ツングース諸語の多くは「通り道」を示す特別な格を持っている (浴格、もしくは縦走格とも)。ただし日本語のように対格で通り道が示される動詞もあるようだ。ナーナイ語では浴格がなく、処格が奪格的意味と浴格的意味を併せ持っている (処格の他に奪格があるが、こちらは実際にはあまり使われない)。

朝鮮語では対格の他、道具・方向格も使われる。

日本語では対格が用いられるが、九州西部の諸方言では =kara が浴格・道具格的意味を示す (「道から行く」「船から行く」など、万葉集やその後の文献にも見える語法であるという、岡野 1988 : 222)。

1.6.9.3. 「到達点」を示す格

トルコ語で到達点を明示する際には、与格の後に katar/dek/değin という後置詞を用いる。モンゴル語では、хүртэл「～に至るまで」(хүр-「届く、及ぶ」の副動詞形) を用いる。ツングース諸語でも、例えばナーナイ語の「-方向格+後置詞 siak」のように後置詞を用いた到達点の表現がある (場所にも時間にも用いられる)。

朝鮮語は=ggaji、日本語は=made を用いる。

1.6.9.4. 時 (の「起点」と「到達点」) を示す格

日本語、モンゴル語、トルコ語において場所の起点を表わす奪格等の要素は、時間の起点を示すのにも用いられるのに対し、朝鮮語では空間的な起点には-'eise、時間的な起点には-bute

と、異なった形式を用いる。

トルコ語、モンゴル語においては、場所の到達点を示す要素(上述)が時間の到達点を示すのにも用いられる。

1.6.9.5. 道具格が示す場所的意味

道具格の形式は、日本語では動作の場所(=de、琉球諸方言を除き)、朝鮮語では方向及び通り道(=euro/=ro)、モンゴル語では通り道(-aap⁴)、のように場所も示すが、トルコ語、ツングース諸語では場所を示さない。満州語でのみ属格と同形である。

ちなみに朝鮮語と日本語には、動作の場所を示す格と、存在の場所を示す格の対立があるが、アルタイ諸言語では同じ格を用いて表現される。

1.6.10. 「なる」のとり格(変格もしくは転成格)

トルコ語の ol-、モンゴル語の бол-、ツングース諸語の o- (以下の例のナーナイ語では osi-) は、主格の名詞の他に「変化後の対象」として無語尾の名詞をとる。他動詞でも、もしくは、他動詞化しても、やはり無語尾の名詞をとる。

[トルコ語] padişah İbrahim'i sadrazam yaptı.
スルタンは イブラヒムを 大宰相にした (林 1995a : 100)

[モンゴル語] хүүгээ эмч болгосон
息子-再帰 医者 なる-他動詞化-過去 「自分の息子を医者にした」

[ナーナイ語] ŋoambani zven'evoj osiwaanġkipu.
彼-対格 班長に なる-使役-過去-1人称複数
「(我々は) 彼を班長にした」(Onenko 1980)

これを主格の名詞とみてよいのか、それとも主格とは別の格のついたものとみなすべきか、現時点では筆者にはわからない。その形式もゼロがついたものとすべきか、何もついていないと考えるべきかもわからない。先行研究での取り扱いもさまざまで、定説は無いようだ。主格とみなせば、二重主格文をみとめることになるが、以下で見るように朝鮮語ではこの構文で実際に二重主格文が現れる。

なおこうしたアルタイ諸言語では、変化前の名詞が欠けた一項動詞としても上述の動詞を用いる。言い換えれば、これらの言語の「なる」を意味する動詞は、日本語に訳すと「できる」にあたる意味も持っているということである。このことは上記の名詞を主格と考える根拠の一つとなるのではないだろうか。

[トルコ語] *akşam olmak*. 「夕方になる」(竹内 1989 : 289)

[モンゴル語] *алирс болжээ*. 「こけももが熟した」

[ナーナイ語] *saaksa osiini*. 「霜ができた」(Onenko 1980 : 316)

ここでもう一つ注意しておくべきことは、コンピュータ文でも同様に格無しの名詞が現れることである。一般にアルタイ諸言語の現在時制・肯定のコンピュータ文ではコンピュータが用いられないが、過去や否定などの場合にはコンピュータ的に機能する要素が現れる(以下のモンゴル語及びナーナイ語では存在の動詞としても用いられる *байх* 及び *bi* が現れている)。

[トルコ語]

Barış şarkıcı. 「バルシュは歌手だ」(林 1995a : 100)

Ahmet doktor idi. 「アフメットは医者だった」(竹内 1989 : 184)

[モンゴル語]

би монгол хүн. 「私はモンゴル人です」(温品 1998 : 128)

энэ сайхан цай байна. 「これは、おいしいお茶ですね」(話し手が現時点でその事実を確認した)場合にはコンピュータを用いる、温品 1998 : 129 による)

[ナーナイ語]

ñoanči mii balarpči jiasilbi. 「彼らは私の古い友達だ」(Onenko 1986 : 153)

mii amimbi vrach bičin. 「私の父は医者だった」(Onenko 1986 : 24)

「なる」による文とコンピュータ文はこれらの言語で明らかにつながりを持っていると考えられる。

朝鮮語の「なる」(*doida*)では、変化後の対象を示す名詞が明示的な主格の要素 *-i/-ga* をとる(ただし道具・方向格をとることもある。これについて梅田 1991 : 29 は「転成の過程に注目して表現する場合」とし、油谷他 1993 : 545 は「変化してあるものになる場合」としている)。したがって二重主格構文が生ずる。他方コンピュータ文での二重主格構文は生じないが、否定のコンピュータ文ではやはり二重主格構文が生ずる(次の 1.6.11. にあげた例文を参照されたい)。

mur-'i 'er'eum-'i doinda. 「水が氷になる」(梅田 1991 : 29)

'orcaing'i-ga gaiguri-ro doinda. 「おたまじゃくしがカエルになる」(油谷他 1993 : 545)

したがって「なる」という述語に関しては、日本語だけがもっぱら与格を用いているということになる。ただし日本でも琉球方言の多くでは無語尾形をとる(「うふっちゅ なゆん(大人

になる；沖縄中南部方言)」、ただし「おもろそうし」の琉球語では「に」格をとるといふ。

1.6.11. 格の重複

トルコ語、モンゴル語、日本語ではふつう格の重複を許さないので一文中に同じ機能の同じ格は2つ現れない(ただしトルコ語やモンゴル語では場所を示す与格、与位格、処格では普通起こる。「彼はモンゴルにウランバートルに生まれた」のような構文で)。

ただし日本語の中でも、八丈島方言では格の重複が起こる(金田 1993による、以下の例も)。

ウイゴー ツブリノ ケガ ナガキヤ 「あいつのは頭の毛が長い」

ワガ テーコノゴー ダイカ コーヨ ブッチャバカラ 「私の太鼓のを誰か皮をやぶいた」

上記は主格と対格の例だが、与格の例もあるという。

さらに、属格の後に他の格がついたタイプも可能で、直訳すれば次のようになる3つのタイプがともに可能であるという。

太鼓の皮をやぶった／太鼓のを皮をやぶった／太鼓を皮をやぶった

朝鮮語ではある要素を強調する時に限って格の重複(対格による)が可能である(梅田 1990: 12-5)。

したがって朝鮮語では次のように対格の重複した文が可能である。

[他動詞使役文]

Tarooneun Jiroo-*reur* caig-*eur* 'irggei haissda. 「太郎は次郎に本を読ませた」

太郎は 次郎-**対格** 本-**対格** 読ませた

(柴谷 1978 : 365-67 より、表記等を一部改変した)

[全体と部分]

'emenineun 'a'i-*rur* son-*eur* jab'assda. 「お母さんは子供の手を握った」(梅田 1990: 13)

お母さんは 子-**対格** 手-**対格** つかんだ

[授受動詞文]

'i caig-*eur* dongsaing-*eur* jugeiss'e'yo. 「この本は弟にやります」(梅田 1990 : 13)

この 本-**対格** 弟-**対格** あげる

[数量を示す文]

ddar-*eur* dur-*eur* deirigo 'wassda. 「娘を二人を連れて来た」(風間 1994 : 43)

娘-**対格** 二-**対格** 連れて 来た

[その他]

'yeng'e-*reur* gongbu-*reur* haissda. 「英語を勉強した」
英語-**対格** 勉強-**対格** した (柴谷 1978 : 365-67 より、表記等一部改変)

朝鮮語では先に述べたように、さらに「なる」の意の動詞を述語とした文や、「～でない」の意の文で二重主格構文が生じる。

[コピュラ文の否定で]

'i ges-'i nai caig-'i anida. 「こっちの方が私の本ではない」
この 物-**主格** 私の 本-**主格** ではない

ツングース諸語では他動詞使役文では二重対格になるのがふつうである。「全体と部分」の構文でも二重対格構文が用いられることがある。

[ナーナイ語]

alosimji naonjokam-*ba* dansa-*wa* xolawandini.
「先生は 子供に 本を 読ませた」 (Avrorin 1961 : 34)

ñoani mapa-*wa* miawam-*ba-ni* garpaxani.
「彼は クマを その心臓を 撃った」 (風間 1994 : 40)

II群・III群のツングース諸語では、数詞及び数量を示す形容詞が後ろに遊離した際に二重対格をとる (風間 1994)。

ñoani toiñña/əgji/oi sogdata-*wa* waaxani.
彼は 五匹の/たくさんの/少しの 魚を 獲った。

ñoani sogdata-*wa* toiñña-*wa/əgji-wa/oi-wa* waaxani.
彼は 魚を 五匹を/たくさんを/少しを 獲った。

なおモンゴル語でも数量を示す形容詞「全て」、及び数詞が遊離した際に限っては二重対格が起きる。

ЭНЭ НОМ-ЫГ бүгд-ИЙГ авъя.
「この 本を 全部を 買おう」

ЭНЭ НОМ-ЫГ хоёр-ЫГ авъя.
「この 本を 二冊を 買おう」

ただし数詞の場合には前の名詞を格無し、もしくは奪格にする方が普通である。

ЭНЭ НОМ хоёр-ЫГ авъя.

「この本 二冊を 買おう」

ЭНЭ НОМН-ООС хоёр-ЫГ авъя.

「この本から 二冊を 買おう」

エウエン語とエウエンキー語の多くの方言では通常の語順で、数詞等のみならず形容詞一般に、しかもさまざまな格で規則的な「一致」(先行研究はこうした現象を「一致」とみなしている、このことについては風間 1994 も参照されたい)が行われる。修飾語にのみ格表示がなされる方言も存在する。格のみならず、数や所属人称、指大辞、指小辞の一致もある。

ウデヘ語でも数量を示す場合には修飾語のみによる格表示、すなわち「五匹を 魚 捕った」のような格表示が現れる。

[エウエンキー語ポリグス方言]

tunġa-wa ulukii-l waam.

五匹-を リス-複数 獲った (Konstantinova 1964 : 117)

[エウエン語]

ilan-dula ĵu-l

「三つ-に テント-複数」 (Benzing 1955b : 71)

[エウエンキー語]

bu aja-l-ĵi-tin ĵawi-l-ĵi-tin əĵækkii surusinəw.

「私達は 良い-複数-道具格-3人称複数 舟-複数-道具格-3人称複数 下流へ 出発した」

(Kolesnikova 1966 : 45)

[エウエン語]

munrukan ŋonomaŋ-aŋĵa-l-bi korit-aŋĵa-l-bi idəc pasakalvin.

「ウサギは 長い-指大辞-複数-再帰単数 耳-指大辞-複数-再帰単数 いっせいに 叩いた」

(Benzing 1955b : 66)

[ウデヘ語]

ila-ma aŋani ĵaa-ma nəŋəini bimi

「三-対格 年 (三年間) 「十-対格 日 あって (十日たって)」 (Benzing 1955a : 149)

1. 7. 所有/存在

1. 7. 1. 所有/存在の接辞

「A は B 持ちである」、「B 持ちの A」、「A に B がある」、「B がある A」などの下線部のような意味を示す接辞がアルタイ諸言語に共通してみられる。モンゴル語では -tai³、トルコ

語では **-li**⁴、ツングース諸語では言語によってその形式は異なるが（下記の表を参照）、例えばナーナイ語で **-ko/-ku** である。品詞としては名詞から形容詞を派生する。モンゴル語での使用が最も顕著で、ムードを示す文末形式に発展しているものもある。これらに共通していることは **A** と **B** の間に恒常的な関係（一体感が感じられるような関係、譲渡不可能的な関係）があることで、この点で存在動詞による存在文と異なっている（風間 1999b）

[モンゴル語]

чи үзэг-тэй юү?
 「おまえは ペン持ち か？」
 чамд үзэг байна уу?
 「おまえに ペンが ある か？」

[トルコ語]

adam para-*lı* mı ki?
 「あの人は お金持ち かなあ？」
 adamın parası var mı ki?
 「あの人の お金が ある かなあ？」

[ナーナイ語]

gə, əsi buə mənə traktor-*ko-po*.
 「さあ、今 私たちは 自分たちの トラクター持ちだ」（Avrorin 1981、-po は一人称複数）
 suə kolxozadoasu traktor bii=nuu?
 「おまえたちの コルホーズには トラクターが あるか？」（Onenko 1980:65）

群	言語名	形式	出典
I	エウエン語	-lkaan	Cincius i Rishes 1952 による
I	エウエンキー語	-čii, -lkaan, -laan, -taj	Vasilevich 1958 による
I	ソロン語	-ʃi	胡・朝克 1986 による
I	ネギダル語	-lkan	Kolesnikova i Konstantinova 1968 による
II	ヘジェン語	-lki/-ki	安俊 1986 による
II	ウデヘ語	-xi	筆者調査による
II	オロチ語	-ki	Avrorin i Levedeva 1968 による
III	ナーナイ語	-ko/-ku	筆者調査による
III	ウルチャ語	-ču	筆者調査による
III	ウイльта語	-lu/-ttu	潤濁 1981 による
IV	満州語	-ngga/-ngge/-nggo, -lingū/-lingu	河内 1996、上原 1960 による
IV	シベ語	-ŋ	李・仲 1986 による

なおI群の諸言語には別に共同格もしくはそれに準ずる形式がある。したがって対象が人間の場合には上記の諸形式は用いられず、共同格が用いられる。その点ではトルコ語と似た状況にある(トルコ語にも道具・共同格 *ile* がある)。

朝鮮語や日本語にはこうした接辞が見出されない。他方アルタイ諸言語の間で、これらの接辞の機能はたしかによく似た面をみせるが、細かい点では違いもある。例えば次の例に見るように、これらの接辞をとった名詞がさらに別の修飾語をとる際には、はっきりとした違いが現れる。トルコ語及びモンゴル語の修飾語がそのまま修飾できるのに対し、ツングース諸語では修飾語に道具格を要求する。4.1.の形容詞の品詞的性格の項で述べるが、ツングース諸語で形容詞を副詞として用いる際には道具格が用いられることがその原因として考えられる。

[トルコ語]

kız	uzun	saç- <i>lı</i> .
「彼女は	長い	髪を持っている」

[モンゴル語]

гурван	нас- <i>тай</i>	хүү
「三	歳の	子供」

[ナーナイ語]

ḡonimi- <i>ji</i>	nuktə- <i>ku</i>	əktə
「長い	髪の毛持ちの	女」

1.7.2. 所有構造と属格

本稿で扱っている諸言語間での所有構造の対照については、津曲(1992)がある。

チュルク諸語、モンゴル語での属格は、もっぱら1.6.1.の格の一覧表に示した形式が用いられ、他に属格的に機能する形式はない。

トルコ語は後述の所属人称接辞を持つので、その所有構造は **Double marking**、すなわち[名詞1-属格 名詞2-所属人称接辞]のような構造をとる。これに対し、[名詞1 名詞2-所属人称接辞]のような構造もあり、両者の違いはしばしば名詞1の定不定による違いとして記述されてきたが、後者は基本的に複合語というべき性格を持っている。そのように考えた場合には、名詞2につく接辞は所属人称接辞ではなく、複合語のマーカーとされる。しかしこの構造の取り扱いにはなお問題がある(林 1995b)。

他方、ツングース諸語には基本的に属格がなく、所有構造では所属人称接辞のみを用いた[名詞1 名詞2-所属人称接辞]のような構造をとる。属格が有るのはもっぱら中国領のツングース(ソロン語、エウエンキー語オロチョン方言、満州語、女真語)に限られる(田村 1992、津曲 1996)。ただしウルチャ語、ウイльта語(南方言)、ナーナイ語(ビキン方言)、エウエン語(東方言)には1, 2人称の人称代名詞に限って属格がある。

	1人称単数	2人称単数	1人称複数	2人称複数
ウルチャ語 (Ⅲ)	min	sin	mun	sun
ウイлта語南方言 (Ⅲ)	mini	sini	munu	sunu
エウエン語東方言 (Ⅰ)	min	hin	mun	hun

地理的にも離れた、しかもⅠ群の言語とⅢ群の言語に分布していることからみて、こうした要素はツングース祖語にもあった、と考えるのが自然だろう。すると後でみる人称代名詞の諸斜格形はこの属格から形成された形ということになる。

朝鮮語では=’eui が用いられるが、属格無しで直接名詞を続ける場合や、いわゆる sa’i-si’os (後続名詞頭音の濃音化) による場合も多い。

namu(s) gaji [namuʔkadʒi] 「木の枝」(津曲 1992 : 271)

日本語ではもっぱら「の」が用いられるが、方言や古文ではさらに他の形式が用いられ、使い分けがある。以下にこれを見る。

まず琉球語(首里方言)の属格には、有生・無生等による使い分けがある。以下は西岡・仲原(2000 : 93-4)による。

「ガ」 ga -’ari 「彼、彼女」及び ’uNju 「あなた」の後はガ ga のみ

アリガ ムン ヤサ ’ari-ga muN yasa 「彼のものだよ」

ウンジュガ ナサキ ’uNju-ga nasaki 「あなたの情け」

「φ」 - 人を表わす言葉や人称代名詞、疑問詞のあと

アヤー ティガネー’ayaa tigancee 「母の手伝い」

ヌー シクチ ヤガ? nuu shikuchi ya-ga? 「何の仕事だ」

ワッター フニ wattaa huni 「私たちの船」

「ヌ」 nu - ほとんどの名詞のあとにつく

トウイヌ クス tui-nu kusu 「鳥の糞」

古代日本語の属格としては、「つ」、「な」、「(結合部の) -s-」なども用いられた。その使い分けについてはまだ十分に明らかにはなっていない。

我が国、我が子、我が家、

まつげ(目つ毛)、天つ風、

まなこ、たなごころ、百(もも)な人「数多くの人」

haru-s-ame (春雨), ko-s-ame (小雨), mura-s-ame (村雨), hi-s-ame (氷雨),

taba-s-ine (東稲), uru-s-ine (粳稲), mi-s-ine (御稲), nigi-s-ine (和稲), ara-s-ine (荒稲)

ma-ss-ao (真っ青)

中世日本語においては、親疎によって属格が使い分けられた。

「が」親愛・親近感を表わす場合、及びこれより転じて軽蔑、嫌悪、憎悪の感情を含める場合
「の」敬意を表わす場合、またはある程度心理的距離を保つ場合

1.7.3. 属格の使用に関する言語間での対照

日本語ではかなりさまざまな名詞間の関係に属格が用いられる。以下の分類は鈴木（1972）を参考に、筆者による別の観点からの分析を加えて、整理し直したものである。他の言語でもより普通に属格が使われるものから、より使われにくいものへ、という順序におおよそ配列してある。

(1) D (ependent) が名詞的 — 所有関係；「図書館の本」、「妹の靴下」

(2) D が場所、時を示す名詞の場合

(2a) D が（具体的な）場所；「横浜の港」、「奈良の大仏」

(2b) D が時；「夏の嵐」、「3時のおやつ」

(3) H (ead) が内容を持つ名詞、いわゆる「外の関係の連体修飾」的な関係の場合；
「映画の話」、「チューリップの絵」

(4) H が動作名詞の場合

(4a) H が動作名詞、D が主語；「火山の爆発」、「鹿の鳴き声」

(4b) H が動作名詞、D が目的語；「自動車の運転」、「庭の掃除」

(5) H が相対名詞

(5a) H が親族名称；「私の父」、「彼のおじ」

(5b) H が場所名詞；「机の上」、「ビルの横」

(6) D と H が同格；「おにいさんの太郎」、「社長の田中さん」

(7) D が形容詞的に機能し、属性を示している場合

(7a) 物の種類；「バラの花びら」、「柿の種」

(7b) 道具の用途；「汽車のキップ」、「果物のナイフ」

(7c) 材料；「紙の飛行機」、「ブロックの塀」

(7d) 状態；「赤ら顔の男」（所有からの逆転関係）、「でこぼこの道」

(8) D が数量詞；「一杯の水」、「三匹の子豚」

(9) 超論理的な関係（？）；「さよならの秋」、「問わず語りの心」

このように日本語の属格の使用範囲がきわめて広いことは以前より指摘されている。そこで、いったんこれを基準とし、上に分類された諸関係が他の言語でも属格を用いて表現されるか、されなければどのような形式をとるか、について考えてみたい。

(1) では、どの言語でも(ツングース諸語を除く、ツングース諸語は先述のように基本的に属格を用いないため)基本的に属格が用いられる。

(2a), (2b), (3), (4a), (4b) の場合、トルコ語、モンゴル語では基本的に属格が用いられる。朝鮮語でも属格が用いられるが、用いられず単に名詞が並列されることも多い。

(5a) 親族名称は、多くの言語で所有者(正確には、基準となる人物)の人称の表示が義務的である(ツングース諸語)。また(5a) 親族名称及び(5b) 場所名詞は、その基準を必要とする相対名詞であるが、これらの名詞はツングース諸語において決して譲渡可能の接辞をとらない点で特徴的である。トルコ語、モンゴル語において属格は用いられる。

(5b) 場所名詞の場合、トルコ語では属格を用いるのが普通である。さらに場所名詞はその後ろ(正確には、まず所属人称接辞をとり、その後ろ)に場所を示す種々の格形式をとる。したがってトルコ語の場所名詞は名詞としての性格を強く持っているといえる。

masa-*nın* *üzerin-de* kitap var. 「机の上に本がある」
机-属格 上-処格 本 ある

他方、モンゴル語でこうした表現に用いられる要素は、まず基本的に後ろに格の形式をとらない(ただし奪格のみは現われる)。したがって場所名詞と呼ぶのは不適當であり、一般に後置詞として扱われている。次に属格の現れについてみると、これはこうした後置詞のそれぞれによって事情が異なる。例えば *гадаа* 「外」では普通先行する名詞が属格をとり、*доор* 「下」はとらないという(温品 p.c.)。 *дээр* 「上」では、属格をとる場合ととらない場合では意味が異なるという(温品 p.c.)。

ширээн *дээр* ном байна.
机 上(接している)に 本が ある

ширээний *дээр* чийдэн байна.
机-属格 上(上方、接していない)に 電灯が ある

朝鮮語ではこうした場合に属格(-*eu*)を全く用いない。その点で場所を示す語の名詞性は弱く、後置詞に一歩近づいていると言えよう。場所を示す格はこのような場所名詞の後ろに必ず用いられる。朝鮮語では次のような名詞が場所名詞として振る舞う(門脇 1998:18 による)。'ui 「上」、mit 「下」、'arai 「下」、sog 「中」、'an 「中」、'ap 「前」、dui 「後」、'jep 「横」、gjet 「傍ら」、genneppen 「向かい側」、(他に ga'undei 「真ん中」などもやはり場所名詞と考えられる。またこれらの場所名詞には複数の=deur がつかないという性質もある(野間 p.c.))

caigsang-φ	'ui-'ei	caig'i	'issda. 「机の上に本がある」
机	上-に	本が	ある

なお話はそれるが、朝鮮語の場所名詞には、日本語の「中」にあたるものに **sog** と '**an** が、「下」にあたるものに **mit** と '**arai** があって使い分けがある。限られた領域の「中」や「下」には前者 (**sog** 及び **mit**) が用いられる(門脇 1998: 18)。このようなはっきりした区別はアルタイ諸言語や日本語にはない(ただし **sog** と '**an** の意味の対立は日本語の「奥」と「内」に似た面があるという(野間 p.c.))。

日本語においての場所名詞は、前にきて基準を示す名詞が必ず属格をとり、場所を示す格も場所名詞の後ろにつくのが普通である。つまり日本語の場所名詞は名詞としての性質を完全に備えているということができる。

机の上に本がある

(6) 同格的な関係の場合、トルコ語、モンゴル語ともに属格を使うことはできず、単なる名詞の並列となる。朝鮮語では名詞の並列、もしくは指定詞-'**ida** の現在連体形 (-'**in**) でしか言えない。

(7) のうち、(7a), (7b), (7c) では多くの言語で属格を用いない(トルコ語、朝鮮語など)。モンゴル語では(7a), (7b) の場合には属格が現れるが、(7c) の場合には現れないという(梅谷 p.c.、なお(7c) の場合、修飾する名詞が「隠れた **n**」を持っていればそれが現れるという)。(7c) の場合に、ツングース語ではこの関係を示す特別な接辞 **-ma/-mø** があってこれが用いられる。

[ナーナイ語] **moo-ma ogda** 「木製の舟」

トルコ語ではさらにこの場合、無表示の他に奪格が用いられる場合もある。

tahta-dan oyuncak 「木のおもちゃ」

(7d) 「所有からの逆転関係」とは次のような点をいう。

「長い髪の女」 * 「髪の女」(「髪」は側面語) ⇔ 「女の髪」(通常的所有関係)

朝鮮語ではこのような場合連体修飾節による「髪が長い女 (**meriga gin 'yeja**)」のような表現が普通で、「長い髪の女」式の表現は若干詩的に感じられるという。アルタイ諸言語ではこのような場合、上述の「所有/存在を示す接尾辞」を用いることができる。

トルコ語では以下の両方の表現が可能であるという(Lewis 1967: 260、例も)

pencere-si	açık	oda 「窓の開いた部屋」
窓-その	開いた	部屋

açık	pencere-li	oda 「窓の開いた部屋」
開いた	窓-持ちの	部屋

(8) 数量詞の場合、アルタイ諸言語では属格は用いられない。朝鮮語で属格を用いた型はまれで、日本語からの影響による可能性が考えられる(門脇 1992 : 238)。朝鮮語での最も基本的な型は「名詞-数量詞 (-格)」(子豚三匹、など)である。モンゴル語では4ぐらいまでの数ではта гурав「おまえたち三人」、ах дүү хоёр「兄弟二人」のような語順も用いられる。

1.7.4. 属格の連続使用

トルコ語、モンゴル語及び日本語では、基本的にいくつでも続けて用いることができる(例えば、「となりの家の庭の梅の木の花の匂い」など)。

ただしトルコ語では、属格がいくつも繰り返されるパターンは好まれず、省略されることもあるという(勝田 1986 : 32、下記の例も)。

Hasan'ın	amcası (nın)	oğlu
ハサンの	おじの	息子

他方、朝鮮語の=’eui は連続していくつも使用することは基本的に避けられる傾向にある。日本語で属格名詞が連続するような場合(「となりの家の梅の木の花の匂い」など)には、=’eui を一つもしくは二つ残し、それ以外は基本的に単なる並列によって表現することが多いという。

1.7.5. 主節において用いられる「属格」の主格的用法

トルコ語やモンゴル語、日本語の連体修飾節において、属格が主格的な機能で用いられることがあることは(5.8.3.2.で後述)、よく知られている。しかし主節でも、属格とされている形式が主格的な機能で用いられる言語がある。この場合、もちろん当該の形式はもはや属格というには問題がある。すなわち、この現象は、ある同一の形式が主格的にも、属格的にも用いられるということである。

琉球語(首里方言)の主格の使い分けには主語の有生・無生が関与しているようにみえる。以下の記述は西岡・仲原(2000 : 13-4)による。

「ガ」主語が人及び代名詞の時 ; ナビー~~ガ~~ワラユン「ナビー(女性名)が笑う」、
アリ~~ガ~~ミアティ ヤンドー「あれが目印だよ」
「ノ」主に一般名詞の時 ; フシ~~ヌ~~チュラサンヤー「星がきれいだなあ」

上記の琉球語(首里方言)における属格の使い分けと合わせて考えると、この言語の「ガ」及び「ノ」は、主語、目的語といった文中での機能の違いよりも、むしろ有生無生の違いを主たる条件として使い分けられている面があるようである。

熊本方言でも「の」による主語の表示がある。「が」も用いられるが、秋山・吉岡(1991: 187)によれば、次にみるような使い分けがあるという。すなわち、「の」主語は「雨の降つちよる」のような現象文、感動文の場合に用いられる(FSPの観点からいえば、「全体が新情報である文」ということができよう)。他方、理性的な判断文には用いられない(例えば、「止めたが良か」、「そるが良か」など)。

1.7.6. 物主代名詞「～のもの」

トルコ語では、属格の形式が物主代名詞的に用いられる。この点で日本語の「の」と似ている。属格の後ろにさらに -ki を伴った形式も用いられる(勝田 1986: 35、以下の例も)。

Şu araba *senin* mi?
「その車は 君の か?」

benim bisikletim bozuk *Senin-ki* nasıl?
「私の 自転車は 故障している。 君のは どう?」

なおこの -ki は処格にもつき、「～にある、～にいる」(名詞修飾要素)、「～にあるもの、～にいるもの」(名詞的に機能する要素)という意味を示す(林 1995a: 118-9、以下の例も)。

köy-de-ki çocuklar 「村にいる子供たち」 *el-iniz-de-ki* 「あなたの手にあるもの」
村-処格-ki 子供(複数) 手-2人称(敬)-処格-ki

モンゴル語では1.6.4.の二重格の項でみたように、一部の格は属格にさらに接続する。この場合に属格は物主代名詞的に働く(*Дорж-ийн-д* 「ドルジのところに(-属格-与格)」、*ах-ын руу* 「兄のところの方へ(-属格-方向格)」、*ах-ын-тай* 「兄のと(-属格-共同格)」。しかしこれ以外の格のつく時には形式名詞的接尾辞 -x をつけてから、その後ろに格をつけなければならない(*ахын-х-аас* 「兄のより」)。以上のモンゴル語に関する記述は橋本・谷(1993: 93-4)による。

ツングース諸語では-ŋgi(ナーナイ語などⅢ群の言語で、エウエンキー語などでは-ŋi)によって物主代名詞が形成される。

[ナーナイ語]

mi-ŋgi *inda-ŋgi* *goi* *nai-ŋgi*
「私の(もの)」 「犬の(もの)」 「別の 人の(もの)」

(Onenko 1980: 549 より、表記は一部改変)

エウエンキー語における上記の要素 **-ŋi** は、一部の方言で属格的な機能で用いられることがあるが、そのことからただちにこれを属格とみることには問題がある(池上 1979 : 145)。

朝鮮語の属格-**'eui** には上記のような物主代名詞的な用法はなく、形式名詞的な語である **ges** を用いなければならない。上記のアルタイ諸言語の物主代名詞形成要素は実詞(名詞、形容詞)にのみつき得るのに対し、**ges** は連体形の用言を受けることもできる(アルタイ諸言語ではこうした場合には形動詞が用いられる)。この点日本語の形式名詞的要素である「の」と同じである。ただし日本語とは異なり、「の」と「こと」の使い分けがなく、全部 **ges** を用いて示す。

1. 8. 人称

1. 8. 1. 所属人称接辞

トルコ語とツングース諸語では、人称接辞が必須の要素であり、屈折要素である。

ツングース諸語の多くは属格がないかわりに所属人称接辞を所有されるほうの名詞につける。所属人称接辞を持つ点ではトルコ語と似ているが、トルコ語では属格が用いられ、基本的に二重表示の所有構造をとる(1. 7. 2. で上述)。

チュルク諸語の所属人称接辞とツングース諸語のそのの大きな違いは、以下にみる再帰人称の有無の他に、もう1点ある。ツングース諸語ではどの言語でも、1, 2人称だけでなく3人称においても単数と複数で形式が異なるが、チュルク諸語では3人称で数の対立が無くなり、一つの形式があるのみである(数の対立があるとみる立場もある(1. 3. 6. 2. 参照))。

モンゴル語の所属人称要素は、再帰人称要素とそれ以外に大きく分かれる。モンゴル語では再帰人称の方が義務的な屈折要素であり、他の人称の所属人称要素は義務的ではない。なお橋本・谷(1993)では再帰の方を「再帰所有語尾」、他の人称の方を「人称所有の副助詞」としているが、他方で再帰の要素について、「統語論的には副助詞で、独立性が強い」と述べている。栗林[均](1992b : 507)は両者を分けて扱っているが、ともに「再帰所属語尾」、「人称所属語尾」と呼んでいる。Kullmann(1996)は再帰を **reflexive suffix**、他の人称要素を **case-bound particles** と呼んでいる。モンゴル語では3人称と再帰人称には数の対立が無い。この点ツングース諸語とは異なっている。

モンゴル語の再帰以外の所属人称要素の中で、まず1, 2人称とも複数のものはあまり用いられない。3人称のものは、もはや主題表示としての機能がその中心となってきた。

トルコ語の人称要素は格の前につくが、モンゴル語とツングース諸語では格の後に人称要素がつく。モンゴル語とツングース諸語ではさらに一部の副動詞の後にもつく(トルコ語の副動詞はそもそも人称要素を全くとらない)。ただしモンゴル語では後置詞の後にもつき、その独立性がかなり高いのに対し、ツングース諸語では後置詞の後につくことはなく、格との間にはいかなる要素も現れない(ナーナイ語で斜格表示と呼ばれているものを除く)。モンゴル語の再帰以外の人称要素は、正書法でも離して書かれる。

[トルコ語の所属人称接辞]

	単数	複数
1人称	- (i) m ⁴	- (i) miz ⁴
2人称	- (i) n ⁴	- (i) niz ⁴
3人称	- (s) i ⁴	

[モンゴル語の所属人称要素]

	単数	複数
1人称	МИНЬ	маань
2人称	ЧИНЬ	тань
3人称	НЬ / -Х НЬ (属格の後)	
再帰人称	-(г)аа ⁴ / -хаа ⁴ (属格の後)	

[ナーナイ語の所属人称接辞]

	単数	複数
1人称	-ji/-bi	-po/-pu
2人称	-si	-so/-su
3人称	-ni	-či
再帰人称	-ji/-bi	-ari/-əri

朝鮮語及び日本語にはこうした所属人称の要素はみられない。しかしいわゆる日本語の露出形について、これを接尾辞 *-i* がついてできたものと考え、この *-i* を限定語尾として上記の所属人称接辞と類似の要素とみる考えがある（池上 1980 : 101、なお津曲 1992 : 273 も参照されたい）。なお以下での大文字は上代特殊仮名遣いの乙類を示す。

雨 (amE<ama-i)、月 (tukI<tuku-i)、木 (kI<kO-i)、背 (se<sO-i)

亀井・河野・千野（1996 : 1110）はこの *-i* を「一種の絶対接尾辞」と考えている。つまりは、日本語にもかつては Head marking な所有構造があった可能性が考えられる。以下の例は玉村（1985 : 16）を参考にした。

/E/→/a/ 雨雲、風上、船宿、酒屋、金物屋

/I/→/u/ つくよ、かむかぜ

/I/→/O/ 木立、木枯らし、木漏れ日、ほなか、ほのお、ほばしら

/e/→/O/ そむく

1.8.2. 再帰人称

ツングース諸語の多くでは、主語及び文末の定動詞以外の文中の諸要素（斜格の名詞や人称

をとる副動詞形)には1, 2, 3人称の他に再帰人称の形式があつてこれがつく。この点でモンゴル語に似ている(チュルク諸語には再帰代名詞はあつても再帰人称接辞はない)。上述のようにモンゴル語でも再帰人称の表示は必須である。モンゴル語及びツングース諸語において、主語が3人称の文で文中の要素にも3人称の人称の要素を用いると、それは主語とは別の人物ということになる。すなわちいわゆる第4人称的な意味を示すことになる。この点ではむしろエスキモー語などとよく似ている。

[モンゴル語]

Дорж	НОМ-ОО	ДҮҮД-ЭЭ	ӨГСӨН.
「ドルジは	自分の本を	自分の妹に	やった」
Дорж	НОМ НЬ	ДҮҮД-ЭЭ	ӨГСӨН.
「ドルジは	人の本を	自分の妹に	やった」
Дорж	НОМ-ОО	ДҮҮД НЬ	ӨГСӨН.
「ドルジは	自分の本を	人の妹に	やった」

[ナーナイ語]

ñoani	sogdata-ŋgo- <i>ji</i>	siaxani.
彼	魚-譲渡可能-再帰人称	食べた「彼は自分の魚を食べた」
ñoani	sogdata-ŋgo-a- <i>ni</i>	siaxani.
彼	魚-譲渡可能-斜格表示-三人称単数	食べた「彼は誰か別の人の魚を食べた」

さらにモンゴル語とツングース諸語の再帰人称には次のような重要な共通点がある。すなわち、再帰人称を用いた場合には、対格が現れず、再帰人称のみがついた形が目的語として機能する。ただしモンゴル語では、人間を表わす名詞一般、及び前方照応の指示代名詞の場合には、対格の後ろにさらに再帰人称がつくという(梅谷 p.c.)。すなわちここで、人間を示す名詞と非人間を示す名詞との間で格の取り方に差が現れる(1.6.5.に先述)。

1.8.3. トルコ語における、処格所有構文と所属人称接辞による属格所有構文との対立

勝田(1986:28)によれば「①所有接尾辞を伴った表現は「所有」を問題にしており、②位格を伴った表現は「存在」を問題にした表現と考えられる。①param var.私はお金を持っている。②para bende var./para bende (dir). (あの)金なら私のところにある。」という。

竹内(1989:396)にも次のような記述がある。「Benim kardeşim var. 私には兄弟がいる。(Bende kardeş var.とは言えない)。Benim param var.私にはお金がある(Bende para var.と言えるが、この場合は臨時的な所有を意味する)。」

これに対し、他のアルタイ諸言語及び朝鮮語、日本語の所有構文(存在するものを主格にした所有構文、1.7.1.のタイプの文を除く)はもっぱら与格名詞を用いた構文に限られ、属格所有構文はふつう用いられない。

1.9. FSP

1.9.1. 主題提示要素

主題を示す要素であるとして、朝鮮語には =n/=’eun/=neun、日本語には=wa があって共にさかんに用いられる。疑問詞疑問文で対比などの何ら強調なしに普通にたずねる場合には、朝鮮語では =n/=’eun/=neun が用いられず、主格もしくは格助詞なしの形式が用いられる。この点では日本語と異なっているが、朝鮮語の =n/=’eun/=neun と日本語の=wa の機能は互いに大変良く似ている。

他方アルタイ諸言語にははっきりとした主題専用のマーカーはなく、ゼロ形式である主格がテーマを兼ねている場合が多いようだ。しかしこうした主題マーカーの不在を補って働いている要素がいくつかあると考えられる。以下ではその点について考察する。

なおモンゴル語の3人称所属人称要素 **Нь** が主題表示の機能を示すようになってきていることはすでに述べた。

1.9.1.1. 主題もしくは対比の提示要素と条件形の関係(特に「なる」という動詞の条件形)

トルコ語の *ise* は、コンピュータ的に働く語幹 *i-* に条件を示す接尾辞 *-se* がついて成立したものである。単なる主題提示ではなく、強い対比のニュアンスを伴う。

Mehmet babasına, kardeşi *ise* annesine benzer.

「メフメットは 父に、 弟 の方は 母に 似ている」(竹内 1989 : 194)

ウズベク語でも「なる」という動詞の条件形がテーマを示すのに用いられる。

men keldim, u *bo’lsa* kelmadi.

「私は 来たが、 彼 は 来なかった」

モンゴル語で主題提示に用いられる **бол** も、**болох** 「なる」に仮定副動詞 **-бол** がついた形 **болбол** に由来する。

агу их Ленин **бол** бүх дэлхийн пролетари нарын багш мөн.

「偉大なるレーニン は 全世界の プロレタリアートの 師である」

(小沢 1983 : 55)

бичиж чадах **бол** бичдээ.

「書くことが できる なら 書きなさい」

(小沢 1983 : 55)

ツングース諸語の一部(ナーナイ語)などでも **osini** 「なる」が主題表示に用いられる。

ambaan *osini* nəə dəəmbisu~, nai *osini* əji orkisira,
 「魔物 ならば すぐに 静まってくれ、人 ならば 悪く 思わないでくれ、」
 (風間 2001a : 74)

məngumbə gələisi *osini* polgon polgonjiani baarambi,
 「銀を 求める なら、 布で包んだ大きな塊で 得るであろう、」
 (風間 2001a : 90)

日本語でも条件形である「～なら」は主題提示にも用いられる。

コンピューターを買う **なら**、あれがいいよ

コンピューター **なら**、あれがいいよ

1.9.1.2. トルコ語における属格名詞の主題化

トルコ語では属格名詞と所属人称接辞との呼応がきちんと行なわれるために、修飾する名詞(所有者)と被修飾名詞(所有物)の間に他の要素をはさみうる。したがって、属格名詞をテーマとして文頭におくために、以下のような構文が用いられることがある(菅原 p.c.)。

onun İstanbul'da evi var.
 彼の(家) なら、イスタンブールに その家が ある

1.9.2. 定不定と数詞の「1」

トルコ語では *bir* 「1」が不定のものを示すのに頻繁に用いられる。特に、形容詞と名詞の間という独特の位置に現れ、この場合は数量ではなく、不定を示すことがはっきりする。

モンゴル語やツングース諸語では、数詞の1はこのような位置には現れない。不定の意味で用いられることもあるが、頻度もトルコ語ほど高くない。

数詞の「1」はさらに、トルコ語で *bir az* 「少し」、*bir çok* 「たくさん」、モンゴル語で *НЭГ ЮМ* 「ちょっと」などのように、「少ない」、「多い」などの表現と結びついて用いられることがある。ツングース諸語ではこのような例はほとんどない。ただし朝克・津曲・風間(1991: 23, 34 etc.) に *əməŋ asəxəŋ* 「少し」の例がある。

1.9.3. 係り結び

係り結びとは、「文中のある要素を強調し、それに強調のマーカがつく際に、述語動詞が一定の形(名詞的に働く、形動詞的な形)をとることを要求する」現象といえることができる。いいかえれば、動詞文をコピュラ文の中に投入するプロセスとみなすことができる。こうした現象は古代日本語と、琉球語、八丈方言等をはじめとする日本語の諸方言における残存が見られるのみである。アルタイ諸言語、朝鮮語にこうした現象はない。

2.0. 人称代名詞

2.1. 斜格語幹

ツングース諸語とモンゴル語は斜格語幹として主格とは別の語幹をとるが、トルコ語はとらない（すなわち、主格、斜格をつうじて同じ語幹である）。ただ、ツングース諸語の場合、属格以下はみな同じ斜格語幹から生じたものとみなせるが、モンゴル語では属格とそれ以外の斜格の間にさらに違いがみられる。

トルコ語 (林 1995a による)			モンゴル語 (小沢 1983 による)			ウイグルタ語 (池上 1993 による)		
	1 人称	2 人称		1 人称	2 人称		1 人称	2 人称
主格	ben	sen	主格	би	чи	主格	bii	sii
属格	benim	senin	属格	миний	чиний	属格	mini	sini
与格	bana	sana	与位格	над	чамд	对格	mimbee	simbee
定対格	beni	seni	定対格	намайг	чамайг	与格	mindu	sindu
奪格	benden	senden	奪格	надаас	чамаас	方向格	mittäi	sittäi
共同格	benimle	seninle	道具格	надаар	чамаар	処格	mindulə	sindulə
処格	bende	sende	共同格	надтай	чамтай	沿格	mikki	sikki
						奪格	minduu	sinduu
						道具格	minji	sinji
						共同格	mindөө	sindөө

2.2. 一人称複数包括形と除外形

まずトルコ語は1人称複数における包括形と除外形の対立を持たない

	sg.	pl.
1 人称	ben	biz
2 人称	sen	siz

モンゴル語では現在、包括形と除外形の対立を持たないが、かつてはその対立があり、下記の除外形が用いられた。この対立は現在もバオアン、ダウンシャン、シラ・ユグル、ダグールに残る。

[モンゴル語]

	1 sg.	1 pl.		2 sg.		2 pl.	
		除外形	包括形	普通	尊敬		
主格	би	(ба)	бид	чи	та	та нар	
属格	миний	манай	бидний	чиний	таны	танай	та нарын

なお最近の話し言葉では、1pl.包括形に関して **биднуус**、2pl.に関して **тануус** という形式も用いられるという (温品 p.c.)。

Ⅲ群 (ナーナイ語、ウルチャ語、ウイльта語) を除き、ツングース諸語には基本的にこの対立がある。Ⅰ、Ⅱ群のツングース諸語では、所属人称接辞及び動詞の人称表示にもこの区別がある。

[満州語]

	1 sg.	1 pl.		2 sg.	2 pl.
		除外形	包括形		
主格	bi	bə	musə	si	suwə

除外形と一人称単数の形が、形の上で関連を持ち (母音の交替による違いとなっている)、他方で包括形はこれらとは全く異なる形態を持っていることは、モンゴル語とツングース諸語の間にみられる独特な共通点といえることができるだろう。しかし除外形がより無標の形式をとるのは他の地域でも観察されることであるらしい。細川 (1992 : 450) には次のような記述がある。

クリオール言語において包括/排除の識別が発生している場合、ウンザードイッチュやブルーム先住民英語の例にみられるように、包括/除外を弁別しない語彙供給言語の1人称複数代名詞が、クリオール文法においては排除形に限定されていることが多い、という事実は注目に値する

なおモンゴル語では、主格における除外形と包括形の対立はなくなったが、属格形では現在でもなお、少なくとも形の上でその対立を維持している。ただしその意味、ニュアンスの違いは、除外対包括という違いからズレてきているようである。

манай сургууль 「私たちの大学」(連帯感のあるグループ、集団、組織の所有に際して用いられる (温品 p.c.))

бидний сургууль 「私たちの所有している大学」(上記以外で、個人の集まりであったり、一時的な所有である場合に用いられる (温品 p.c.))

манай Догий ドギー (人名) と発話者が親しい仲であることを示す

манай Монгол モンゴルが発話者にとって親しい母国であることを示す

津曲 (2001) では満州語文語の包括形について、聞き手を含んでいなくとも、話し手と聞き手の間に親密さがある場合には包括形が使われることを指摘している。満州語口語の包括/除外の対立に関しても、服部・山本 (1955) がその対立の意味を再考している。

朝鮮語の'uri と'urideurの間には以下のような対立があるという（梅田 1991 : 63、以下の例も）。これも包括／除外の対立に連なるものとして考慮に入れておく必要があろう。

nai'ir **uri** haggyo'wa A haggyo'eui cuggusihab'i 'isseubnida.

明日 私たちの 学校と A 学校の サッカーの試合が あります

「明日私たちの学校と A 学校のサッカーの試合があります」（他学校との対比なので'uri を使うのが適当）

'urideur seisaram'eun sero 'yagsog'eur gudgei habnida.

私たち 三人は 互いに 約束を かたく しましょう

「私たち三人は互いにかたく約束をしましょう」（成員相互間のことだから'urideur を使うのが適当）

日本でも沖縄北部方言（包括（watt'a:）／除外（?agami）、島袋 1992 : 820 による）と与那国方言（包括（banta）／除外（banu）、高橋 1992 : 875）にこの対立がある。

2.3. 4人称

ウイльта語の nooni は4人称代名詞として機能する、すなわちすでに3人称の人物が現れている文脈で別の3人称の人物が現れる時、この人称代名詞が用いられる（Ikegami 1968）。これまでのツングース諸語の記述には、これと同源の語を単に3人称の代名詞としているものが多い。他のツングース諸語においても同様の機能を持っている可能性がある。こうした4人称として機能する人称代名詞は、他のアルタイ諸言語や、朝鮮語、日本語には知られていない。こうした4人称的な機能は、先の 1.8.2. でみた3人称所属人称接辞の4人称的な機能と明らかにつながりを持つものであろう。

2.4. 親疎・敬意（2人称・3人称代名詞の親疎・敬意における対立）

朝鮮語や日本語とは違って、アルタイ諸言語では敬語の体系は発達していない。ただし中世蒙古語では身分の上下によって動詞の語尾に指上形と指下形の使い分けがあった（日本・モンゴル友好協会編 1993 : 160、小沢 1978 : 128）。これ以外でアルタイ諸言語において敬意による対立があるのはもっぱら人称代名詞においてである。

トルコ語やウズベク語では2人称のみならず、3人称の尊敬表現に3人称複数の形式が用いられる。ウイグル語では2人称単数と複数のそれぞれに、普通と、尊敬と、特定の3種類が区別されるという（Reinhard 1998）。

上記 2.2. の表にあるように、モンゴル語では2人称代名詞単数にこの対立がある。ツングース諸語ではやはり2人称の複数形が尊敬表現として単数の相手にも用いられることがあるが、まれである。近年のロシア語からの影響が考えられる。

2.5. 人称代名詞と再帰代名詞

トルコ語の再帰代名詞 *kendi* は人称変化する。ただし格変化は指示代名詞と同じパターンをとる（すなわち、pronominal *n* を持つ）。

モンゴル語の再帰代名詞 *eep* は格変化に加え、さらに再帰人称接辞もとる。

他方ツングース諸語の再帰代名詞は所属人称接辞をとらず、格変化にも不規則な点がある。

朝鮮語の *dangsin*, *je* などの1・2人称代名詞は再帰代名詞起源である。現在の再帰代名詞 *jagi* も2人称に用いられる場合がある。日本語でも「自分」という語が1人称を指すのに用いられることがある。アルタイ諸言語では、再帰代名詞起源の人称代名詞の存在は知られていない。

3. 疑問代名詞

3.1. 有生・無生（誰と何「名前は誰」）

ヤクート語、トゥヴァ語、カザフ語、モンゴル語、さらにツングース諸語の多くは「あなたの名前は誰」式の言い方をする（菅原・温品 p.c.）。他方トルコ語、ウズベク語、ウイグル語では日本語や朝鮮語同様、「あなたの名前は何」式の言い方を、さらにタタール語では「あなたの名前はどんな」式の言い方もあるという（菅原 p.c.）。

[ナーナイ語] *sii gərbusi ui?* 「あなたの名前は誰」

3.2. 不定表現

トルコ語での不定表現は基本的に疑問詞とは形の上での関連が無く、*bir* 「1」で不定を表現する（菅原 p.c.）。

istediğin bir şey var mı?

「あなたの欲しい 何かがありますか？」

bir yere gidecek misin.

「どこか 行くんですか」

ただし *kim* 「誰」に対しては *kimse* 「誰か、ある人」がある。

ウズベク語、ウイグル語では *nerse* 「何か」も用いられているという（菅原 p.c.）。

モンゴル語では疑問詞によってその不定表現は異なるが、疑問詞と *НЭГ* 「1」を構成要素としている点では共通している（温品 p.c.）。

誰か	<i>ХЭН НЭГ</i> (ЭН) ХҮН
何か	<i>Ямар НЭГ</i> ЮМ / ЮМ
どこか (に)	<i>хаа НЭГ</i> газар / <i>хаа НЭГТЭЭ</i>
いつか	<i>ХЭЗЭЭ НЭГ</i> (ЭН) ЦАГТ / <i>ХЭЗЭЭ НЭГТЭЭ</i>

ツングース諸語では日本語と同様に、疑問詞に疑問文のマーカをつけて不定を示す。

[ナーナイ語]

dərə ojalani *xai-nuu* biini.

机の 上に 何か ある (*xai* 「何」)

ui-nuu uikəwə duktəini.

誰か 戸を 叩いている (*ui* 「誰」)

siaxasi-*nuu*.

食べたか?

朝鮮語では疑問詞がそのまま不定表現に用いられる。漢語及びさらにその南方の諸言語ではこのように疑問表現と不定表現が形の上で区別されないという(橋本 1981: 24-67 による)。

je guseg'ei 'issneun ges'i *mu'es*'ibnigga?

「あの 隅に ある ものは 何ですか?」(油谷他編 1993: 737)

mu'es jom jusibsi'o.

「何か ちょっと 下さい」(油谷他編 1993: 738)

'yebosei'yo, *nugusibnigga*?

「もしもし、 どなたですか?」(油谷他編 1993: 410)

'i saram margo *nugu* ddan saram 'ebsna?

「この 人じゃ なくて 誰か 他の 人が いないか」(油谷他編 1993: 410)

3.3. 全部否定

トルコ語では「誰もいない」は *kimse yok* (*kim* は「誰」、*kimse* は「誰か、ある人」) のように表現されるが、一般に全部否定の表現では、ペルシャ語起源の *hiç* を用い、疑問詞及び疑問詞派生の語を用いない。

hiçbir yere de *gitmedim*.

「いかなる 場所へ も 行かなかった」(竹内 1989: 176)

モンゴル語では日本語同様、「何も～ない」「誰も～いない」といった全部否定の場合には、やはり【疑問詞+「も」に類似した機能の付属語】を用いて示す。ツングース諸語も同様である。

[モンゴル語]

ямар ч бараа байхгүй.

「どんなの も 品物 無い」(小沢 1983: 610)

[ナーナイ語]

komnatado *ui-dəə* abaani.

「部屋に 誰も いない」(Onenko 1986: 140)

ただし、ツングース諸語では全部否定の意を示すのに、後述の相関構文が用いられることも多い。

朝鮮語ではこうした全部否定の場合、疑問詞より派生した語は使われず、'amu「誰(か)、誰(も)」から'amu-ges「何(か)、何(も)」や'amu-dei「どこ(か)、どこ(にも)」、'amu-ddai「いつ(か)、いつ(でも)」が派生した形になっている点で特異である(cf. nugu「誰」、mu'es「何」、'edi「どこ」、'enjei「いつ」)。

3.4. 相関構文

この問題は複文の問題として扱うべきものかもしれないが、便宜上この疑問詞の項でとりあげることにする。

ツングース諸語のあるものは、日本語で「働かない者は食べない」のように表現するところで、疑問詞が用いられ、「誰が働かない、その人が食べない」もしくは「誰が働かない、誰が食べない」のような表現方法をとる。これは疑問詞が関係代名詞にかなり近い機能を果たすようになってきているものとみることができる。津曲(1996)はこれをロシア語や中国語の影響と考えている。松村(1992:160-1)はこれを相関的な構文と呼んでいる。本稿もこれにならい、こうした構文を相関構文と呼ぶことにする。松村(1992)によれば、ウラル諸語のマリ語などにもこれに類するものでさらに関係代名詞的な構造の文があることがわかる。

さらにこうした構文はモンゴル語やトルコ語でも普通に用いられるという。日本語を母語としている者には確かに関係代名詞的で異質に映る構文だが、アルタイ諸言語全般に広く存在するものようである。したがってツングース諸語にある相関構文を全てただちにロシア語や中国語からの近年の影響と考えることには疑問を呈したい。

トルコ語では先行する節は必ず条件形になり、疑問代名詞を指示代名詞で受ける形をとるといふ。

<i>hangisini</i>	<i>beğenirsen,</i>	<i>onu</i>	<i>al.</i>
どれを	気に入るなら(おまえが)、	それを	取れ
「おまえの気に入ったものを取れ」			
(決り文句で) <i>nerede</i>	<i>akşam,</i>	<i>orada</i>	<i>sabah</i>
どこで	夕方、	そこで	朝

モンゴル語では、条件形だけでなく、終止形でもこの構文が成立する。やはり疑問代名詞を指示代名詞で受ける形をとる。

ХЭН	түрүүлж ирнэ,	тэр	хожно.
誰が	先んじて 来る、	そいつが	勝つ 「先に来たものが勝ち」

まだ十分な資料は無いが、こうしたアルタイ諸言語の相関構文には、次のような傾向があるのではないかと考える。すなわち、英語で言えば先行詞を含んだ *what* のような構文をとる。意味の面では、全体集合に限定をかけて特定の対象を選び出すのではなく、その条件にあてはまるもの全てに関してある事柄を述べる、つまり一般論を述べる文を形成する。

この点から考えると津曲(1996:183-4)が Kolesnikova(1966)より引いているエウェンキー語の二つの例は異質であり、これらはやはりロシア語からの影響と考えるべきものかも

しれない。他方、朝鮮語や日本語にはこうした相関構文は存在しない。

3.5. 反語

朝鮮語が日本語と異なる点の一つに、「ある」ということを強く主張するのに「どうしてないでしょうか」と言うなどの反語法がよく使われる」という点があげられるという（権 1992 : 14）

モンゴル語及びツングース諸語でも日本語よりははるかに多くこの反語表現が用いられる。見方を変えればこうした反語表現とは疑問代名詞及び疑問のマーカ―の、疑問以外の用法のひとつであるといえよう。どのような疑問詞からの反語が、どのように用いられているのか、等についての詳細な対照は今後の課題としたい。

4. 形容詞

4.1. 品詞的性格

ツングース諸語における形容詞は、直接格の接辞をとるなど、形態的にほとんど名詞と同じような振る舞いをする。この点でモンゴル語、トルコ語と同じである。しかしモンゴル語とトルコ語の形容詞はふつうそのままの形で副詞としても使われるのに対し、ツングース諸語ではふつう道具格をつけないければ副詞的に使えない。

[トルコ語]

hızlı konuşmak.
「はやく 話す」(竹内 1989 : 175)

[モンゴル語]

хурдан ирээрэй.
「はやく いらっしゃい」(小沢 1983 : 499)

[ナーナイ語]

turgan-ji tutuuri
「はやく 走る」(Onenko 1986 : 24)

朝鮮語での形容詞は動詞と形態的にほぼ同じ振る舞いをする（アスペクト的な面から、連体形の取り方及び非尊敬の終止形に、はっきりとした違いが現れるが、その他はかなり共通している）。さらに注目すべきはいくつかの形容詞（**keuda**「大きい」、**bargda**「明るい」など）が「大きくなる」、「明るくなる」の意でも用いられるという点である（梅田 1991 : 9 による、ただし朝鮮語ではこうした形容詞は限られているようだ、なおアイヌ語やギリヤーク語に同様の現象がみられる、そしてこれらの言語でも形容詞は動詞と形態的な振る舞いがほとんど同じである）。

日本語の形容詞は現在用言のうちに数えられるが、これは歴史的に動詞「ある」の助けを借

りて諸活用形を整えてきたものであって、かつては名詞的性格を強く持っていたと考えられる。語幹による複合語形成が、名詞同士の複合語とパラレルであることにもかつての名詞的性格が強く現れている（早-足、雨-足）。現在でも琉球方言の一部では語幹のまま名詞を修飾することができるという（*taka jama*「高い山」宮古方言、狩俣 1992 : 861）。またいわゆる形容動詞は連体的もしくは連用的に他の語を修飾する時以外は全く名詞と同じように振る舞う。

本稿が取り上げた諸言語において、形容詞が名詞的な性格を持っているのか、それとも動詞的な性格を持っているのか、という違いは、形動詞が文末の述語動詞として用いられるか否か、ということと大きく関わっているものと思われる。つまり形動詞が文末でも用いられるアルタイ諸言語では形容詞は名詞的な性格を持っているし、形動詞が文末では用いられない朝鮮語では形容詞は動詞的な性格を持っている。

4.2. 比較級

古チュルク語や、トルコ語以外の多くのチュルク語には形容詞の比較級が存在する（例えばウズベク語の-roq、しかし比較表現において必須のものとして要求されるわけではない、つまり屈折要素ではない）。

比較級と呼ぶには問題があるかもしれないが、次にみるような語形成の手法がいくつかの言語に観察される。

トルコ語では第一音節を前に重複して特定の子音を加えることにより、形容詞的な意味の語が示す程度を強めることができる。生産性は高いが全ての形容詞の意味の語でできるわけではない。母音で始まる語は必ず **-p** をとり、子音で始まるものは **-p**、もしくは **-m**、**-r**、**-s** をとる（Swift 1963 : 123、以下の例も）。

olgun 「熟した」	opolgun 「すっかり熟した」
başka 「別の」	bambaşka 「全く別の」
belli 「確かな」	besbelli 「全く確かな」
çabuk 「速く」	çarcabuk 「たいへんすばやく」

モンゴル語では、主に色や、大きさ、温度などを示す形容詞の程度を強めるために第一音節を前に重複して **-b** をつける（Kullmann 1996 : 219、下記の例も。なおより正確には、形容詞の第一音節が閉音節の場合、音節末の子音を落としてから前に重複して **-b** をつけると記述しなければならない（梅谷 p.c.））。

ца-в цагаан 「とても白い」、**ха-в халуун** 「とても暑い」

ツングース諸語では、こうした部分重複によって形容詞を強めるやり方は一般的でない。しかし、シベ語、ソロン語、オロチョン語、ヘジェン語に見出されること（いずれも中国領のツングース語である）が報告されている（津曲 1993 : 86-7）。これらはモンゴル語からの影響によって生じた可能性が考えられる。

アルタイ諸言語の3グループ(チュルク、モンゴル、ツングース)、及び朝鮮語、日本語の文法は本当に似ているのか

朝鮮語、日本語には形容詞の比較級は存在しない。ただ朝鮮語では日本語の「もっと、よりいっそう」にあたる *de* を日本語よりも多用する(野間 p.c.)。

上記の他、指小辞が形容詞について比較級的に機能する(ただし程度を弱める方向で) ことについては、指小辞の項を参照されたい。

4.3. 感情形容詞の人称制限

日本語の感情・感覚形容詞には人称制限があり、通常1人称を感情を感じる主体としてしか用いられない。3人称を感情主体とする場合には「-がる」を用いるか、推量のムードの形式を伴わなければならない。

*彼は恐い(恐怖を感じている主体が彼である、という意味で)

*彼は痛い *彼は行きたい

彼は恐がっている 彼は恐いみたいだ

トルコ語の感情述語にはこうした人称制限はない(菅原 p.c.)。

モンゴル語の *баяртай*「うれしい」、*гунигтай*「悲しい」などの感情形容詞にはやはり人称制限があり、1人称を感情主体として用いる(温品 p.c.)。

朝鮮語でも、*gibbeu*-「うれしい」、*seurpeu*-「悲しい」、*museb*-「恐い」などをはじめとする感情形容詞にやはり人称制限があり、話し言葉では基本的に1人称を感情主体として用いる。3人称を感情主体とする場合には、日本語の「-がる」に似た機能を持つ *-'a/-'e hada* を接続するか、推量のムード形式を接続しなければならない。ただし *'apeu*-「痛い」は例外で、3人称主語でもふつうに用いられ、*-'a/-'e hada* は用いられない。

geuneun 'apeuda.

「彼は 痛がっている」

**geuneun 'ap-ehada.*

5.0. 動詞とそのカテゴリー

5.1. ヴォイス

5つのどの言語も受身、及び使役に関連する派生接辞を持っている。これにはついては以下で詳しくみる。再帰の派生接辞を持っているのはトルコ語だけである。これはモンゴル語とツングース諸語には再帰人称接辞があるのに対して、トルコ語がこれを欠いていることと関連があるのかもしれない。相互に関しては、アルタイ諸言語の三つのグループがこの派生接辞を持っているのに対して、朝鮮語と日本語はこれを欠いている。日本語では分析的な表現である「～し合う」があるが、朝鮮語には動詞の側で相互の意味を表示することができず、もっぱら副詞 *sero*「互いに」によってその意を表現している。

5.1.1. 受身とその機能

アルタイ諸言語で一般に受身とされている形式は、非人称（不定の行為者による行為、もしくは行為者が誰であるかがあまり問題とならない行為）の性格を強く持っていると考えられる。受身の形式の頻度は日本語などよりも低く、行為者が明示される場合には能動文を用いるのが普通である。

トルコ語の受身の形式 (-il⁴/- (i) n⁴) は、行為者が現れない場合に多く用いられ、非人称述語の形成としての性格を強く示している。

モンゴル語で一般に受身とされている -гд は「自発」としての面を強く持っている (5.2. で述べる)。言い換えれば、意図的に動作を行う動作主を削除する機能があるといえよう。

ツングース諸語では受身に当たる形式はない言語が多く、それに近い働きをするものもあるがその使用頻度は低い。またこれまで受身とされてきた形式には、非人称の形式として、捉え直すべき言語もある。

フランス語に近い表現があるが、日本語では受身が使われるような場合に、ツングース諸語では「人」にあたる名詞を主語にした文を使う場合がある。

[ナーナイ語]

aisin mənɣun biči~n, (中略) čuɣnu nai čoolaxan
 金 銀が あったのに、 すっかり 人が 盗んだ、(すっかり盗まれた)
 (風間 2000 : 114)

ただしツングース諸語の中でもエウエン語は例外で、かなり頻繁に受身が用いられる。行為者も与格をとって現れる場合が少なくない。

日本語での受身には、こうした非人称の機能の他に、主語不転換の機能で働いているものがあると考えられる。すなわち、例えば日本語では、「私は姉のケーキを食べた。そして姉が私をなぐった」よりも「私は姉のケーキを食べた。そして(私は) 姉になぐられた」の方が自然である。すなわち(主語が現れない文も多く、動詞の人称変化もない)日本語では、主語を変えないという目的のために受身が機能している面がある(野田 1991a : 130-3、以下ではこれを「主語不転換の機能」と呼ぶ)。またそれがゆえに受身の頻度も比較的高いのであろう。他方ツングース語でも主語のない文が頻出するが、動詞の人称変化があるためか、同じようなケースで受身を使わずに主語を交代させるようである。

なおモンゴル語やツングース諸語の一部では、使役の形式が受身の機能に用いられることがある(5.1.2.2.で述べる)。そこでは主語不転換の機能も観察される。

5.1.1.1. 間接受身文

トルコ語では自動詞の受身を含め、日本語にみられるような間接受身文は成り立たない。日本語では自動詞の受身で表現される「雨に降られる」という文は、トルコ語においても被動者を主語にして表現することはできるが、そこでは自動詞ではなく、他動詞 *yakalamak* 「つかまえる、とらえる、襲う」の受身形 *yakala-n-mak* 「つかまる、取りおさえられる、(病気など

に) かかる」によって表現される。

Yağmura yakala-*n*-mak (もしくは) yağmura tutulmak
雨に 降られる(竹内 1989: 382) 雨に 降られる(竹内 1989: 402)
(tutulmak 「つかまえられる、恋をする、とりこになる」)

なおトルコ語では自動詞が受身形になることがあるが、これは非人称文で、日本語に訳せば可能なような意味になる。

Bu yoldan Nişantaşı'na gid-*il*-ir.
この道から ニシャンタシュに 行かれる(行ける) (林 1995a: 156)
bu kapıdan gir-*il*-mez.
このドアから 入られない(入れない) (林 1995a: 156)

いわゆる持ち主の受身の間接受身文「時計を奪われた」は、形の上では *çalmak* 「ぶつける、叩く、投げつける、害をする、襲う、盗む、(楽器を)奏でる、まぜる、音を出す、似る、鳴る etc.」の使役形である *çal-dır-mak* 「鳴らせる、奏でさせる、奪われる、泥棒にさらわれる」を用いて、*saatımı çal-dır-dım* 「時計を奪われた」(竹内 1989: 74) のように表現することができる。ここにも後でみる使役と受身の接近をみることができる。

モンゴル語では以下でみる朝鮮語同様、体の部分に関しては間接受身文(持ち主の受身)が成り立つが、それ以外は基本的に成立しないという(温品 p.c.)。

би энэ нохойд гараа хаз-уул-чих-сан. 「私はこの犬に手を噛まれた」
私は この 犬に 手(自分の)を 噛む-使役-完了-過去

ただし次のように体の部分でない間接受身文(持ち主の受身)の例も見出されるという(梅谷 p.c.)。動作の対象の譲渡可能性や所有階層での位置、その行為によって生じる主体の不利、などがこの構文の成立条件になっていないか、詳しく調べていく必要があると思われる。

Чимгээ Цэрмаад 40,000 доллар залил-уул-ан алджээ.
チムゲー ツェルマーに 4万 ドル だます-使役-副動詞 失った
「チムゲーはツェルマーに4万ドルだまし取られた」

1998 оны намар ургуулсан тарианых-аа 90 хувийг цасан-д дар-уул-сан.
1998 年の 秋 育てた 穀物の-再帰 90パーセントを 雪-与位格 圧する-使役-形動詞
「1998年の秋に育てた穀物の90%を雪につぶされた」

なお若い世代では、以下のように元の動詞(他動詞)の目的語(対象物)が現れない受身文を文法的と判断した、という(温品 p.c.)。

би шумуулд хаз-уул-сан. 「私は蚊に食われた」
 私は 蚊に 噛む-使役-過去

朝鮮語では、やはり譲渡不可能な体の部分などでは間接受身文（持ち主の受身）が成り立つが、それ以外は能動文もしくは直接受身文による（塚本 1983 : 182、以下の例文も）。

geuneun gireuden gai'eigei soneur mur-ri-'yessda/mur-ri-'essda.
 彼は 飼っていた 犬に 手を 噛まれた
 gegi semyen gonranhada. (能動文、自動詞の受身は不可)
 そこに 立つと 困る (そこに立たれると困る)
 'abejiga nai pyenjireur 'irge beryessda. (能動文、体の部分以外の持ち主の受身は不可)
 父が 私の 手紙を 読んでしまった (私は父に手紙を読まれた)
 nai pyenjiga 'abejihantei 'irghejyessda. (直接受身文)
 私の 手紙が 父に 読まれた

5. 1. 2. 使役

5. 1. 2. 1. 二重使役形

トルコ語、モンゴル語の使役形は二重に用いられることがある。トルコ語での頻度はあまり高くないが、モンゴル語ではこうした二重使役形の生産性は高いという。

[トルコ語]

şoför muavine yolcuları koltuklarına otur-t-tur-du.
 運転手は 助手に 乗客たちを 座席に 座らせさせた (林 1995a:160)

モンゴル語の場合、二重使役形は上記のトルコ語の例のように意味の方でも使役の事態が二重になるとは限らない。すなわち必ずしも「A が B をして C を～させさせた」というような意味にはならない。モンゴル語の二重使役形の機能については梅谷 (1999) に詳しい。

ツングース諸語では形の上で二重使役形と解釈できるものがあるが、語彙的であり、生産性は無い。

5. 1. 2. 2. 受身としても用いられる使役

モンゴル語では一般に使役とされている -уул² / -лг が受身の意で用いられる場合がある (以下の例は梅谷 1998 : 5-6 による)。

би Дулмаа-г уйл-уул-сан.
 私は ドルマーを 泣かせた
 би Доржи-д доромжл-уул-сан.
 私は ドルジに いじめられた

上の例に見るように、使役の意では Causee に対格が(自動詞の場合)、受身の意では行為者に与位格が用いられる。

したがって一般に受身の形式とされている -гд との機能の違いや使い分けが問題となる。

例えば、「殺された」と言う場合に、行為者が不特定である場合には -гд による受身文が、行為者が具体的に特定されている場合には -уул² / -лг による受身文が用いられる(温品 p.c.)。

梅谷(1998: 64)は以下のような文の違いについて、どのようにインフォーマントが感じているかを報告している。すなわち、-уул² / -лг を用いた上の文では「バトが私をめがけて叩いてきて、私が叩かれた状況が思い浮かび」、-гд を用いた下の文では「バトの近くを通りかかったら、ちょうどバトが手を動かして、その手がたまたま私に当たって叩かれた状況、あるいは、バトが暴れていたが、そのことに気づかずに近くを通った私がバトの手に当たって叩かれた状況が思い浮かぶ」としている。

би Бата-д цохи-уул-сан.

私は バトに 叩かれた

би Бата-д цохи-гд-сан.

私は バトに 叩かれた

なおモンゴル語(土族語)には受動態を形成する特別な接尾辞がなく、受動態は使役形と同じ形で表わされるという(栗林[均] 1992c: 493)。

ツングース諸語でも、満州語、ナーナイ語、ウイльта語などでは、一般に使役とされている形式が構文や動詞の意味によって受身を意味する場合がある(詳しくは風間 2002)。

[ウイльта語](下記の例文は Tsumagari 1985 による)

bii čaa narree ηən-nəuč-čim-bi.

私は その 人(対格) 行かせた(行く-使役・受身-完了-一人称単数主語)

bii čaa naridu paač-čooč-čim-bi.

私は その 人(与格) 叩かれた(叩く-使役・受身-完了-一人称単数主語)

ここでもやはり、使役では対格名詞が、受身では与格名詞が現われているが、このような格が受身/使役の意味を決定しているわけではない(風間 2002)。

朝鮮語の-'i/-hi/-ri/-gi も使役と受身の両方の意味になり得る。さらに単なる他動としての意味でも実現する(bo-da 「見る」 - bo-'i-da 「見える、見せる、見られる」)。

ただし以下のいくつかの点に留意しておく必要がある。まずこの接辞は語幹との結びつきが強く、意味の面でも形の面でも語幹によって不規則な面を示す。つまりは文法的というよりも語彙的な要素である(次の 5.1.3. でさらに述べる)。使役的な意味のものには上記の他に -'u/-gu/-cu という異形態がある(形の面での大きな違いから、別形態素とすることも考えられ

よう)。*-’i/-hi/-ri/-gi* がつく動詞語幹の意味によっても、使役か受身か、どちらの意味になるかはある程度決まっている。*meg-da*「食べる」に対する *meg-’i-da*「食べさせる」と *meg-hi-da*「食われる」のように、形に分かれるものもある。さらに、慶尚道の方言では使役的な意味のものと受身的な意味のものとでアクセントが異なる。

英語の “I have my hair cut.” のような *have* 使役文、フランス語の *faire* 使役文、中国語の「叫 *jiao*⁴」、「讓 *rang*⁴」による使役文でも受身の意味で解釈される場合があることが知られている(現代中国語のこうした用法について、橋本 1989 : 901 は満州語の影響を考えている)。

ナーナイ、ウイльтаなどのツングース諸語には非意図的再帰的、及び主語不転換、というべき使役の用法がある(詳しくは風間 2002)。トルコ語にも非意図的再帰的用法の使役がある。なお主語不転換とみるべき使役の用法はギリヤーク語やエスキモー語にもみられる。日本語の現代語における「少年は目を輝かせて話を聞いていた」、古文の「馬の腹射させて」などもやはり主語不転換の機能を持っているとみるべきであろう(風間 2002)。

[ウイльта語]

ŋaalabi *kitaanji goči* *luk-pauč-či-ni*. (非意図的再帰的用法)
 私の手が 針で また 刺す-使役-完了-三人称単数 (池上 1997 : 114)
 「私の手に針がまた刺さった」

ǰewi *pəlim-boo-či-mi* *ərkəulleeni*. (主語不転換)
 自分の相棒を 急ぐ-使役-継続反復相-副動詞 彼はゆっくりする (池上 1997 : 60)
 「自分の相棒が急いでいるのに彼はゆっくりする」

ǰilləŋjiwəni *narree* *saa-woo-či-mi*. (主語不転換)
 彼はうそをついている、 人を 知る-使役-継続反復相-副動詞 (池上・津曲 1990 : 60)
 「彼はうそをついているよ、人が知っているのに」

[トルコ語]

Vasfiye *Teyze* *yüz-ü-nu kız-dur-dı*. (非意図的再帰的用法)
 ヴァスフィエ おばさんは 顔を ほてらせた (川口 1999 : 93)

5.1.3. 動詞の自他

5.1.3.1. 使役と他動詞化、受身と自動詞化の境界

日本語では使役と他動詞化、受身と自動詞化の境界は、形の点では少なくとも分明である。そして動詞の自他は語彙の問題、使役と受身はともにかなり生産的であって、文法の問題ということができる。いわゆる能動詞(意思動詞)がほぼその派生可能な範囲にあたる。意味の点ではその境界は連続している面があるが、違いが現れる場合もある([] 内のようなニュアンスが生じる、野田 1991b : 225-6、例も)。

[使役] 母が順子を寮に入らせる [動作主の自主的な意志]

[他動詞] 母が順子を寮に入れる [動作主の意志を問わず]

[受身] 風船が割られる [動作主の存在]

[自動詞] 風船が割れる [自然な変化]

他方、トルコ語のいわゆる使役形式 **-dir⁴** etc. (動詞語幹によってさまざまな異形態がある)、モンゴル語の同じく **-үүл²** / **-лг** は他動詞形成接辞とも使役の接辞ともいえるもので、その境界は明確に引けるものではない。どちらの言語でも派生した動詞の意味は予想できない面がある。

[トルコ語]

ye-mek 「食べる、etc.」

ye-dir-mek 「食べさせる、養う、育てる、etc.」

[モンゴル語]

ЯВ-ах 「行く、etc.」

ЯВ-үүл-ах 「行かせる、發送する、派遣する、(仕事を)行なう、実行する、etc.」

特にトルコ語では形の面でも不規則な異形態が多く、語彙の問題であるということが出来る。以下は独自の使役形を持つ動詞の例である (林 1995a : 161 による)。

git- 「行く」	götür- 「持って行く、連れて行く」、 gönder- 「行かせる、送る」、 gider- 「去らせる、取り除く」
gel- 「来る」	getir- 「持って来る、連れて来る」
gör- 「見る」	göster- 「見せる」
kalk- 「起きる、持ち上がる」	kaldır- 「起こす、持ち上げる」

朝鮮語の **-’i/-hi/-ri/-gi** も形と意味の両面で語彙的な不規則性を示し、これも語彙の問題であるということが出来る。他方朝鮮語では使役にさらに **-gei hada** という分析的な形式が、受身にも **-’ejida** という形式があって、これらはきわめて生産性が高い。

5. 1. 3. 2. 自他対応

ツングース諸語でこれまで単に「自動詞から他動詞を派生する」とされてきた接辞（ナーナイ語では **-wo/-wu/-bo/-bu**）がある。しかしこの接辞がつく動詞の意味を調べてみると、「移動」を示す動詞ばかりに偏っていることがわかる。他方派生された方の動詞はもっぱら「運搬」を示す動詞ばかりである。したがってより詳しくはこの接辞の機能を「移動動詞から運搬動詞を派生する」ものと規定することができる。

[ナーナイ語]

ii- 「入る」 ii-*wu*- 「入れる」、
 too- 「上る、山の方へ行く」 too-*bo*- 「持って上る、持って山の方へ行く」
 agbin- 「現れる」、agbim-*bu*- 「引き出す、取り出す」

他のアルタイ諸言語や朝鮮語、日本語にはこのような機能を持つ接尾辞は見出されていない。
 またこれまで日本語研究において一般に「自他対応」と呼ばれてきたものは、以下のような構文的な対応を前提としていた。

自動詞文 本が 落ちる
 他動詞文 彼が 本を 落とす

つまり自動詞主語 (S) = 他動詞目的語 (P) である。しかし上記のツングース諸語にみられる場合にはこうした制限は無く、上に見た移動動詞と運搬動詞の対応の場合、むしろ以下のような自動詞主語 (S) = 他動詞主語 (A) の対応を背景に成立していることが多い。

[ナーナイ語]

自動詞文 *təi nai ʃookčiji ii-guxəni.*
 その 人が 家に 入った
 他動詞文 *təi nai moowa ʃookčiji ii-wu-guxəni.*
 その 人が 薪を 家に 入れた

したがって「自他対応」という概念そのものについても、異なるタイプを示す言語を視野に入れた上で、考え直して行く必要がある。

5.1.4. 動詞の他動性

5.1.4.1. 同族主語

ツングース語では、見かけの上では1項動詞であるが、(主語の) 名詞の語幹と、動詞の語幹が同一で、意味的・実質的には0項動詞とみるべきものがある。これを「同族主語」と呼ぶことができるだろう。

[ナーナイ語]

tigdə tigdə-i-ni (雨が雨る)
 雨 雨が降る-形動詞現在-3人称単数

他方モンゴル語やトルコ語では、全く同一の語幹ではないが、一方が他方から何らかの接辞で派生したものに、こうした同族主語をとるものがある(菅原・温品 p.c.)。

[トルコ語]

yağmur yağ- 「雨が降る (降るものが降る)」

[モンゴル語]

ЦЭЦЭГ ЦЭЦЭГЛЭХ 「花が咲く (花が花る)」

ちなみに「雨が降る」という表現に関して、この現象は概念的に主体と動作が一体化しているので、多くの言語において、主語の名詞、もしくは動詞の片一方にのみ「雨」の意味があり、他方には「雨」の意味がない表現が多く見うけられるようだ。たとえば朝鮮語では「biga *oda* (雨が「来る」)」、モンゴル語では「*бороо орно*。(雨が「入る」)」、ロシア語では「*дождь идёт*。(雨が「行く」)」のような言い方をする。これらの言語では名詞の方に「雨」の意があつて、動詞の方には「雨」の意がない。他方英語、ドイツ語、フランス語等では動詞の方に「雨」の意がある。これらの言語では主語が必須であるので、形式主語をとることになる(英 *it rains*. 独 *es regnet*. 仏 *il pleut*.)。

5.1.4.2. 同族目的語

同族主語の問題と平行して、同族目的語の問題がある。これらはやはり表面上は二項動詞だが、意味的・実質的には一項動詞であり、いわば半二項動詞(擬似二項動詞)とでも呼ぶべきものである。

トルコ語では、原則的に名詞と動詞は別語幹だが、なんらかの接辞によって派生したものには同族目的語をとるものがある。

oyun oynamak 「踊りを踊る」

モンゴル語でも同様に、原則的に別語幹だが、接辞、特に-*ла*⁴によって派生したものに同族目的語をとるものが多くある。

дуу дуу-ла-х 「歌を歌う」

ツングース諸語では派生接辞をとらずに直接名詞が動詞語幹として用いられ、その名詞を同族目的語にとるものがある。

[ナーナイ語]

ǰari-wa ǰari- 「歌を歌う」

niŋmaam-ba niŋmaan- 「物語を物語る」

他方、-*la/-lə*によって名詞から派生した動詞が同族目的語をとるものもある。

aapomba aapo-la- 「帽子をかぶる」

muəwə muə-lə- 「水を水汲みに行く」

朝鮮語には *cu-m-'eur cu-da*「踊りを踊る」、*ggu-m-'eur ggu-da*「夢を夢る」、*sar-m-'eur sar-da*「人生を生きる」など、上記の諸言語とは逆に、動詞語幹より-*m*によって派生した名詞を同族目的語にとるものがある。

日本語ではいわゆる同族目的語をとるものに、「踊りを踊る」、「歌を歌う」、「舞を舞う」などがある。

日本語の場合、「歌」は名詞語幹より動詞語幹を、「踊り」及び「舞」は動詞語幹よりいわゆる連用形によって名詞を派生した形になっている。

5.1.4.3. 感情述語とそのとる格

角田 (1991) は格枠組みの面から、二項述語に関する階層を提案している。すなわち「直接影響—知覚—追及—知識—感情—関係—能力」の順で他動性の強いものから順に弱いものへと階層をなしているという考えである。ここでは特にこのうちの「感情」を示す動詞のグループがどのような格枠組をとるかについて対照してみることにした。

トルコ語	モンゴル語	ツングース諸語 (ナーナイ語)	朝鮮語	日本語
-a/-e kızmak 与格	-ыг ² уурлах -д уурлах 対格/与位格	-či ajaktala- 方向格	=hantei/-'eigei hwareur naida 与格	〜が〜を/〜に 怒る
-a/-e şaşırmaq 与格	-д гайхах (「不思議に思う」の意) 与位格 -д/-аас ЦОЧИХ (「びっくりする」の意) 与位格/奪格 -д/-ЫГ ЦОЧИХ (「いぶかる」の意) 与位格/対格	~ji ərdəngəsi- 道具格	= 'ei norrada 向格	〜が〜に驚く
-a/-e sevinmek -dan sevinçli 与格/奪格	-д баярлах -д баяртай 与位格	-wa agdanasi- ~ji agdanasii- 対格/道具格	= 'i/-ga gibbeuda 主題 主格 (日本語の「〜は〜が構文」に類似、以下も) = (r) eur gibbehada 対格	〜が〜に/〜を 喜ぶ 〜は〜が嬉しい
-a üzülmek -dan üzülmek 与格/奪格 なお üzülmek は 形の上では受身 で, üzmek 「悲 しませる」があ る	-д гунигтай 与位格	-la ilaa~ji- ~ji ilaa~ji- 処格/道具格	= 'i/-ga seurpeuda 主題 主格 = (r) eur seurpehada 対 格	〜が〜を悲しむ 〜は〜が悲しい
-a utanmak -dan utanmak 与格/奪格	-д ичих -аас ичих 与位格/奪格	-wa ilaa~ji- ~ji ilaa~ji- 対格/道具格	= 'i/-ga buggeurebda 主題 主格 = (r) eur buggeure'wehada 対格	〜は〜を恥ずか しがる 〜は〜が恥ずか しい
-dan korkmak 奪格	-аас айх 奪格	~ji ηəələ- 道具格	= 'i/-ga musebda 主題 主格 = (r) eur muse'wehada 対格	〜が〜を恐がる 〜は〜が恐い

「怒る」は感情を感じる主体からの対象への働きかけが強く感じられるためか、与格や方向格

が用いられている。他方「恐い」は対象から感情主体への働きかけが感じられるためか、奪格が多く用いられている。それゆえに、この二つを両極として表を作成した。他の感情述語では格構造の揺れが観察される。

朝鮮語の =’i/-ga gibbeuda 「うれしい」以下4つの述語は形容詞で、-’a/-’e hada を用いて動詞化される（4.3.参照）。

5.1.4.4. ガラ交替

日本語において願望及び可能の形式によって派生（語幹を拡張）すると、その他動性は低くなり、対格のみをとっていた動詞が同じ名詞に主格もとれるようになる（願望の場合、拡張された語幹は形容詞変化となる、ただし「-がる」によって再度拡張すれば動詞変化に戻り、対格しかとれなくなる）。

魚が／を 食べたい 魚を 食べたがっている 酒が／を 飲む

朝鮮語ではやはり願望の形式 (-go sipda) による文で、主格と対格の両方が用いられるが (-go sip-’e hada では対格のみ)、可能の文では対格のみである。

sur-’i/-’eur masi-go sipda. sur*-’i/-’eur masi-go sip-’e hada.

「酒が／を 飲みたい 「酒*が／を 飲みたがっている」

sur*-’i/-’eur masi-r su ’issda.

「酒*が／を 飲むことができる」

5.2. 意志・無意志（自発の表現）

モンゴル語では受身とされている形式 -гд が無意志表現に用いられる（斉藤 2000）

намайг будаатай хуурга идэж байтал чулуу хаза-гд-ав.

私 (対格) 米入り 炒め物 食べて いたら 石 (主格) 噛む-gd-過去 (噛んでしまった)

галт тэрэгний цонхоор надад олон мал хара-гд-лаа.

汽車の 窓越しに 私に 多くの 家畜 見えた

би галт тэрэгний цонхоор олон мал хар-лаа.

私 汽車の 窓越しに 多くの 家畜 見た

一部のツングース語では使役とされている形式-waan²/-bowaan² が無意志表現に用いられる（5.1.2.2.参照）。

[ナーナイ語]

moowa tami nasalčiji toiko-waay-kim-bi,

薪を 扱っていて 目へ 当たる-使役-完了-一人称単数主語 (当ててしまった)

(風間 1998a : 78)

朝鮮語では -’a/-’e berida 「(補助動詞ではない、独立用法での意味は) 捨てる」、日本語で

は「～て しまう」が完了及び無意志表現に用いられ得る。

nareur dugo	'aju	ga	bery-essda.	ggambag	'ij-'e	beri-da.
私を	置いて	永遠に	行って	しまった	うっかり	忘れてしまう

さらに朝鮮語では -'a/'e jida に日本語の自発表現に対応する用法がみられる。

neuggy-e jida	「感じられる」	'yegy-e jida	「思える」
gidary-e jida	「待たれる」	geuri'w-e jida	「しのばれる」(油谷他編 1993 : 1623)

日本語の諸方言では、北海道から東北、北関東、静岡に分布する「～サル」に代表される形式が広く無意志表現に用いられている(加藤 2000 : 10-11、以下の例も)

[偶発行為]	ウミオミタラツイハシラサッタ	「海を見たらつい走ってしまった」
[自然発生]	マドガシゼンニアカサッタ	「窓が自然に開いた」
[可能表現]	コノコンロダラコドモノモサカナガヤカサル	「このコンロなら子供にも魚が焼ける」

総じてヴォイスの形式が無意志性を表示するために多く用いられていることが興味をひく。タイ語をはじめとする東南アジアの言語では、無意志動詞と自動詞、意志動詞と他動詞が密接な関係にあり、全ての動詞は語彙的に意志動詞が無意志動詞に指定されているようだが、アルタイ諸言語、朝鮮語、日本語ではそのようなことはない。無意志的な動作でも他動詞によって表わされうる。

5.3. アスペクト

5.3.0. 接辞で示される(統合的すなわち非分析的な)アスペクト形式

トルコ語のアスペクトの意味を示す形式はみな屈折接辞であり、ムード、テンスの要素及び副動詞と同じ位置でこれらと相補的に対立し、後ろには人称のみをとる。したがってテンスとは未分化である。

モンゴル語では -чих「完了」、-зана⁴「一時」、及び -схий「瞬時」と、生産性の高い形式としては3種類のアスペクトを示す派生接辞がある(Kullmann 1996 : 131-6、ただし Kullmann 1996 は本稿の 1.3.5.1. でとりあげた -цгаа⁴ をさらにアスペクトの中に加えている)。他方副動詞に文法化した別の動詞を続けることによって、すなわち分析的な形でさまざまなアスペクトの意味を示すことができる。

エウエン語ではアスペクトを示す 10 ほどの派生接辞(語幹拡張接辞)があり(以下の表は Novikova 1968 にもとづく)、これはツングース諸語の中でも多い方である(他にも、反動

体 **-rga**「逆方向に、再び～する」、試動体 **-sči**「～しようとする／しそうになる」をアスペクトに加えることが考えられる。エウエン語ではしかもアスペクトの接辞が一つの動詞に二つも三つもつくことがまれではない。おそらくアルタイ諸言語の中でも、分析的でない（つまりは派生（語幹拡張）接辞による）アスペクトの形式が最も発達した言語といえるだろう。

継続体	～している	-ǰ/-č/-ǰi/-či/-ǰid/-čid/-ǰij/-čij etc. (母音調和の異形態は省略、以下も)
一回体	一回～する	-n
多回体	何度も、もしくは続けて～している	-t/-č/-či
始動体	～し始める	-l
習慣体	いつも～する	-wat/-wač etc.
反復体	かつては～していたものだ、	-gra/-gara/-kara/-ŋara etc.
長時間継続体	ずうっと～する	-ǰaan
希少体	たまに～する	-wan
速攻体	すばやく～する	-malči
瞬間体	ちょっと～する	-san/-sn/-s

朝鮮語ではアスペクト専用の派生もしくは屈折接辞はない。-’ass/-’ess は意味の上で「完了」的な面を持つが、「過去」として扱われており、-geiss はムードとしての性格を強く示している。

日本語にもアスペクトを示す非分析的な形式はない。やはりタ形の意味に「完了」的な面があるのみである。

5.3.1. (分析的な形、特に存在動詞による) 不完了及び完了の形式

エウエン語やエウエンキー語では進行など不完了的な意味を示す接辞がある。しかしこれは接辞であって、副動詞的な形式に存在の動詞を続ける日本語（～ている）や朝鮮語（-go ’issda, -a/-e ’issda）、モンゴル語（-ж байх, -aad байх）のやり方とは異なっている。トルコ語の -iyor は歴史的には「歩く、進む」の意の独立した動詞にさかのぼる（林 1995a:33）。

チュルク諸語の中でも、ウイグル語、ウズベク語などでは **-p** もしくは **-a/-e** などの副動詞に、**tur-**（「立つ、とどまる」、トルコ語の **durmak** と同源）が接続及び融合して成立した形式が、現在進行や完了の状態を示す形式として用いられている（菅原 p.c.）。

なおモンゴル語の存在動詞 **байх** は元々「立ち止まる」等の意味で、現代モンゴル語でも近似の意味を保持している **байх**「やめる（他動詞）」が用いられている。日本語の「いる（くゐる）」もかつての意味は「座る、座っている、しゃがむ、ある場所に存在する、住む、活動がやむ、静まる etc.」である（林・安藤 1997 : 1418 による）。

日本語（共通語）の「～ている」は現在進行の意味と結果の状態の継続の意味の両方を示し、動詞によってどちらかの意味に決まるのが普通である。それゆえこれに基づいた動詞分類がな

されている。ただし、動詞によって、また文脈によっては両方の意味になり得る。朝鮮語にも類似の状況があり、アスペクトによる動詞分類が行なわれてきている。

他方西日本の諸方言の多くでは、「～（連用形）よる」、「～（音便語幹）とる」の対立があり、前者は主に現在進行、後者は主に結果の状態の継続の意味で用いられる（大分及び愛媛での前者は、「～よる」に将然体の用法もある、すなわち「(今) ～しようとしているところだ」（例えば滑走路を走っている状態で「飛行機が飛びよる」と言える）でも用いられるという）。以下の愛媛方言の例は佐藤（2002：159）より。

蛇が死んどる「死んでいる」 蛇が死んによる「死にそうだ」
 雨が降っとる「雨が降った（跡がある）」 雨が降りよる「雨が降っている」

「～しそだった」の意で「～しよった」が用いられる方言はさらにたくさんある。

過去に起きたできごとをその形跡から判断する「雨が降っとる」のような用法はその機能の点で、5.4.2.でみる伝聞法の機能につながっているものと考えられよう。

このような対立がさらにモンゴル語及び朝鮮語にみられる。おおざっぱに言えば、上記の -ж байх 及び -go 'issda が現在進行の意に、-аад байх 及び -а/е 'issda が結果の状態の継続の意で用いられる。ただし朝鮮語の -go 'issda は、再帰的な意味の動詞などでは、結果の状態の意味になることがある。またモンゴル語の -аад байх にはさらに「長い継続」（「今朝からずっと雨が降っている」など）の用法もある。なお朝鮮語の -а/е 'issda は自動詞（中でも、なんらかの結果の残存を含意する自動詞）にしかつかない、という生産性に関する制限がある。

日本語の「～ている」にはさらに「習慣」、「経験」の用法がある。上記のヨル・トルの対立を持つ方言では「習慣」についてはヨル及びトルの両方を用いることができ、「経験」ではトルが用いられる。

私は毎朝新聞を読ん **デイル**
 私は毎朝新聞を 読み **ヨル** / 読ん **ドル**
 彼はもう2回も韓国へ行っ **テイル**
 彼はもう2回も韓国へ *行き **ヨル** / 行っ **トル**

日本語の古文には完了を示す形式に「つ」と「ぬ」があった。両者の違いについてはいろいろな説がとねえられてきたが決定的な説はないという（林・安藤 1997：871）。両者の間には一般的傾向として以下のような対照的特徴が見られるという（林・安藤 1997：871）。

	接続	表現される気分や感じ	意味
つ	主に他動詞につく	人為的（動作的）、主観的	ある動作・動きがそこで終わった
ぬ	主に自動詞につく	自然的（状态的）、傍観的	ある動作・動きがそこから発生した

「ぬ」に関して、自動詞につくという接続の面と、ある動きが発生し、その結果の状態が継

続している、という意味の面では、朝鮮語の *-a/-e 'issda* と共通する点がある。

5.3.2. 習慣体

トルコ語とモンゴル語には語末の屈折接辞である(つまりテンスやムードの接辞と相補的に現れる)習慣体を示す形式があり、習慣や一般的心理を示すのに用いられる。

トルコ語でのこの形式 *-ir⁴/-er²/-r* は、中立形と呼ばれている(林 1995a:48、以下の例も)。

Fatma	sabah	erken	kalk- <i>ar</i> .
「ファトマは	朝	早く	起きる(そういう習慣だ)」
kışın	yağmur	yağ- <i>ar</i> .	
「冬は	雨が	降る	

使用は限定されているが、形動詞としての用法がある(林 1995a:212、下記の例も)

yan-ar dağ 「火山(燃える山)」

モンゴル語でのこの形式 *-dar⁴* は、習慣形動詞(橋本・谷 1993:84)、Indefinite Present (Kullmann 1996:144) などと呼ばれている(以下の例は Kullmann 1996:144 より)。

би	өглөө	бүр	долоон	цагт	бос- <i>дог</i> .
「私は	毎	朝	七	時に	起きる」
зун	халуун	бол- <i>дог</i> .			
「夏は	暑く	なる			

これに対して、日本語ではこうした習慣や一般的心理を示すのに特別な形式を持たず、上記の訳のように単なる現在形や進行形を使う。朝鮮語もやはり特別な形式を持たない。

ツングース諸語では例えば上記のエウエン語の表にある習慣体 (*-wat/-wač* etc.) がこれに近い機能を持つものといえるだろう。しかしこの形式は語幹拡張の派生接辞であって、屈折接辞ではない(テンスやムードの形式はこの後ろに続く)。

5.4. テンス

5.4.1. テンスの形式と大過去形

朝鮮語は過去形を二つ重ねて用いることができる点で特異である(大過去形と呼ばれている)。アルタイ諸言語、日本語においてテンスの要素は接辞の中でももっとも後ろにつき(人称の接辞を除く)、屈折的な性格を強く持っているが、朝鮮語の *-'ass/-'ess* はそうではない。

梅田(1989:958、朝鮮語の表記は本稿の方式に変えた)によれば、「過去形は、現在までの過去のある時点で起こった動作を、その起点に注目して表わす。一方、いわゆる大過去形は、

過去のある時点で動作が終結したことを表わす。動作の終点に注目して表現するから、現在の状態とはつきり区別された過去のことがらを表わす。したがって、「お客さんが来た」は、過去形を使って、sonnim'i 'osy-ess-'e'yo. といえ、客は今玄関に来ているのであり、大過去形を使って sonnim'i 'osy-ess-ess-'e'yo. といえ、客は来たけれども、すでに帰っていないことを表わすのである」という。

モンゴル諸語でもブリヤート語では二つの過去形が複合的に用いられて大過去（もしくは過去完了）が示されるという（山越 p.c.、下記の例も）。

- bii osh-oo=b'. 「私は行った」
 私 行く-形動詞過去-1sg.
 bii osh-oo-hon=bi. 「私は以前に行った」
 私 行く-形動詞過去-形動詞完了-1sg.

なお上記の例中の -oo (/aa etc.) はモンゴル語の -aa⁴ と、-hon (/han etc.) はモンゴル語の -cah⁴ と対応する要素であるという。

ツングース諸語は一般にテンスの区別を有するが、エウエン語の直説法現在・過去の形式（もっとも頻度の高い形式である）は現在と過去の両方を意味しうる。

日本語の古文の「～つつ」の成り立ちについて、完了の助動詞「つ」が二つ重なったとする説がある（林・安藤 1997 : 886）。しかしその機能の面では、朝鮮語の大過去形とは異なり、反復や継続を主な用法としている。

5.4.2. トルコ語、モンゴル語、古代日本語における過去テンスでの evidentiality

トルコ語の過去形において、evidentiality における対立があることはよく知られている（以下の例は亀井・河野・千野編 1996 : 969 にもとづく）。

- gel-di 「来た（来たことを目撃した場合）」（経験法 perceptive）
 gel-miş 「来た（伝聞）」（伝聞法 reportive）

林（1995 : 25）はこの -miş について、「過去形と異なる点は、行為が行なわれた時点よりあとでそのことに気付いたことを、積極的にあらわす点である。過去形に比べ、間接的な知識であることが強調される。話し手が直接見たものでなく他人から聞いて知った事柄（伝聞）や、あとに残された痕跡や結果からの類推、などが典型的」であるとしている。

ただしこの対立はチュルク諸語全般を通じ一貫して見られるものではないという（菅原 p.c.）。

モンゴル語には以下のような過去の諸形式とその使い分けがある（以下の表は橋本・谷 1993 : 79 にもとづく、ただし一部改変）。なお以下の諸形式のうちで、-cah⁴及び-aa⁴は形動

詞であり、他は定動詞であるとされている。

-в	単純過去 第一式	直截的な過去叙述：話し言葉では、疑問文でだけ。第二式より時間的に最近の感じがある。「～した」
-сан ⁴	単純過去 第二式	最も普通の過去：詠嘆の気持ちのない客観的な過去形。第一式よりも時間的に前の感じがある。「～したんです」
-лаа ⁴	近過去	心理的に近い過去：自分で体験・見聞した既知の過去の出来事を叙述したり、予期していた出来事の発生を目前にして、「ほら～したよ」と詠嘆を込めて表現する主観的な過去形。
-жээ/-чээ	遠過去	心理的に遠い過去：未知だった過去の出来事を新たに知ったり、予期していなかった出来事の発生を目の前にして、「なんと～したんだ」と詠嘆を込めて表現する主観的な過去形。
-аа ⁴	推察過去	完了状態の推察、話し言葉で

朝鮮語には「目撃法」（菅野他 1988 : 224）と呼ばれる形式（-dera）がある（「体験法」とも呼ばれる、野間 p.c.）。

geuneun 'oneur haggyo'ei ga-dera.
「彼は 今日 学校へ 行っていたよ（歩いているところを目撃した）」

geuneun 'oneur haggyo'ei ga-ss-eyo.
「彼は 今日 学校へ 行ったよ」

'igei joh-dera.
「これが いいんだよ（おまえは知らないだろうが）」
（話し手の体験に基づく、聞き手は体験していないことが前提で用いられる）

油谷他（1993 : 498）はこの形式について、「過去の回想・詠嘆を表わす、過去の自分の体験に基づいて現在もそうだと断定する、etc.」と述べている。

日本語の古文の過去形には「き」と「けり」の対立があった（以下の記述及び例は林・安藤 1997 : 382, : 490-1）。

き — 過去（今より以前に自分が直接体験したということを回想する）。

けり — 過去からの継続・伝聞過去・詠嘆を含んだ気づき・単なる過去、単なる詠嘆（後発、鎌倉時代以降）。

今宵は十五夜なり **けり**「(今まで気付かなかったが) 十五夜だったのだなあ」
(気づきの「けり」)

その人ほどなく亡(う)せに **けり**と聞き侍りし

「その人はまもなく、亡くなったそうだと私は聞きました」

現代語での「今日は金曜日だった**っけ**」などの「**っけ**」にもこの残存が観察される。

このような詠嘆を含んだ気づきの意に関しては、トルコ語の *-miş*、及びモンゴル語の *-жээ* にも類似の用法がある。

[トルコ語]

kahve bit-*miş*. (コーヒーを入れようとしてコーヒーがなくなっているのに気づき)
「コーヒーが 終わっているよ」 (林 1995a : 24)

[モンゴル語]

nar gar-*чээ*. (いま気付くまで知らなかったが)
「太陽が 出たよ」 (橋本・谷 1993 : 38)

現代の日本語諸方言にも各地に「けり」の残存が観察される。大井川流域から川根町、春野町には「降**っけ**、見**け**」がある。静岡では以下のような使い分けがある。

イ**ッ**タ - 現在完了 イ**ッ**ケ - 過去 イ**ッ**タ**ッ**ケ - 過去完了

これらは上述の、朝鮮語における大過去とその構成と機能が類似している。

岩手には次のような対立がある。

行**っ**た**っ**け 過去の事実を傍観的・伝聞的に表現する形式

行**っ**た**っ**た 実際に体験した過去の事実を回想的に表現する形式

5.4.3. 未来（もしくは現在）に用いられる過去の形式

トルコ語の過去形（経験法）には近未来の用法がある。

gel-di-m 「今行きます」

来る-過去-1sg

ウズベク語、ウイグル語にもあり、しかも古くからある用法であるという（菅原 p.c.）。

モンゴル語の *-лаа*⁴ には近未来の用法がある（橋本・谷 1993 : 111、以下の例も）。

би яв-*лаа*. 「私は（もう）行きます」

中国語の「了」やロシア語の完了体など、完了とされている形式が近未来をも示すことが思い起こされる。

なお上述のモンゴル語の過去の形式のうち、*-в* 及び *-жээ/-чээ* にも近未来の用法があるが、その使用はまれで、方言によってはほとんど用いないこともあるという（橋本・谷 1993 : 111）。このようにみえてくると、モンゴル語でテンスとされている形式はテンスの対立よりも、客観的対主観的、直接的認識対間接的認識などの対立が重要で、ムード形式としての面を強く示して

いるように思われる。

朝鮮語では以下のような例を除き、基本的に過去形を未来の出来事を示すために用いることはできない。

'oneur sihab'eun 'uriga 'ig'y-ess-e.
「今日の 試合は オレたちが 勝ったな」

他方朝鮮語では特定の用言に関して、過去形が現在の状態を表わすのに用いられる。

gyerhonhaiss-seubnida「結婚しています」、darm'-ass-da「似ている」など。これは朝鮮語の過去形の歴史的な由来と関連している。

日本語でも完了とされている古文の「つ」、「ぬ」、現代語の「～てしまう」は未来を示し得る。

～命限りつと思ひ惑はる「これで命もきつとおわりになってしまうと、思いうろたえる」

はや舟にのれ、日も暮れぬ「早く舟に乗れ、日が暮れてしまうぞ」

明日にはもう読んでしまふよ

また、命令のニュアンスを帯びてではあるが、「さあ、買った」、「ちょっと待った」、「どいたどいた」のようにタ形が近未来を示すのに用いられる。「あっ、バスが来た」のようにたった今発見した現在の出来事を示すのにも用いられる。これもタ形の歴史的由来(くてあり)と関連している。

5.5. ムード

5.5.1. 2人称命令法

トルコ語の命令形、モンゴル語の命令形(下記参照)が語幹そのままの形であるのに対して、ツングース諸語の命令形は一般に明示的な接尾辞を用いた形をとる。すなわち語幹による命令形を持たない。

[ナーナイ語]

sia-ruu「食べる」

満州語だけは例外で、動詞語幹による命令形が用いられる(モンゴル語の影響と考えられる)。しかしこうした満州語においてもやはり少数の不規則動詞に明示的な形での命令形が痕跡として残っている(池上 1979: 347)。

なおチュルク諸語の中でもハラジ語には10種類の命令形があり、動詞の語彙による使い分けがある(菅原 p.c.)。

トルコ語には丁寧な命令、もしくは複数の相手に対する命令に用いられる複数命令形(- (y) in⁴)がある。

モンゴル語では命令法に類する語尾は以下のような体系をなしている(栗林[均] 1992b: 509)。

命令	- φ	ir 「来い」
勧告	- (G) ārai ⁴	ir-ēre 「(後で) 来なさい」
催促	- (G) āts ⁴	ir-ētš 「(早く) 来なさい」
懇願	- (ə) gtuj ²	ir-əgtūj 「おいで下さい」(ただし文語的な表現)

勧告の- (G) ārai⁴ を、以下にみるツングース諸語における遠未来命令法とみなすこともできる。

他方モンゴル諸語の中でもブリヤート語での -aarai は、未来命令の意味が明確で、モンゴル語のように丁寧な命令として用いられることはないという(山越 p.c.)。丁寧な命令、依頼には上記のモンゴル語の - (ə) gtuj² に対応する -gtii が用いられ、さらにこの両者を汲み合わせて「丁寧な未来命令」を表わすこともできるという(山越 p.c.、下記の例も)。

er'-eere-gtii 「後でおいで下さい」

来る-未来命令-依頼

ツングース諸語の多くに特徴的なことは近未来命令形(「今すぐ～しろ」)と遠未来命令形(「あとで～しろ」)の対立を持っていることである。これは近隣のダグール語やヤクート語、ドルガン語にも影響を与えている(藤代 1992 : 321-4)。

ナーナイ語 sia-ruu 「(今) 食べろ」 sia-xaari 「(後で) 食べろ」

朝鮮語の命令形は- (eu) sei'yo, -ra、日本語の命令形は-e/ro である。ただし両言語ともより丁寧な依頼、もしくはさらにはぶっきらぼうな命令などに、さまざまな形式とその使い分けがある。

5.5.2. 1・3人称命令形

アルタイ諸言語の中には1人称命令形、3人称命令形と呼ばれているものを持つ言語がある。1人称単数命令形は「私に～させろ/私は～しよう」、1人称複数命令形は「私たちに～させろ/私たちは～しよう」、3人称単数命令形は「彼に～させよ」、3人称複数命令形は「彼らに～させよ」と訳すことができる。上記の日本語訳では使役と2人称命令の結合で表わされている。言いかえれば、1人称もしくは3人称の人物による行為が実現されるよう、話し手(1人称)が希望し、これを聞き手(2人称)に宣言もしくは要請する、という事態である。そして聞き手がその実現に能力・影響力を持つ場合には、2人称への働きかけという面が強くなり、2人称への命令として機能する。他方聞き手があまり強い影響力を持たない場合、1人称単数では意志もしくは願望の形式と、1人称複数では勧誘の形式と、3人称では希望の形式との、境界や使い分けが問題となる。この点に関して、ツングース諸語ではその境界があって異なる形式が使用されるのに対し、トルコ語及びモンゴル語ではその境界は明確ではなく、連続したものであるようだ(下記の5.5.3.願望法・勧誘法の項を参照)。

したがって1人称及び3人称の命令形は、意志・希望形もしくは希求法（optative）として記述されていることも多い。

	トルコ語	モンゴル語	ツングース諸語 (ナナイ語)
1人称単数命令	- (y) eyim ²	-Я	-gi-ta
1人称複数命令	- (y) elim ²		(-gi-to)
3人称単数命令	-sin ⁴	-Г	-gi-ni
3人称複数命令	-sin ⁴ (-ler ²)		-gi-či

上記のトルコ語の- (y) eyim 及び - (y) elim を構成する e の要素に関して、これを独立の形態素として分析する見方もある。その根拠は、現代語ではあまり用いられないものの、二人称単数の veresin 「与えろ」、三人称の vere という形式があるという事実による。

なおナナイ語では筆者の知る限り1人称複数命令形はほとんど用いられない。

朝鮮語では日本語と同様に使役と命令の組み合わせによって表現される。ただし1人称と3人称では若干その構成が異なっている。

naiga meg-gei ha-ra.

「私が 食べるように せよ」（「私に食べさせよ」：話し手が主導権を持っている場合）

nareur meg-'i-ra.

「私を 食べさせよ」（「私に食事を与えてくれ」：聞き手が主導権を持っている場合）

geu saram'eigei meg'-y-era.

「あの 人に 食べさせろ」

5.5.3. 推量法・願望法・勸誘法

	トルコ語	モンゴル語	ツングース諸語 (ナナイ語)	朝鮮語
推量（～するだろう）	-ir etc. (中立形) - (y) acak /- (y) ecek (ただし主観的な判断である場合のみ)	-х байх (aa)	sainaa (副詞) V	- (eu) r geissda - (eu) r ges'ida
将然（～しそうだ）	-a/-e yaz-	-х нь ээ -маар байна	- (k) iča-/- (k) iča- (テンス-人称)	- (eu) r ges gatda -geiss-
願望（～したい）	-mek/-mak iste-	-х юмсан -Я		-go sipda
意志（～しよう）	- (y) eyim ²		-gojawa/-gujəwə	- (eu) rgei ('yo) （「約束法」と呼ばれている） - (eu) r ges'ida -geiss-
勸誘/提案 （～しよう）	- (y) elim ²		-go (ari) /-gu (əri)	-ja - (eu) bsida

トルコ語の-(y) elim は話し相手を含む場合にも（すなわち包括的一人称複数的にも）、含まない場合にも用いられる。したがって含む場合には勧誘となるが、含まない場合には「(あなた)はどうするかはともかく)我々の方は~しよう」という提案となる(林 1995a : 64)。

モンゴル語の -x юмсан は実現可能性の低い願望の際に用いられる(温品 p.c.)。

モンゴル語の -маар байна は「~しそうになる」の意でも用いられるが、これと同様にナーナイ語の-(k) iča-にもこうした「将然」の用法がある。このことは、近未来の実現が期待される事態に関して、1人称が主語であれば願望となり、3人称が主語となれば将然となるわけであり、その両方に使える形式はこうした人称の違いを越えて意味範囲が展開しているものと考えることができる。

[ナーナイ語]

mii dəgdəgu-iča-i waáčakawa ičəxəmbi.
 「私は 飛ぼうとしている アオサギを 見た」 (Avrorin 1961 : 63)

同様にモンゴル語の-я は意志にも勧誘にも用いられるが、意志は1人称単数、勧誘は1人称複数に関して機能するという違いであって、こうした単複の違いを越えてこの接辞の意味範囲が展開しているものとみることが出来る。日本語の「~しよう」にも同じことがいえる。

ツングース諸語では、願望に関連して、「食べたい」、「眠たい」などの生理的欲求には上記の-(k) iča- (テス-人称) とは異なる、-masi-/ -mosi-/ -musi- (テス-人称) という形式が用いられる。

[ナーナイ語]

ǰə-musi- 「食べたい」、aa-masi- 「眠たい」

諸方言も視野に入れた上で日本語に目をやると、やはり勧誘(1人称複数)から意志(1人称単数)へ、さらには推量(3人称)へと、広い意味範囲に展開している形式を持つ方言と、それぞれの意味範囲に諸形式が分化している方言があることがわかる。

意味	東北・関東	東京	静岡他
推量	イグベー	イクダロー	イク(ズ)ラ
意志		イコー	イカズ(イカザー)
勧誘 消極的			イカマイ
勧誘 積極的			

(上の表は山口 1987 : 136-56 を参考に作製した)

上代の日本語でも、願望と勧誘が同じ形式「な」によって示された（林・安藤 1997 : 958、下記の例も）。

〔願望〕

この岡に 菜摘ます子 家聞か**な** 名告らさね

「この岡で若菜を摘んでいられる娘さん、どこの家の人か聞きたい、名前をおあかしよ」

〔勧誘〕

熟田津に船乗りせむと月待てば潮もかなひぬ今は漕ぎ出で**な**

「熟田津で船に乗り込もうとして月の出を待っていると、潮も満ちて来た、さあ漕ぎだそうよ」

ウチナーヤマトウグチ（標準語習得の過程で沖縄の基層方言の干渉を受けて成立した中間的言語変種）では勧誘形が終助詞「ネ」を伴って話し手の意志の表現に用いられる（真田編 1999 : 28、以下の例も）。

ウチワ ベントー タベ**ヨーネ**「私は弁当を食べるね」

サキニ カエ**ローネ**「先に帰るね」

5.5.4. 五感の異なる感覚によって異なる推量の形式

日本語には、推量の表現に関してその情報の来源、五感の経路によってさまざまな形式があり、使い分けられている。

きつと	にちがいない	
たぶん	だろう/でしょう	
どうやら	みたいだ	
	らしい	[伝聞か、はっきりしない、間接的情報]
雨が降り	ようだ	[視覚以外の感覚による根拠のある推測]
やっぱり	んじゃないかな	
ひょっとすると	かもしれない	
	そうだ	[伝聞、聴覚による推測の一種!?!]
	はずだ	
	んだ	
雨が降り	そうだ	[視覚による推測]

トルコ語でも推量のムードの形式は発達しており、述語につく付属語もいくつもあってその使い分けは難しいという。

モンゴル語、朝鮮語では上記のような日本語の諸形式に近い機能を持った以下のような諸形式が存在する（モンゴル語に関しては温品 p.c.）。

	モンゴル語	朝鮮語
~だろう/でしょう	-х байх (aa)	- (eu) r geissda - (eu) r ges'ida -geiss-
~ようだ	-х (юм) шиг байна	V-諸連体形 ges gatda
~みたいだ		
~らしい	-х бололтой	
~んじゃないかな	-на биз	-ji anh'eurgga
~かもしれない	-ж магадгүй	- (eu) rjido moreuda
~ (連体形) そうだ	-на гэнэ	- (eu) ndago hada
~はずだ	-х ёстой	- (eu) r ges'ida
~んだ		-'a'yaji/-'e'yaji
~ (連用形) そうだ	-х нь (ээ)	- (eu) r ges gatda

ツングース諸語でのこうした推量の形式に関する研究はまだあまり進んでいない。筆者にとってもっともなじみのあるナーナイ語では、推量の形式はあまり発達していない。もっぱら副詞 *sainaa* 「たぶん」が用いられ、動詞は特別な形をとらないことが多い。

5.5.5. 疑問

5.5.5.1. トルコ語における疑問の floating

トルコ語では、疑問の焦点となる語の後ろに疑問小辞 *mi* がくる (林 1989: 1391-92、以下の例も)。

siz dün Murat-la konuş -uyor -du -nuz.
 あなた (は) 昨日 ムラトと話し てい た (あなたが)
 siz dün Muratla konuşuyor *mu*-ydunuz? 「あなたは昨日ムラトと話していたのですか」
 siz dün Muratla *mi* konuşuyordunuz? 「あなたが昨日話していたのはムラトとですか」
 siz dün *mi* Muratla konuşuyordunuz? 「あなたがムラトと話していたのは昨日ですか」
 siz *mi* dün Muratla konuşuyordunuz? 「昨日ムラトと話していたのはあなたですか」

他のアルタイ諸言語及び朝鮮語、日本語にはこうした floating はみられない。ただし日本語の古文における「や」及び「か」は文中に現れ、特に「か」は付いた語のみにその疑問のスコープがかかる点で上記のトルコ語の状況に類似している (後述)。

5.5.5.2. YesNo 疑問文と疑問詞疑問文との対立

トルコ語では YesNo 疑問にのみ疑問助詞を用いる。ただしチュルク諸語の中でもヤクート語

では疑問詞疑問文にも明示的な形式が用いられる（YesNo 疑問文には *duo/dū*、疑問詞疑問文には *-Iy*）。

モンゴル語でも使い分けがある（YesNo 疑問文では *yy / ʏʏ*、疑問詞疑問文では *ᠪᠢᠨ*）。

ナーナイ語では YesNo 疑問文には *=noo/=nuu* を用いるが、疑問詞疑問文には用いない。

ウイラタ語では YesNo 疑問文には *=i* を用い、疑問詞疑問文には *=ka* etc. を、さらに *=ijuu* は両方に使われるようである（池上 1994）。

現代朝鮮語では疑問のマーカ *-ni*、*-(eu)* *bnigga* は YesNo 疑問文にも、疑問詞疑問文にも用いられる。

ga-ni? 「行く？」

mwe-ni? 「何？」

gabni-gga? 「行きますか？」 *mu'ess'i-bnigga?* 「何ですか？」

中期朝鮮語には YesNo 疑問 *-ga*、疑問詞疑問 *-go* という対立があった。

現在でも慶尚道方言では以下のような使い分けがある。

[YesNo 疑問文] *bab meg-na?* 「御飯 食べる？」

[疑問詞疑問文] *mwe meg-no?* 「何を 食べる？」

日本語の丁寧文ではどちらにも「-か」が使える、非丁寧文の疑問詞疑問文では使えない。

行きますか？ これは何ですか？ 行くか？

??これ何か？ ??これは何か？ これ何？／何これ？

琉球語（首里方言）にも対立がある（西岡・仲原 2000 : 39-40、下記の例も）。

クレー フディ ヤイビーミ？ *kuree hudi yaibii-mi?* (YesNo 疑問文)

これは 筆 ですか？

クレー ヌー ヤイビーガ？ *kuree nuu yaibii-ga?* (疑問詞疑問文)

これは 何 ですか？

古文の「や」と「か」の対立もこれに近いものと考えられる（以下の表と例は林・安藤 1997 : 284-5, : 1308-10 によった）。

	意味	「疑問」のかかる範囲	文末用法の接続	疑問語との関係
や	事実の判断を問いかける	文全体にかかる	活用語の終止形	<u>付かないのが普通。</u> 付く場合には疑問語が後にくる
か	わからない語を単純に問う	付いた語のみにかかる	活用語の連体形	<u>付くのが普通。</u> 疑問語が前にくる

いづれの山か天に近き (竹取) [疑問語との関係]

信濃やいづこ [疑問語との関係]

ありやなしや [YesNo 疑問文での使用]

我が振る袖を妹は見つらむか「私が振る袖を妻はみただろうか (たぶん見なかったろう: 否定的な答を前提としている)」

妹や見つらむ「妻は見たであろうか (たぶん見たであろう: 肯定的な答を期待している)」

5.6. 否定

5.6.1. 動詞の否定とコピュラ文の否定と存在の否定

	動詞の否定	コピュラ文の否定	存在の否定
トルコ語	V-ma- (ただし中立形の否定は V-mez であり、他方否定の副動詞-meden は対応する肯定形がない)	N deđil	N yok
モンゴル語	V-形動詞語尾-гүй (V-хгүй, V-даггүй, V-аагүй, V-сангүй, V-мааргүй)	N биш	N байхгүй N алга N байдаггүй (強意・恒常的否定) N үгүй (まれだが、主に対句・慣用句で)
ツングース諸語	主に否定動詞 ə- による	コピュラ (存在動詞 bi-) の否定による	N асса, аасін, аңси, мааки, абаа, көwө, анаа
朝鮮語	'an V V-ji 'anh-da (不可能は mos V V-ji mos ha-da)	N=ga/'i 'ani-da	N=ga/'i 'ebs-da
日本語	V- (a) na-i (形容詞変化)	N=de=wa=na-i /=jyana-i (形容詞変化)	N=ga na-i (形容詞変化)

中央アジアのチュルク諸語におけるコピュラ文の否定では、コピュラの否定 (古代チュルク語 *är-mäz*) に由来する形式が現在も用いられている (菅原 p.c.)。

モンゴル語のコピュラ文の否定に用いられる **биш** は、かつて用いられていた存在動詞 **bü-** に否定要素 **-ši** がついてできたものである (温品 p.c.)。中期蒙古語の存在動詞には **a-** と **bü-**

があり、現代語の **ажээ, билээ** に残存している。のちにこれらは元々「立ち止まる」等の意味であった **байх** に取って代わられた。他方で現在でも **байх** 「やめる(他動詞)」が用いられている。現在のモンゴル語は後置型の否定(V-形動詞語尾-гүй)となっているが、かつては前置型の否定小詞(**ülü, ese**)も用いられた(風間 1992: 257)。

多くのツングース諸語で、動詞の否定では否定動詞を用い、否定される動詞は形動詞になって否定動詞の後ろに置くやり方がみられる。フィンランド語等をはじめとするウラル諸語にみられる否定動詞を思い起こさせる。

[オロチ語]

ə-si-mi

mutə-jə.

否定動詞語幹-現在形動詞-1人称単数 できる-形動詞 「私はできない」

[エウエン語]

ə-sə-m

xaa-r

否定動詞語幹-定動詞-1人称単数 知る-形動詞 「私は知らない」

例外はナーナイ語と満州語だが、これらが後置型の否定に転じた背景にはモンゴル語の影響が考えられる(池上 1979: 347-9)。

mii saa-rasim-bi.

私 知る-否定現在-1人称単数 「私は知らない」

ツングース諸語の名詞・形容詞の否定は存在の動詞兼コピュラである **bi-** の否定形による(ただし肯定・現在ではコピュラを用いない、この点に関してはトルコ語及びモンゴル語と同様である)。他方存在の否定では存在の動詞の否定を使わず、不変化の特別な語を用いるが、ツングース諸語間でその形式はさまざまである(エウエン語 **ačča**, ネギダール語 **aač̣in**, ウデヘ語 **anči**, オロチ語 **maaki**, ナーナイ語 **abaa**, ウルチャ語 **kəwə**, ウイルタ語 **anaa** など。風間 1998b: 64-5 も参照されたい)。

5.6.2. 欠格的形式

ツングース諸語のいくつかでは、「～なしで」という意の句では、名詞が否定と呼応する接辞 **-la** をとるが、この正体は明らかでない(処格に似ているが異形態の現れが異なる (**-n** 終わりの名詞で **-dola** とならない)、風間 1997: 110-1)。

ウイルタ **asi-la anaa nari.**

妻の ない 人

ウデへ *abuga-la anči*
 父 なしの

他のアルタイ諸言語及び日本語、朝鮮語にこのような形式はない。

5.6.3. 禁止

トルコ語	V-ma
モンゴル語	битгий V / V-аарай/V-аач 及び бүү V
ツングース語	否定動詞の特別な形 ə-ji V <small>(ただしネギダール語は ə-xəl V、満州語はumə V)</small>
朝鮮語	V-ji ma/mar'a ('yo) (<mar-「止める」)
日本語	V- (r) una

トルコ語の禁止の形は、否定で拡張された動詞語幹による命令形とみることができる。すなわち禁止の事態が形の上でも否定の命令形で示されていることになる。

チュルク諸語の中でもチュヴァシ語の禁止形は小詞 *an* を動詞に前置する(庄垣内 1989 : 872)。ただしこれはウラル諸語(ウドムルト語)からの影響で生じたものである可能性がある(庄垣内 1989 : 872)。

モンゴル語の *битгий* は、歴史的にはかつて用いられた存在動詞に現在でも用いられている命令形が接続して(< *bü-tügei*) 成立したものである(温品 p.c.)。

日本語の古文においては、禁止を示すのに不連続形態素「なーそ」が用いられた。現在も長野方言の「なな行っと」に残存する。以下の記述は林・安藤(1997 : 958-9)にもとづく。

上代では「雪なたなびき」のように「な」が単独で禁止を表わした。平安時代には、「過ちすな」も現れ、「なーそ」は「～してくれるな」と優しくとめる表現だが、「な」を文末にいと、自分より地位の低い人に対して強く禁止する意となる。

5.7. 可能・許可・義務

	トルコ語	モンゴル語	ツングース諸語 (ナナイ語)	朝鮮語	日本語
能力可能 ～状況可能 ～許可	- (y) abil- /- (y) ebil- -il/-in/-n- -se-人称 olmak	-ж чадах -ж болох -ж амжих	-mi mutə- -mi korpi- -mi aja	-r jur 'arda -r su 'issda -'a/'e=do doida	- (rar) eru /- (r) eru -te=mo ii
義務	-malı/-meli	-х хэрэгтэй -хгүй бол болохгүй -лгүй болохгүй	-mi aja -gila/-gilə- -ori/-uri	-'a='ya/'e=y e hada/doida	- (r) u=beki=da - (a) na-kereba nar-ana-i
不可能	- (y) ama- /- (y) eme-	-ж чадахгүй -ж болохгүй -х(ийн) аргагүй	-mi mutəəsi	mos- -ji mos-hada - (eu) r su 'ebsda	- (rar) enai /- (r) enai
不許可	～ olmaz	-ж болохгүй	-mi açaasi	-myen an-doida /-'aseneun an-doida /-'eseneun an-doida	-te=wa ikenai

可能・不可能、義務などこれらの表現では分析的な表現が多く用いられていることがわかる。他方、接辞によって統合的に示されるものは、トルコ語に多くあり、モンゴル語にはないことがわかる。

トルコ語の-(y) abil/- (y) ebilは、歴史的には副動詞形に bil-「知る」が接続することによって成立した。能力可能の意で用いられる。他方いわゆる受身形の -il/-in/-n- は中立形を後ろにしたがえて状況可能の意で用いられる。このような受身形の否定は、状況不可能、もしくは禁止の状況で用いられる。

モンゴル語の -ж чадах は能力可能及び、一部の状況可能（時間やお金があつて、できる）の場合に用いられる。-ж болохは許可・不許可によく用いられるが、「その魚は食べられる」などの場合のように、可否が主体の能力にいったい関係がなく、対象物の状態にのみ関係がある場合に、用いられる。-ж амжих は時間があつてできる場合に用いられる。

ナーナイ語の **-mi korpi-** は時間があってできる場合に用いられる。

朝鮮語の不可能の形式の使い分けは、油谷他 (1993 : 724) によれば以下のようなものである (一部改変)。

-ji moshada と **-(eu) r su 'ebsda** は文章体・会話体共に用いることができるが、**mos V** はおもに会話体に用いられる。また、**-ji moshada**、**mos V** は本来的に能力がなくてできないことを、**-(eu) r su 'ebsda** は能力はあるがなんらかの条件によって一時的にできなくなったことを意味し、**-(eu) r jur moreuda** は経験・知識・技術などがなくてできないことを意味する。

日本語の古文にみられる不可能の形式「えーず」の「え」はア行下二段活用動詞「う (得)」の連用形「え」が副詞化したものであり、したがって上代には肯定形も用いられた (御船 **え** 進みき「お船はうまく進むことができた」という (林・安藤 1997 : 209)。

日本語の諸方言には能力可能と状況可能を区別するものが多い (以下の表は柴田編 1975 : 94-5 にもとづいて作成した)。

	能力可能	状況可能
札幌	書ケル	書クニイイ
近畿・中国・四国	ヨ一書ク	書ケル
福岡・佐賀	書クル、書キキル	書カルル
首里	書キューシュン	書キキリユン

大分方言では不可能に以下のような三種類の区別がある (佐藤 2002 : 184 による)。

タベ**キ**ラン「食べる事ができない」

アユのうるかはすかんき一、たべきらん

「アユのうるかは嫌いだから食べることができない」

タベ**ラ**レン「食べてはいけない」

そん豆腐はくされちよるき一、たべられん

「その豆腐は腐っているから、食べてはいけない」

タベ**レ (レ)**ン「食べたくない」

腹いっぺーじ、もうたべれれん

「腹いっぱい、もう食べたくない」

5.8. 形動詞・副動詞 (きれつづき)

5.8.1. 連体修飾での底の名詞 (Head Noun) による対立

トルコ語では主語を底の名詞とする連体修飾節と、目的語 (より正確には非主語) を底の名詞とする連体修飾で異なる動詞の形式を用いる。中期朝鮮語でもやはり異なる動詞の形式を用いることがある。

アルタイ諸言語の3グループ(チュルク、モンゴル、ツングース)、及び朝鮮語、日本語の文法は本当に似ているのか

トルコ語での区別は以下のようなものである(- (y) an² vs. -dik⁴/-tik⁴、及び形動詞としての- (y) ecek, -miş, -er/-ir/-r)。

oku-yan çocuk	「読む(読んだ)子供」
oku-duğ-um kitap	「私の読んだ本」(1人称)
oku-duğ-un kitap	「君の読んだ本」(2人称)
çocuğun oku-duğ-u kitap	「子供の読んだ本」(3人称)

例えば oku-duğ-um kitap「私の読んだ本」にみられるこうした構造は、oku-duk kitab-um のように通常の所有構造にみられるような、名詞の方に所属人称接辞がついた構造から、動詞の主語を明示するために、動詞の方へ人称接辞が移動することによって、歴史的には成立してきたものと考えられる(菅原 p.c.)。

なおトルコ語におけるこの対立には、主語が動詞と一体化している場合や無人称文に見られる例外があり、その使い分けの条件に関する統一的な説明はなお今後の課題である(菅原 p.c.)。

またこの対立はトルコ語においては顕著であるが、他のチュルク諸語では必ずしも明確には対立していない状況がある(菅原 p.c.)。

中期朝鮮語での区別は以下のようなものである。

meo·gun bab	「食べた御飯」第IV語基+ N
meo·geun saram	「食べた人」第II語基+ N

他のアルタイ諸言語及び日本語では、このような対立は見られない。

5.8.2. 形動詞、副動詞等の「機能」

もし文の中心となる述語として使われる動詞形(ふつう以下にみる言語では文末にくる)を定動詞、名詞を修飾する機能を持つ動詞形を形動詞、名詞と同様に働く動詞形を「名動詞」(一般的な用語ではないがここで提案するものである)、動詞等による述語を修飾する動詞形を副動詞と呼ぶことにすれば、アルタイ諸言語(特にモンゴル語とツングース諸語)で一般に言われている形動詞は機能的観点からはむしろ定・形・名動詞と呼ぶべきものであり、これに対立する定動詞と副動詞がある。他方朝鮮語の半言(banmar)及び連用形に観察される形式は定・副動詞、連体形は形動詞ということになるだろう。日本語の連体形はかつては定・形・名動詞、現在の連体・終止形は定・形動詞、連用形は副・名動詞、ギリヤーク語の説述形(服部 1944)は定・副動詞といえるだろう。

印欧語の研究の中で発達してきた旧来の言語学の用語をそのまま持ちこんで、こうしたアルタイ型言語における名動詞を動名詞、形動詞を分詞と呼ぶことには問題が多いと考える。印欧語の動名詞及び分詞は動詞としての力を大きく失っているが、アルタイ型言語の形動詞や副動詞はそうではない。印欧語では接続詞及び関係代名詞が発達しているのもっぱら定動詞形を用いて文を構成していくことができるが、アルタイ型の言語ではそれらが発達していない分、

形動詞や副動詞が多用される。以下にみるようにその種類も多い（特に副動詞は多い）。

	トルコ語	モンゴル語	ツングース諸語 (ナナイ語)	朝鮮語	日本語
名動詞	-mek ² , -me ²	—	—	-(eu)m, -gi	—
定動詞	-di ⁴ / ⁴ -ti ⁴ -iyor ⁴	-на ⁴ -жээ ⁴ / ⁴ -чээ -лаа ⁴ -в	-(r)a(n)/-(r)ə (n) -ka/-kə	-(neu)nda -(eu)bnida -(eu)bdida	—
副動詞	-(y)ip ⁴ -(y)e ² -(y)e ² -(y)erek ² -meden ² (1) -cesine ² -mek-ten-se ² -meden ² (2) -tikçe ⁴ /-dikçe ⁴ -(y)eli ² -(y)ken	-нгаа ⁴ -хаар ⁴ -вал ⁴ / ⁴ -бал ⁴ /-хул ² -маажин ⁴ -хлаар ⁴ -магц ⁴ -тал ⁴ -нгуут ² -ж/ ⁴ -ч -н -аад ⁴ -вч	-mi (単数) -maari/-mæri (複数) -pi (単数) -paari/-pæri (複数) -raa/-ræ/-daa/-dæ -dala/-dələ -očia/-učia-人称 -go/-gu-人称 -i-ji-人称 gəsə	-go -'ase/'ese -gena -gedeun -gei -(eu)mye -(eu)myen -(eu)myense -(eu)meuro -(eu)ni -(eu)nigga -(eu)njeug -(eu)rye -(eu)ryego -dorog -deni -derado -doi -ja -neunde -jiman -'ado/'edo -daga etc.	-(i)te -(i)nagara -(r)uto -(r)eba -(i)tara =node =noni =nara =ga =kara =keredo mo
副・名動詞	-(y)ince ⁴ (-inceye kadar 「～するまで」 では名動詞的)	—	—	—	-(i)

副・定動詞	-se-人称 (定動詞用法は願望の意で。副動詞とは認めない立場もある)	-саар ⁴ (ただし定動詞の用法に関しては, байнаの省略とも考えられる)	—	-’a/-’e -ji -neunde etc.	
形動詞	—	—	—	-neun -(eu)n -(eu)r -den	—
形・名動詞	-(y)en ² -tik ⁴ /-dik ⁴	-гч	—	—	—
形・定動詞	-miş ⁴	—	—	—	-(r)u -(i)ta
形・名・定動詞	-(y)ecek ²	-даг ⁴ , -х(定動詞の場合、後続要素を必要とする) -aa ⁴ (基本的に後続要素が必要)	-i/-rii/-dii -xan/-kin	—	—
形・定・名・副動詞	—	-маар ⁴ , -сан ⁴ (付帯状況を示す副動詞的用法がある)	—	—	—

中期朝鮮語の連体形には形動詞的（名詞的）用法があったという（もっぱら格接辞を伴って用いられる、下記の例は龍飛御天歌より）。

威化振旅hasin-aro 與望’i modjlvana ’onan-ar bosigo

「～が 来たところ、(それを)見て」

日本語の八丈方言では終止形と連体形（「書こ人」のようになる）の間に形の上での対立がある。これは万葉集にも例があり、東国方言の古い姿である可能性がある。

5.8.3. 複文における主語の転換と維持

日本語における「私は太郎が来たとき寝ていた」のような文、すなわちいわば「S1 S2 V2 VI」のような構造の文では、どちらの名詞がどちらの動詞の主語なのか、わかりにくくなる可能性が考えられる。日本語や朝鮮語では=ha と =ga、- (n) eun と -i/-ga のような対立がこの可能性を回避するのに役立っていると考えられる（したがって「私、太郎、来たとき寝ていた」とするとそのわかりにくさははっきりする。他方「太郎来たとき私寝ていた」のような語順にすれば問題はなくなる）。

たけしは服を脱ぐと、ハンガーに掛けた（ハンガーに掛けたのはたけし）

たけしが服を脱ぐと、ハンガーに掛けた（ハンガーに掛けたのが誰かははっきりしない）

しかしアルタイ諸言語では主題を明示的に表示する要素はそれほど頻繁に用いられない。ではどうやって上記の分かりにくさを回避しているのだろうか？

日本語の副動詞の中には、-nagara など主語の転換（すなわち、主節とは異なる主語をとる）を許さないものもあり、このこともやはりわかりにくさの可能性を回避するのに役立っていると考えられる。

彼が皿を洗って、私がそれを拭いた

*彼が皿を洗いながら、私がそれを拭いた

他の言語でもやはり主語の転換を許す副動詞と許さない副動詞に分かれているようだ。さらに副動詞に主語の数や人称を表示するものもある。このことを次の 5.8.3.1. で考察する。北米のアルゴンキン諸言語などにおける指示転換（Switch reference）は、同主語であるか異主語であるかを専用の要素で明示的に表示するものであるが、これに対してこうした言語の副動詞が示す上記のような特徴は、いわば隠れた（間接的に機能する）指示転換といえることができる。

さらに、使役や受身を用いて従属節中の主語を転換し、主節と同じ主語にそろえることによってわかりにくさを回避する方法もある。これについてはすでに受身や使役の項で考察した。

他方モンゴル語でもっとも顕著に観察されることだが、従属節中の主語を斜格で表示することによって上記の分かりにくさを回避する方法もある。これについては 5.8.3.2. で考察する。

指示転換の方が、いわば V2 によって上述のわかりにくさを回避するものであるとすれば、従属節中の主語が斜格をとることはいわば N2 によって上述のわかりにくさを回避するものであるといえよう。

5.8.3.1. 主語を転換できる副動詞と転換できない副動詞

トルコ語においての以下の記述は勝田（1986：153）にもとづく。

まず先の表にあげた副動詞のうち- (y) ip⁴, - (y) e² - (y) e², - (y) erek², -meden² (1) 「～せずに」、-cesine², -mek-ten-se² は主語の転換を許さない、つまり従属節自身の主語を持

たず、その動作主は主節と同じでなければならない。

他方 *-meden*² (2)「～しないうちに」、*-tikçe*⁴/*-dikçe*⁴, *-(y) eli*², *-(y) ken* では、主語は同一であっても、異なってもよい。ただし主語が異なる場合は、副動詞に対して主語を立てなければならない。

このようにトルコ語の副動詞は一般に人称を示す要素をとらないが、条件副動詞-*se* だけは例外で、過去につくのと同一人称接辞をとる。条件節と主節の主語は同じであっても異なってもよいが、同じであっても条件形の人称接辞を省略することはできない(林 1995a: 189、例も)。

eksprese *yetiş-se-m* *saat onda* *İstanbul'a* *varırım.*
 「急行に 間に合えば(私が) 十時に イスタンブルに 着きます(私は)」

ここで条件形の人称を落とせば、条件節の主語は3人称の人物と解釈される。

次にモンゴル語の副動詞であるが、これは以下の四つのグループに分けることができる。

まず *-нгаа*⁴, *-хаар*⁴ は常に主節と同じ動作主をとり、独自の主語を持たない。次に *-вал*⁴/*-бал*⁴/*-хул*², *-маажин*⁴, *-хлаар*⁴ は場合によっては主節とは異なる主語をとることがあり、その場合その主語は対格をとる。*-магч*⁴, *-тал*⁴, *-нгуут*² もやはり場合によっては主節とは別の主語をとることがあり、その場合対格をとる。他方上記の二つのグループとは異なり、主節と同じ主語の場合には、副動詞の形式の後ろに再帰人称接辞がつくことがある。

би *Монгол руу* *яв-тл-аа* *ажил* *хийнэ.*
 「私は モンゴルへ 行くまで(自分が) 仕事を する」

さらに主節と異なる従属節の主語は、対格形でなく、所属人称要素によって示すこともできる。

бид нар *ир-мэгц нь* *шууд* *явлаа.*
 「我々は 来たら(彼が) すぐに 出発する」

最後に、*-ж/-ч*, *-н*, *-аад*⁴, *-вч* のグループは、主節と対等の節を形成し、その主語は常に主格をとる。もちろん異主語をとることができる。

ツングース諸語でも、副動詞の中には人称を表示するものとしめないものがあり、人称を表示しないものは基本的に主語の転換を許さないのではないかと考えられている(例えばウイльта語についての津曲 1988: 745、ナーナイ語についての津曲 1989: 1459 など)、ただしまだ具体的に証明されたとはいえない。

ナーナイ語などには、先の表中の *-mi* (単数) / *-maari/-mæəri* (複数)、及び *-pi* (単数) / *-paari/-pæəri* (複数) にみられるように、主語の数のみを表示する副動詞もある。

満州語の副動詞はどれも人称をとらないが、やはり基本的に同主語をとるものと異主語をと

るものに分かれ、使い分けがある。これについては、『満州実録』巻1～4に基づく研究（津曲 1982）がある。

朝鮮語について、野間（1997：114）によれば、- (eu) myense, -'ase/-'ese「様態」は従属節内に独自の主語を持たないが、- (eu) myen-, 'ase/-'ese「原因、理由」、- (eu) niggaは独自の主語を持ち得るという。これらだけでなく、全ての副動詞は独自の主語を持つか否かが決まっているが、節の機能を考慮する必要があるという。詳しくは野間（1997）を参照されたい。

日本語に関して、- (i) te, - (i) nagara はいわゆる南（1974）のいうA類で、独自の主語を持たない。- (r) uto, - (r) eba, - (i) tara, =node, =noni, =nara は同じくB類で、独自の主語は持ちうるが、独自の主題は持ち得ない。=ga, =kara, =keredomo はC類で、独自の主語も主題も持ち得るうものである。

5.8.3.2. 従属節中の斜格主語

トルコ語では、連体修飾節の主語は属格でしか現れない（一部例外的なものでのみ主格が用いられる）。形動詞の名詞的用法、すなわち Head なしの、形動詞による名詞節の主語も基本的に属格である（まれに主格をとることもある）。

他方朝鮮語、日本語における連体修飾節の主語は、主格と属格がともに現れる（日本語でいういわゆる「ガノ交替」）。

[朝鮮語]

go'yang'i-'eui	'uneun	sori	
猫の	鳴く	声	
na-'eui	sarden	gohyang	
私の	住んでいた	故郷	（例はともに油谷他 1993：1418）

しかし朝鮮語の場合、次に見るような語順の転換が可能であるために、連体修飾節中の主語と言えるのかどうかに関係がある（野間 p.c.）。

'uneun	go'yang'i-'eui	sori	
鳴く	猫の	声	
sarden	na-'eu	gohyang	
住んでいた	私の	故郷	

つまり go'yang'i-'eui「猫の」や na-'eui「私の」は名詞に直接かかっている単なる修飾要素であるとも考えられる。この点で日本語と朝鮮語の状況は大きく異なっている。

モンゴル語ではさらに属格の他に対格による斜格主語がある（最近の考察としては例えば水野 1995 がある）。

ただし同主語の場合、主語は一つしか用いられない。副動詞に再帰形の使用は同主語を強調する。

би	хичээлээс	ирмэгцээ	цайгаа	уусан.
私は	授業から	戻って来るとすぐに-自分の	昼ごはんを	食べた

異主語の場合、従属節には対格(不定の時は不定対格(-φ)、有生名詞は対格、無生名詞は不定対格になることが多い)か属格が用いられる。属格は連体修飾節及び名詞的に働く形動詞節でよく用いられる。

түүнийг	гэртээ	харихад	бусад	нь	яриагаа	үргэлжлүүлжээ.
彼を	家に	戻って来たとき	他の者たちは	話を		続けていた

Доржийг	ялсан	гэж	бодсон.
ドルジを	勝った	と	思った(人々は)

Дорж	ялсан	гэж	бодсон.
ドルジは	勝った	と	思った

ЭНЭ айлын	нохойг	хуцвал	чи	гараарай.
この家庭の	犬が	吠えたら	おまえ	出て来てくれ

МИНИЙ	тарьсан	цэцэг	маш	гоё	ургажээ.
私の	植えた	花は	とても	きれいに	育ったなあ

ТАНЫ	ХЭЛСЭН	ЧИНЬ	ЗӨВ	байна.
おまえの	言ったこと	おまえのは	正しい	

ツングース諸語でも、満州語でやはり連体修飾節などで属格の斜格主語が、間接引用文(alah-「告げる」、donji-「聞く」、gūni-「思う」、hendu-「言う」、se-「と言う」に導かれる)で対格の斜格主語が用いられる(久保 1981)。

geren hafasa	simbe	sain	seme	alaha	bihe,
「衆 官人等(は)	汝を	よい	と	告げて	いた」

ナーナイ語では直接引用文で対格の斜格主語が用いられる(Avrarin 1981: 159)。

daña	mimbiwə	хэмэ	osiroom	unkini.
「祖母は私に		黙って	いると	言った」

トルコ語でも、その統語構造をどのように考えるかは問題だが、次のような例が見出される(菅原 p.c.)。

onu	akıllı	buldum.
「彼を	賢いと	思った」

朝鮮語では、思考動詞等の引用節の主語であっても、対格にすることはできない。

geu	saram-'i/*-'eur	'igyesseur	gerago	sainggaghi.
「その	人が/*を	勝った	のだと	思った」

中期朝鮮語の従属節中には対格の斜格主語があった。例は訳譜詳節より。

'inAn	sur- <i>eur</i>	ha'isnAn	酒泉'euro	gadi	modhomeur	hanAda	hanida
これは	酒を	たくさんある	酒泉に	行かれ	ないことを	恨むと	言ったのだ

古代日本語におけるミ従属節（形容詞のみ）中においては、対格主語が用いられた。これは主に上代の用法である（林・安藤 1997：1222、以下の例も）。この「を」の扱いは間投助詞とされている、ただし現れないこともある

瀬 ~~を~~ はやみ（瀬がはやいので）

山深み（山が深いので）春とも知らぬ松の戸に

6. 結語

以下に本稿でとりあげた5つの言語及び言語群の間にみられた類似点と相違点を整理する。

《アルタイ諸言語の3グループにおける類似点》

無標の主格 (1.6.6.)、無標の転成格 (1.6.10.)、所有／存在の接辞 (1.7.1.)、相関構文 (3.4.)、受身の非人称的性格 (5.1.1.)、3人称命令形 (5.5.2.)、人称要素をとる副動詞 (5.8.3.1.)

《トルコ語とモンゴル語と日本語の類似点》

「気づき」を示す過去形 (5.4.2.)

《モンゴル語とツングース諸語と朝鮮語の類似点》

受身にも使役にも用いられる形式 (5.1.2.2.)

《モンゴル語と朝鮮語と日本語の類似点》

感情形容詞の人称制限 (4.3.)、存在動詞によるアスペクトでの現在進行と結果継続の対立（西日本の日本語で、5.3.1.）、ガノ交替 (5.8.3.2.)

《トルコ語とモンゴル語の類似点》

複数形式が数詞と共起しないこと (1.3.6.4.)、子音交替を伴う重複 (1.3.3.)、無標による不定対格 (1.6.7.1.)、奪格の部分格的用法 (1.6.7.1.)、「1」を用いた不定表現 (3.2.)、二重使役形 (5.1.2.1.)、屈折形式による習慣体 (5.3.2.)、部分重複と子音添加による形容詞の強調 (4.2.)

《トルコ語と朝鮮語の類似点》

連体修飾での底の名詞による対立 (5.8.1.)

《モンゴル語とツングース諸語の類似点》

アルタイ諸言語の3グループ(チュルク、モンゴル、ツングース)、及び朝鮮語、日本語の文法は本当に似ているのか

数の一致(元朝秘史蒙古語と一部のツングース語で、1.3.6.3.)、再帰人称接辞とその用法(1.8.2.)、人称代名詞の斜格語幹(2.1.)、一人称複数における包括形と除外形の対立(2.2.)

《ツングース諸語と朝鮮語の類似点》

重複による複数の不使用(1.3.3.)

《朝鮮語と日本語の類似点》

発達した助数詞(1.5.1.)、存在の場所と動作の場所の格における対立(1.6.9.5.)、高頻度の主題表示要素(1.9.1.)、敬語(2.4.)、主題主語構文(いわゆる対象語)による感情述語構文(5.1.4.3.)、ガヲ交替(5.1.4.4.)

《トルコ語独自の特徴》

属格所有構文(1.8.3.)、「1」による不定表示(1.9.2.)、派生接辞による「再帰」(5.1.)、疑問形式のfloating(5.5.5.1.)、派生接辞による「義務」(5.7.)

《モンゴル語独自の特徴》

性(1.2.)、従属節中の対格主語(5.8.3.2.)

《ツングース諸語独自の特徴》

譲渡可能(1.1.)、双数(1.3.4.)、指大辞(1.4.)、属格の欠如(1.7.2.)、指定格(1.6.8.)、沿格(1.6.9.2.)、明示的な不定対格(1.6.7.1.)、派生接辞による豊富なアスペクト形式(5.3.)、推量の形式が未発達であること(5.5.4.)、否定動詞(5.6.1.)、欠格的形式(5.6.2.)

《朝鮮語独自の特徴》

複数形式(近似複数の意味が無い(1.3.2.)、floatingする(1.3.5.2.))、頻繁な主格の重複(1.6.11.)、時間の起点格(1.6.9.4.)、属格の物主代名詞的用法の欠如(1.7.6.)、疑問詞が直接不定表現に用いられること(3.2.)、特別な全部否定の形式(3.3.)、形容詞の動詞的性格(歴史的にも、4.1.)

《日本語独自の特徴》

名詞のトコロ性(1.5.3.)、有生/無生による主格や属格の対立(主に琉球語で、1.7.2., 1.7.5.)、係り結び(1.9.3.)、間接受身文(5.1.1.1.)、使役及び受身から独立した自他対応(5.1.3.2.)、

以上のように整理してみたが、実際には上記の諸特徴は同列に並べられるものではないだろう。すなわち重要さや珍しさの度合いはそれぞれ異なっていることだろう。他方、歴史的に跡をたどれるものと、たどれないものの違いもあろう。すなわち、もとは類似していたがそれぞれの言語での変化によって互いに違いを広げていった点や、逆にお互いへの影響をはじめとする原因から似てきた点もあるだろう。こうした吟味や評価を詳しく行なって、上記の諸特徴をさらに整理していく必要があるが、それは今後の課題としたい。まずはこれを一つの目安として、方言を含めた各言語の記述研究をより深く進めていく必要がある。また本稿では取り上げることのできなかつた文法カテゴリー等についても対照を行っていく必要がある。このような研究はまだ出発点に立ったばかりであるといえよう。

系統問題に関していえば、上記のように類似点も相違点もそれぞれ多くあり、現時点ではや

はり何とも言えないというべきだろう。しかし、系統関係を仮定しなければどうにも説明し難いような珍しい共通点（例えば、タガログ語とクメール語にある接中辞のような）は、現在のところ一つも見出せていない。

次に類型論的観点からの意義について再度触れておく。本稿の中で何度か触れたが、類似点とした特徴のうちのいくつかは内的な（必然的な）関連を持っていると考えられる（例えば、形容詞の名詞的性格と形動詞の機能、再帰人称の存在と指示転換、修飾語-被修飾語の語順と発達した副動詞の体系、などである）。これらの研究を進めていくことで、「アルタイ型の言語類型とはどのようなものであるのか、」ということを経々に明らかにしていくことができるのではないかと考えている。

参考文献

- 秋山正次・吉岡泰夫（1991）『暮らしに生きる熊本の方言』熊本：熊本日日新聞社。
- 池上二良（1979）「満州語とツングース語—その構造上の相違点と蒙古語の影響」『東方学』58:143-53（『満州語研究』1999 東京：汲古書院 所収：344-58）。
- （1980）「日本語の名詞語根にあらわれる一種の母音交代の由来について」『京都産業大学国際言語科学研究年報』1（3）：99-103。
- （1993）「ウイльта語代名詞とその変化」『札幌大学女子短期大学部創立 25 周年記念論文集』：363-71。
- （1994）「樺太のウイльта語の感嘆・疑問その他の語尾について」『北海道方言研究会 20 周年記念論文集集 ことばの世界』北海道方言研究会：158-67（『ツングース語研究』2001 東京：汲古書院 所収：94-109）。
- （1997）『ウイльта語辞典』札幌：北海道大学図書刊行会。
- 池上二良・津曲敏郎（1990）『北川源太郎筆録「ウイльтаのことば」（3）』北海道教育委員会。
- 池田哲郎（2000）『アルタイ語のはなし』東京：大学書林。
- 一ノ瀬恵（1992a）「環北太平洋の諸言語の形態法のタイポロジー」『月刊言語』21（8）：82-86，東京：大修館書店。
- （1992b）「第 13 章 モンゴル語の語構成における非接尾辞的手法：北方の接尾辞型諸言語との対照をつうじて」宮岡伯人編『北の言語：類型と歴史』279-96 東京：三省堂。
- 上原 久（1960）『満文 満州実録の研究』東京：不昧堂書店。
- 梅田博之（1989）「朝鮮語」亀井孝・河野六郎・千野栄一編『言語学大辞典』第 2 巻：950-80 東京：三省堂。
- （1990）『スタンダードハングル講座 3 解釈』東京：大修館書店。
- （1991）『スタンダードハングル講座 2 文法・語彙』東京：大修館書店。
- 梅谷博之（1998）『モンゴル語の使役』東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻言語学専門分野修士論文。
- （1999）「現代モンゴル語の使役を表す接辞が連続して現れる場合」『日本言語学会 第 118 回大会予稿集』日本言語学会。
- 小沢重男（1978）『モンゴル語の話』東京：大学書林。

アルタイ諸言語の3グループ(チュルク、モンゴル、ツングース)、及び朝鮮語、日本語の文法は本当に似ているのか

- (1983)『現代モンゴル語辞典』東京：大学書林。
- 岡野信子(1988)『福岡県 ことば風土記』福岡：葦書房。
- 風間伸次郎(1992)「接尾型言語の動詞複合体について：日本語を中心として」宮岡伯人編『北の言語：類型と歴史』：241-60 東京：三省堂。
- (1994)『ナーナイ語の「一致」について』北大言語学研究報告 第5号, 北海道大学文学部言語学研究室。
- (1997)「ツングース諸語における部分格」『環北太平洋の言語』第3号, 宮岡伯人・津曲敏郎編：103-20。
- (1998a)『ナーナイの民話と伝説4』 ツングース言語文化論集 12, 北方ユーラシア言語文献資料 第3分冊 千葉大学。
- (1998b)「ツングース諸語における基礎語彙 A(動詞・形容詞編<承前>)」『北方ユーラシア先住諸民族の言語文化の資料データベース作成とその類型論的研究』研究成果報告書第4分冊』金子享編：45-82 千葉大学文学部。
- (1999a)「ツングース諸語における指定格について」『語学研究所論集』第4号：51-79 東京外国語大学語学研究所。
- (1999b)「アルタイ諸言語のいくつかにみられる所有/存在を示す一形態について」『アルタイ学報』 第9号：93-124 ソウル：韓国アルタイ学会。
- (2000)『ナーナイの民話と伝説5』ツングース言語文化論集 11, 東京外国語大学。
- (2001a)『ナーナイの民話と伝説6』ツングース言語文化論集 15, 文部省特定領域研究(A) 環北太平洋の「消滅に瀕した言語」にかんする緊急調査研究 報告書 A2-005。
- (2001b)「ツングース諸語における譲渡可能を示す接辞について」『環北太平洋の言語』 第7号 文部省特定領域研究(A) 環北太平洋の「消滅に瀕した言語」にかんする緊急調査研究 報告書 A2-002：141-156。
- (2002)「ツングース諸語における「使役」を示す形式について」『環北太平洋の言語』第8号 文部科学省特定領域研究(A) 環太平洋の「消滅に瀕した言語」にかんする緊急調査研究 報告書 A2-012：37-50。
- 勝田 茂(1986)『トルコ語文法読本』東京：大学書林。
- 加藤昌彦(2000)「宇都宮方言におけるいわゆる自発を表わす形式の意味のおよび形態統語論的特徴」『国立民族学博物館研究報告』25(1)：1-58 大阪：国立民族学博物館。
- 門脇誠一(1992)「朝鮮語・日本語と周辺の言語における名詞修飾構造：類別数詞との関係をめぐって」宮岡伯人編『北の言語：類型と歴史』：223-40 東京：三省堂。
- (1998)「言語」梅田博之監修 松原孝俊編『ハンドブック 韓国入門 ことばと文化』：1-68 東京：東方書店。
- 金田章弘(1993)「「二重」表示現象をめぐって—八丈島三根方言を例に— 仁田義雄編『日本語の格をめぐって』：163-89 東京：くろしお出版。
- 亀井孝・河野六郎・千野栄一編(1996)『言語学大辞典』第6巻 東京：三省堂。
- 狩俣繁久(1992)「琉球列島の言語 III 宮古方言」亀井孝・河野六郎・千野栄一編『言語学大辞典』第4巻：848-63 東京：三省堂。
- カルル・メンゲス(1953)大東百合子訳「ツングース文法の諸問題」『季刊 民族学研究』18(3) 日本

民族学会。

- 川口裕司 (1999) 「現代トルコ語の使役構文—その意味と機能—」『言語研究Ⅹ』: 69-96 東京外国語大学。
- 河内良弘 (1996) 『満州語文語文典』京都: 京都大学学術出版会。
- 菅野裕臣・早川嘉春・志部昭平・浜田耕作・松原孝俊・野間秀樹・塩田今日子・伊藤英人共編 (1988) 『コスモス朝和辞典』東京: 白水社。
- 権 在淑 (1992) 『朝鮮語の基本会話』東京: ナツメ社。
- 久保智之 (1981) 「満州語の従属文の主語がとる助詞 i 及び be について」『九大言語学研究室報告』2 : 46-50 九州大学文学部言語学研究室。
- 栗林 均 (1992a) 「モンゴル諸語」亀井孝・河野六郎・千野栄一編『言語学大辞典』第4巻: 517-26。東京: 三省堂。
- (1992b) 「モンゴル語」亀井孝・河野六郎・千野栄一編『言語学大辞典』第4巻: 501-16。東京: 三省堂。
- (1992c) 「モンゴル語」亀井孝・河野六郎・千野栄一編『言語学大辞典』第4巻: 492-28。東京: 三省堂。
- 河野六郎 (1955) 「朝鮮語」『世界言語概説』下巻: 357-439 市河三喜・服部四郎共編。東京: 研究社。
- 斉藤光介 (2000) 「モンゴル語の「受身」について」東京外国語大学言語学研究所 Luncheon Linguistics (言語学動向研究会) 発表資料 (未公刊)。
- 佐藤亮一編 (2002) 『都道府県別 全国方言小辞典』東京: 三省堂。
- 真田信治編 (1999) 『展望 現代の方言』東京: 白帝社。
- 柴田 武編 (1975) 『朝日小辞典 現代日本語』東京: 朝日新聞社。
- 柴谷方良 (1978) 『日本語の分析』東京: 大修館書店。
- 島袋幸子 (1992) 「琉球列島の言語 (沖縄北部方言)」亀井孝・河野六郎・千野栄一編『言語学大辞典』第4巻: 814-29。東京: 三省堂。
- 庄垣内正弘 (1989) 「チュヴァシ語」亀井孝・河野六郎・千野栄一編『言語学大辞典』第2巻: 869-79。東京: 三省堂。
- 鈴木重幸 (1972) 『日本語文法・形態論』東京: むぎ書房。
- ソウル大学校語学研究所 (1988) 『韓日語対照分析』ソウル: 明志出版社。
- 高橋俊三 (1992) 「琉球列島の言語 (与那国方言)」亀井孝・河野六郎・千野栄一編『言語学大辞典』第4巻: 873-82。東京: 三省堂。
- 竹内和夫 (1989) 『トルコ語辞典』東京: 大学書林。
- 玉村文郎 (1985) 『語彙の研究と教育 (下)』日本語教育指導参考書 13 東京: 国立国語研究所。
- 田村健一 (1990) 「満州語の対格における目的語の限定性」『中京大学教養論叢』31 (2) 中京大学学術研究会。
- (1992) 「ツングース語の属格表現」『言語研究』101: 169-70。
- 田村すず子 (1988) 「アイヌ語」亀井孝・河野六郎・千野栄一編『言語学大辞典』第1巻: 6-95。東京: 三省堂。
- 朝克・津曲敏郎・風間伸次郎共編 (1991) 『ソロン語基本例文集』北海道大学文学部。
- 朝鮮語研究会編著 (1989) 『朝鮮語を学ぼう』菅野裕臣監修。東京: 三修社。
- 塚本 勲 (1983) 『朝鮮語入門』東京: 岩波書店。
- 角田太作 (1991) 『世界の言語と日本語』東京: くろしお出版。

- 津曲敏郎(1982)「満州語文語における主語の維持と転換」第83回大会研究発表要旨『言語研究』81: 127-130 日本言語学会。
- (1988)「ウイルク語」亀井孝・河野六郎・千野栄一編『言語学大辞典』第1巻: 745-6。東京: 三省堂。
- (1989)「ナーナイ語」亀井孝・河野六郎・千野栄一編『言語学大辞典』第2巻: 1457-60。東京: 三省堂。
- (1992)「第12章 所有構造と譲渡可能性: ツングース語と近隣の言語」宮岡伯人編『北の言語: 類型と歴史』: 315-26。東京: 三省堂。
- (1993)「ヘジェン語の形態的特徴と満州語の影響」岡田宏明編『環極北文化の比較研究』: 81-92。北海道大学文学部。
- (1996)「中国・ロシアのツングース諸語」『言語研究』110: 177-90。日本言語学会。
- (2001)「1人称複数代名詞の除外/包括性について: 満州語文語の用例をもとに」『環北太平洋の言語』第7号 文部省特定領域研究(A) 環北太平洋の「消滅に瀕した言語」にかんする緊急調査研究 報告書 A2-002: 166-76。
- 寺村秀夫(1968)「日本語名詞の下位分類」『日本語教育』12(『寺村秀夫論文集I』1993くろしお出版に所収 3-20)。
- 西岡敏・仲原穰(2000)『沖縄語の入門 たのしいウチナーグチ』伊狩典子・中島由美協力。東京: 白水社。
- 日本・モンゴル友好協会編(1993)『モンゴル入門』三省堂選書175 東京: 三省堂。
- 温品廉三(1998)『語学王 モンゴル語』東京: 三修社。
- 野田尚史(1991a)『はじめての人の日本語文法』東京: くろしお出版。
- (1991b)「文法的なヴォイスと語彙的なヴォイスの関係」『日本語のヴォイスと他動性』: 211-232。東京: くろしお出版。
- 野間秀樹(1997)「朝鮮語の文の構造について」日本語と外国語の対照研究IV『日本語と朝鮮語』下巻 研究論文編: 103-38。東京: 国立国語研究所。
- 橋本勝監修・谷博之編(1993)『モンゴル語文法・講読』モンゴル語研修テキスト(1) 東京外国語大学 アジア・アフリカ言語文化研究所。
- 橋本萬太郎(1981)『現代博言学』東京: 大修館書店。
- (1989)「中国語」亀井孝・河野六郎・千野栄一編『言語学大辞典』第2巻: 892-906。東京: 三省堂。
- 服部 健(1944)『ギリヤーク』東亜民族要誌資料第一号, 帝国学士院東亜諸民族調査室。
- 服部四郎・山本謙吾(1955)「満州語の一人称代名詞」『言語研究』28: 19-29。日本言語学会:(『服部四郎論文集 2』1987: 432-447。東京: 三省堂所収)。
- 林巨樹・安藤千鶴子編(1997)『古語林』東京: 大修館書店。
- 林 徹(1989)「トルコ語」亀井孝・河野六郎・千野栄一編『言語学大辞典』第2巻: 1383-95。東京: 三省堂。
- (1995a)『トルコ語 文法の基礎』(Ver.2.1) 東京外国語大学語学教育研究協議会。
- (1995b)「現代トルコ語の Possessive Compound について」『東京大学言語学論集』14: 463-79。
- 藤代 節(1992)「第15章 ドルガン語の影響と言語接触」宮岡伯人編『北の言語: 類型と歴史』: 315-26。東京: 三省堂。

- 細川弘明 (1992) 「ピジン・クレオール諸語」 亀井孝・河野六郎・千野栄一編 『言語学大辞典』第3巻:437-66。
東京:三省堂。
- 瀧瀧久治 (1981) 『ウイルタ語辞典』 網走: 網走市北方民俗文化保存協会。
- 松谷浩尚 (1991) 『中級トルコ語詳解』 東京: 大学書林。
- 松村一登 (1992) 「マリ語」 亀井孝・河野六郎・千野栄一編 『言語学大辞典』第4巻:155-64。東京:
三省堂。
- 水野正規 (1995) 「現代モンゴル語の従属節主語における格選択」 『東京大学言語学論集』14:667-80。
- 南不二男 (1974) 『現代日本語の構造』 東京: 大修館書店。
- 山口幸洋 (1987) 『静岡県の方言』 静岡: 静岡新聞社。
- 山越康裕 (2001) 「モンゴル語および近隣諸言語の複数接尾辞と名詞句階層」 『日本言語学会 第123回大会
予稿集』:266-71 日本言語学会。
- 油谷幸利・門脇誠一・松尾勇・高島淑郎 編 (1993) 『朝鮮語辞典』 小学館 韓国・金星出版社 共同編集。
- 渡部みち子 (1992) 「第7章 ギリヤーク語他動詞文の特徴」 宮岡伯人編 『北の言語: 類型と歴史』170-190。
東京: 三省堂。
- 安俊 (1986) 『赫哲語簡志』 北京: 民族出版社。
- 胡增益・朝克 (1986) 『鄂温克語簡志』 北京: 民族出版社。
- 李樹蘭・仲謙 (1986) 『錫伯語簡志』 北京: 民族出版社。
- 清格尔泰 (1991) 『蒙古語語法』 フフホト: 内蒙古人民出版社。
- Avrorin, V. A. (1961) *Grammatika Nanajskogo jazyka II*. Leningrad, Izd. AN SSSR.
- (1981) *Sintaksicheskie issledovanija po nanajskomu jazyku*. Leningrad, AN SSSR.
- Avrorin V. A. i E. P. Levedeva. (1968) Orochskij jazyk. *Jazyki narodov SSSR 5*, Leningrad, AN SSSR.
- Benzing, J.. (1955a) *Die tungusischen Sprachen - Versuch einer vergleichenden Grammatik*,
Abhandlungen der Akademie der Wissenschaften und der Literatur, geistes- und
sozialwissenschaftliche Klasse, Jahrgang 1955, Nr.11, Mainz: Verlag der Akademie der
Wissenschaften und der Literatur in Mainz.
- (1955b) *Lamutische Grammatik*. Wiesbaden: Franz Steiner.
- Boldyrev, B. V. (1976) *Kategorija kosvennoj prinadlezhnosti v tunguso-man'chzhurskikh
jazykakh*. Moskva.: Izdatel'stvo nauka.
- Ikegami, J. (1968) The Oroch third person pronoun *nooni*. *Ural-Altische Jahrbücher*, Band 40
Heft 1-2 82-4.
- (1974) Versuch einer Klassifikation der tungusischen Sprachen. *Sprache, Geschichte und
Kultur der altaischen Völker*.271-2 Berlin: Akademie-Verlag,
- Kolesnikova, V. D. (1966) *Sintaksis Evenkijskogo jazyka*. izd. Nauka, AN SSSR, Moskva-Leningrad.
- Kolesnikova, V. D. i O. A. Konstantinova (1968) Negidal'skij jazyk. *Jazyki narodov SSSR 5*,
AN SSSR: Leningrad.
- Konstantinova, O. A. (1964) *Evenkijskij jazyk*. Moskva-Leningrad.: izdatel'stvo Nauka.
- Kubo, T. (1997) Reduplication Meduplication in Khalkha Mongolian. *Journal of the Linguistic Society
of Japan*,112:66-97 The Linguistic Society of Japan.

- Kullmann, R. (1996) *Mongolian grammar*. Jensco Ltd.
- Kuribayasi, Y. (1989) Accusative marking and noun-verb constructions in Turkish. *Journal of the Linguistic Society of Japan*, No.95 : 94-119, The Linguistic Society of Japan.
- Lewis, G. L. (1967) *Turkish grammar*. Oxford. : Oxford University Press.
- Novikova, K. A. (1968) Evenskij jazyk, *Jazyki narodov SSSR 5*, Leningrad. : AN SSSR.
- Novikova, K. A., Gladkova, N. I., i V. A. Robbek (1991) *Evenskij jazyk*. Uchebnik dlja pedagogicheskikh uchilishsh. Leningrad.
- Onenko, S. N. (1980) *Nanajsko-russkij slovar'*. Moskva. : Russkij jazyk.
- (1986) *Russko-nanajskij slovar'*. Moskva. : Russkij jazyk.
- Poppe, N. N. (1931) *Materialy po solonskomu jazyku*. Leningrad. : AN SSSR.
- Reinhard F. H. (1998) Uyghur. In: L. Johanson and É. Csató (eds.) *The Turkic languages*. London and New York. : Routledge.
- Róna-Tas, A. (1998) The reconstruction of proto-turkic and the genetic question. In: L. Johanson and É. Csató (eds.) *The Turkic languages*. London and New York : Routledge.
- Swift, L. (1963) *A reference grammar of modern Turkish*. Indiana university publications. Uralic Altaic series, vol.19. Bloomington. : Indiana univ.
- Tsintsius, V. I. i L. D. Rishes (1952) *Russko-evenskij slovar'*. Moskva. : Gosdarstvennoe izdatel'stvo inostrannykh i nacional'nykh slovarej.
- Tsumagari, T. (1985) Grammatical outline of Uilta. *Asian and African Linguistics*, ILCAA.
- Vasilevich, G. M. (1958) *Evenkijsko-russkij slovar'*. Moskva.: Gosdarstvennoe izdatel'stvo inostrannykh i nacional'nykh slovarej.

Do the Three Groups of the “Altaic” Languages (Turkic, Mongolic, and Tungusic), as well as Korean, really Resemble Japanese Grammatical Structure?: An Attempt at a Contrastive Grammar Analysis

KAZAMA Shinjiro

Tokyo University of Foreign Studies

Keywords: genealogy, language contact, typology, contrastive linguistics, languages of the Altaic type

Linguists have been debating the genealogical relationship between the three Altaic language groups, Korean, and Japanese for some time. But no one has been able to establish a lexical cognates among the core vocabularies of these languages based on the strict laws of phonetic change, such as the correspondences that have enabled us to assign Armenian to the Indo-European language family.

The basis for hypothesizing a relationship between them, then, must be grammatical similarity. But can these language groups really be considered grammatically similar? Thanks to typological studies carried out in recent years, we now know that languages with a suffixing agglutinative morphology and a subject-object-verb syntax (and the closely related modifier-modified word order) constitute the most common language typology in the world. At the same time, the Indic languages demonstrate that such distinguishing features as word order are easily changed due to external influence. All this suggests that the “grammatical similarities” among languages that share such general features are not very meaningful.

Is it possible to identify more specific grammatical similarities that could not be ascribed to coincidence? In an effort to answer this question, I have endeavored to contrast grammatical forms found in these languages, emphasizing function rather than form.

To contrast forms in detail can also contribute to our understanding of typology. A few years ago, Kamei, Kono, and Chino proposed an “Altaic type” of syntax (1996, 28–9). However, it remains for future studies to illuminate the essential characteristics of this Altaic type. It should be possible to make a significant contribution to such typological research by carefully contrasting grammatical elements in various Altaic languages, which epitomize this type, and analyzing the extent of their similarities and differences.